
Scarlet Stardust

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S c a r l e t S t a r d u s t

【Nコード】

N 1 7 5 9 V

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

その日、夜空を見上げていたフランドール・スカーレットは白色の髪をした少女と出会った。

少女の名は、緋韃ヒカリ。

幻想郷を生きる人々の願いを聞き届けるため、果てなきソラから舞い降りてきた星の子。

フランにとって、初めての友達だった。

願いを聞くため、二人の内緒の夜更かしが始まる。

夜闇を駆け抜け集めた願いは、果たして叶うのか。
そして、あの日フランが流星に祈った願い事とは……？

東方キャラ＋オリジナルキャラの物語です。

独自設定や解釈、キャラの言動など原作と異なる場合があります。
そういったものが苦手な方はご遠慮ください。

序章 遙かなるソラの向こうで（前書き）

このお話は「東方project」を題材とした二次創作です。
作者による独自設定や偏見、解釈等が多々含まれております。
それらが苦手な方はすぐに「戻る」をクリックしてください。

序章 遙かなるソラの向こうで

「ヒカリ大丈夫？ 怖かったら無理して行くことないのよ？」

不安げな表情を見せる母親の前に、ヒカリと呼ばれた^{ブラチナ}白金色の髪の少女はニツと笑ってから答えた。

「大丈夫だよ、お母さん。私はもう立派にお仕事出来るもん」
「でも……」

心配する母親の肩に少女の父親がそつと手を置いた。

「心配し過ぎだよ君は。彼女が自分でこう言っているんだ、信じて送り届けてあげようじゃないか」

「だけど、願いを聞く仕事は大変なのよ？ 命の危険だって」
「だーかーら！ 心配ないって」

少女はポシエットから小さなカードを取り出し両親に自慢するように見せつけた。

「私にはこのお守りがあるもん。危なくなったら、これでドカーン！ ってやつちゃうんだから」

「でもヒカリ、まだ力をコントロールできないでしょう？ 前みたいに怪我でもしたら……」

「やれやれ。これじゃ何時までたってもヒカリが出発できないじゃないか」

父親は小さくため息を一つついてから少女の頭をポンと撫でた。

「ヒカリ、君の担当する幻想郷という場所は、名の通り幻想的で美しい平和な場所だと聞いている。だから危険はないと思う。人の願いを聞くというのはとても大変な仕事だが、一人前の星の子なら、出来るね？」

「もっちゃん！」

「ん。それでこそ私たちの子供だ」

少女はトトトと駆け足で歩き、部屋の出口の前で立ち止まった。振り返って、もう一度両親に微笑みかける。

「いろんな人の、たつくさんの願いを聞いて、お母さんとお父さんに報告するよ。だから、待っててね」

「ああ。任せたよ」

「気をつけるのよ。もし知らない人に声を掛けられたら、問答無用で攻撃なさい。正当防衛なんだから」

「……君もけっこう物騒なコトを言うんだね」

父親の苦笑いを見て、少女はもう一度笑った。そう。

私はもう一人前の星の子だ。

大好きなお母さんとお父さんのために、これから自分の使命を見事に果たしてみせるのだ。

「じゃあ、行ってきます！」

少女の目の前に広がる光り輝く星の海。

かくしてヒカりは、自分の担当する『幻想郷』へ向かうため、流れ星に乗り込んだのだった。

序章 遙かなるソラの向こうで（後書き）

いよいよ本日から東方二次創作シリーズ新作『Scarlet Stardust』が始まりますッ！

序章だけってのはちよつと物足りないため、9時半辺りに第1話を公開します。

それでは後ほどッ。

第一話 深紅の流星

初夏を抜けて、そろそろ夏本番を迎えようとしていたある夜のこと。名の通り紅色に染まる紅魔館のテラスでは小さな茶会が催されていた。

「静かな月夜の下で紅茶を飲むのも、悪くないわね」

紅魔館の主であるレミリア・スカーレットはカップに口をつけると、血色に染まる瞳をうつすらと細めた。

すぐ傍では典型的なメイド服に身を包んだ少女がゆっくりと頭を下げる。

「お嬢様、お茶のお代わりは」

メイド服の少女は給仕用のポットを手にそつと歩み寄る。

7

「ええ、いただくわ」

「咲夜、私にも頂戴」

「はい。かしこまりました」

レミリアの正面には、仏頂面で顔を上げた一人の少女がいた。

片手でカップを傾げメイドの給仕を受けると再び視線を本に戻す。

視線を本に落としたまま少女は言った。

「それにしてもレミィ。これは一体どういう風の吹き回し？ 急に夜空を見ながらお茶会したいなんて」

「いいじゃない、たまには。夜風に当たりながらの紅茶もいいでしょっ？」

「咲夜の紅茶なら何時飲もうが、何処で飲もうが美味しいと思うけど」

「お褒め頂き光栄です。パチュリー様」

咲夜が頭を下げると、パチュリーと呼ばれた少女はどういたしまして、と軽く返事してからページを捲った。

やけに古臭い表紙の分厚い本で、何ページあるのかは少し考えたくない。

レミリアが微笑う。

少女というにはやけに艶っぽい、妖しい魅力さえ感じるような笑みだった。

「風情シチュエーションというのも大事よ、パチエ。そこに咲夜の紅茶が合わさり至高のハーモニーを生み出すの」

「だからって、なにもこんな真夏にやることないでしょうに。……そろそろ図書室に戻ってもいいかしら？」

「え……？」

途端、妖艶に笑んでいた表情が一変。

頬をぷくぷくと膨らませて、テーブルをぼかぼか叩きながら駄々をこねるように言った。

「えゝ、やだやだ。パチエも一緒にお茶しようよ。私と咲夜だけじゃつまんなゝいのゝ」

その仕草は幼子同然。

今まで見せていた妖艶さは何処へやら。

「れ、レミリアお嬢様……」

「……はあ。もう少しだけ付き合っただけあげるわよ、もう。あと咲夜、

ほらティッシュ」

「す、すみません」

静かに窺^{たしな}めるように咲夜が言っていたが、鼻血全開で窺められては説得力など無いに等しい。

受け取ったティッシュをくずかごへ投げると、咳払いをして気を取り直した。

「あてッ」

一瞬、くずかごから声がしたような気がするが気のせいである。

鼻血メイドに窺められたレミィ、いや、レミリアはパチュリーが席に着き直したのを見ると、純真無垢な子供が見せるような可愛らしい笑顔になった。

「ふふふ。それでいいのよ。それ、で。……あら」

ふと、視界の端に金髪の少女が映った。

咲夜もパチュリーも、もちろん唯一の肉親であるレミリアもその少女を知っている。

「お姉様、今日はお月さまが綺麗だね」

少女はレミリアに向かってそう言った。

姉によく似た妖しい雰囲気を持つ少女。

名を、フランドール・スカーレット。

紅魔館を生きる吸血鬼の一人であり、そして、レミリア・スカーレットの実妹。

普段は館の自室で静かに過ごしているはずのフランが、突然テラスに現れてぼんやりと夜空を見上げていた。

「フランお嬢様、起きていらしたのですか？」

咲夜の口ぶりからすると、どうやら先刻までは寝ていたらしい。よく見ればうつすらと涙の跡がある。

「うん、ついさっき。ねえ、私もお茶会に混ざっていい？」

「いいわよ。咲夜、椅子を用意してちょうだい」

「は。かしこまりました」

と、次の瞬間、咲夜はフランの前に椅子を設置してスッと引いた。ありがとうと一言添えてからちゃんと座ると、早速カップと紅茶が用意されていた。

「お姉様、今日は夜なのにどうして外でお茶会してるの？」

「私の気まぐれよ。でも、気持ちがいいでしょう？」

「うん」

フランは屈託なく答えると、姉同様カップに軽く口をつける。

それから、しばらく無言の茶会となった。

話題が無いから、という事ではない。

夏の夜を彩る虫の音や、流れる風の音を楽しむためだ。

フランだけは、カップを手にしたままずっと夜空を見上げていたが。

「……そうだ。お嬢様、流れ星のお話はご存知ですか？」

そんなフランの様子を見てか、ふと、咲夜が夜空を指差しながらこんなことを言った。

何なに？ と興味津津なフラン。

対して姉は微かに眉を動かしただけで、パチュリーに至っては本を凝視したままだ。

「流れ星のお話って？」

「流れ星が空を瞬く瞬間に願い事を言くと、その願いが叶うそうですよ」

「願い事が叶うの？　どんなお願い事でもかな？」

夜空の星に負けないぐらいに瞳を輝かせるフラン。

そんな微笑ましい表情に咲夜は頷き小さく笑みを浮かべた。

「でも、流れ星は本当にあつ！　という間に消えてしまっんですよ。その一瞬に、フランお嬢様は願い事を唱えることが出来ますか？」

「出来るよ！　ゼツタイ！」

自信満々にフランが叫ぶと、一蹴りで紅魔館の天辺に飛び乗った。
そのままジッと星空を眺め始める。

「咲夜にしてはずいぶんとロマンチックなお話じゃない。もし貴女だったら何を願うのかしら？」

「そうですね、お嬢様たちの無病息災をお祈りしましょうか」

「……吸血鬼は不死身よ。それに、無病息災って神社で祈願するものじゃない」

「あら、そうでしたか？」

「あ！　流れ星！」

夜空を切り裂く一筋の光。

しかし光は今のフランの言葉さえも追い越してまた夜闇の中へと消えてしまった。

「え、あ、う、うんと、私の願いは」

「フラン、もうとづくに消えちゃったわよ」

「え、ええ〜！ もう消えちゃったの？」

「フランお嬢様、危ないですのでそろそろ下りてきてください」

「あ、また流れ星！」

すると、再び流れ星を見つけてフランは視線を真上に戻した。

今度こそは願い事を言ってやる、と心に強く念じながら星を見据えてグツと構えた。

「あれ……？ ねえ、咲夜あ！」

「はい、何でしょうか？」

「真っ赤な流れ星ってあるの？」

「……はい？」

テラスにいたレミリアと咲夜が同時に顔を見合わせた。

屋根の上ではフランが夜空を指差している。

「赤い流れ星……？」

「フラン！ そんな流れ星ないわ。だから早く下りなさい」

「でも、お姉様、アレ！」

フランが指差す方向を見て、二人は驚き目を見開いた。

空を輝く星よりやや大きめな光が見えた。

普通の星なら金や銀、白といった色のはずなのに、何故かそれは燃え盛る烈火のように赤かった。

そして光は空を切り裂くように過ぎるのではなく、まっすぐ紅魔館の方へと向かっている。

星が近づくにつれて地鳴りのような音が聞こえ始め空気がざわつく。

「な、何よアレ……！」

「お嬢様、アレはまっすぐ紅魔館に向かっています！」

「隕石……とでも言うの！？ パチエ、ちよっと！」

「何よ。今いいところなのだけど」

「そんな本より！ ほら、アレを見なさい！」

促されるまま首を上げ、パチュリーは二人とまったく同じ表情になった。

「な、何よアレは！？ 新手の魔法？ それとも……」

「ど、どうしましうかお嬢様！？」

「……いえ、咲夜は何もしなくていいわ」

「お嬢様？」

レミリアはフランが今立っている屋根の上に飛ぶと左手に力を込め深紅の槍を作り出す。

それを見たフランが瞳を輝かせ、ニイっと愉^{たの}しそうに笑みを浮かべた。

「お姉様、フランもやる！」

同じく右手に力を込め、フランが湾曲した剣を作り出す。

先端が矢尻のように尖っている独特な形状をした剣を構えると、二人は目の前の巨大な隕石を睨み据えた。

「私に合わせなさい、フラン」

「ん。わかった！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「禁忌『レーヴァテイン』」

二人の術 符が同時に輝き、紅と黒の閃光が隕石を貫く。
直撃した隕石は一瞬で崩壊し、一切の被害無く事なきを得た……と、
レミリアが安堵の息をこぼした瞬間、

「……なッ!?」

黒煙が晴れた向こうに見えたのは、傷一つついていない隕石だった。
だが、幸いにも二人の攻撃で進路がずれたらしく、隕石は紅魔館の
真横の湖に凄まじい爆音と共に墜落した。
湖の飛沫が飛ぶが、その時既に咲夜が傘をさして二人の間に立っ
ていた。

「お怪我はありませんか二人とも？」

「ええ。無事よ」

「大丈夫」

「……私はびしょ濡れよまったく」

テラスに残っていたパチュリーは湖の水を直撃して全身びしょ濡れ
になっていた。

慌てて咲夜がテラスに戻りタオルを手渡す。

「……何なのアレ。私のグングニルも、フ란のレーヴァテインも
ものともしないなんて」

「ねえ、お姉様」

思案している最中だったが、レミリアは妹の言葉に振り向いた。
天真爛漫な瞳が、まるで新しいおもちゃを手に入れた子供のように
光り輝いている。

どうやら、フ란はあの隕石に興味があるらしい。

「あれって、流れ星だね。直接触ったら願い事叶うのかな？」
「はあ？ そんなハズないでしょう？ あれが流れ星だったら……
で、ちよつと待ちなさいフラン！」

姉の言葉も聞かず、フランは七色の翼を羽ばたかせ湖へと向かった。

・
・
・

「よ……つと」

湖はさほど距離が無いのでフランはあっという間に到着した。
隕石の衝突のせいか、湖にはほとんど水が無くなっていた。

所々で魚がビツチンビツチン跳ねているが、ほとんど無視してフランは隕石の方へと向かう。

「うわ……あ」

フランの何倍もある大きさの隕石が、蒸気を上げながら地面に抉り込んでいた。

月明かりに照らされた隕石は一部が溶岩のように真っ赤になっている。
る。

フランはもう一度レーヴァティンを取り出し、先端で隕石を注意深く突つつきながらぐるっと一周した。

特に、これといった変化はなかった。

「おっきな流れ星だなあ。でも、今お願いしたらきつと叶うよね。
んつと、んつと……私の願いはね」

一生懸命考えて思いついた願い事を言おうとした時、不意に隕石の

方からゴンゴンという音が聞こえてフランは言葉を止めた。

「ふえッ？ な、何……」

音は不思議なことに、隕石の内側から響いているようだった。

くぐもった音がドンドンとか、ゴンゴン、とか、まるで誰かが内側から叩いているようだった。

……中に誰かがいるのだろうか？

「も、もしもし……？」

隕石の表面を、もう一度レーヴァテインで突っついてみる。

すると隕石の表面に亀裂が走りガラガラと崩れ落ちた。

その奥には、ぽっかりとした空洞が広がっていた。

フランが恐る恐る中を覗きこむと金色の瞳と目が合った。

「ひゃッ！」

そして、空洞の中から一人の少女がぬつと顔を出した。

ぼんやりとした動作で右に左にと首を動かすと、やがてフランを向いて動きが止まった。

「……………」

「……………」

謎の沈黙の後、フランが声をかけようとした瞬間、少女はぐったりと前のめりに倒れ込んでしまった。

「え！ え？ あのあの、ど、どうしょ……！ っ、っついう時どうしたらいいの？ えと、えっとお……………」

「フランお嬢様！ ご無事ですかあ？」

「あ、咲夜の声だ！ おーい、咲夜ー！」

咲夜の声を聞き、安堵の息を漏らすと、フランは倒れ込んだ少女の下へ走った。

見たこともないような真っ白いローブに小さなポシェット。

そして一際目に付いたのが、絹糸のように美しくなめらかな^{フラチナ}白金色の髪だった。

「ねえ、あの、大丈夫……？」

「……………う、うう、どう？」

少女が顔を上げる。

十代前半のようなやや幼い顔立ちだが、思わずドキッとするほどに可憐な容姿だった。

「こ、ここは紅魔館のそばの湖だよ。あの、あなたは……誰？」

「……………わ、私は……………ヒカリ、^{ひずい}緋^ひ彗^{ずい}ヒカリ……………う」

「ヒカリちゃん？ ヒカリちゃんっていうの？ ねえ、ヒカリちゃん？」

名前を告げて力尽きたのか、白金色の髪の少女はそのままパタリと気を失ってしまった。

第一話 深紅の流星（後書き）

レ「ちよつといいかしら？」

夜「何かな」

レ「“スカーレット”って言ったら普通は私よね。それなのにどうしてフランが主人公っぽいのよ」

夜「フフフ……」

レ「な、何よその気味の悪い笑みは」

夜「一体いつから、自分が主人公だと錯覚していた？」

レ「……ぶっ殺す」

夜「残念、それは本体だ（ピチューン

……いや、どうにもこの台詞が頭に残っちゃってw
ちよつと使ってみたかったです。

さてさて新作「scarlet stardust」が始まりましたッ。

上の茶番の通り、主人公はフランです。

それと、新しいオリキャラは女の子。こっちの方が落ち着きますね。

一日一話で、またこれからよろしくお願いします。

感想ご意見など、どしどし下さいな。

第二話 目覚める少女

「……ううん」

窓からこぼれる眩しい日差しを受け、少女はゆっくりと体を起こした。

そして全く見覚えのない部屋を見回して首を傾げた。

「……あれ？　ここどこだろ？」

そもそもどうして私はここに？

少女はベッドの上でちゃんと正座してから今までの経緯を思い出そうとしてみた。

「えと……最初に、お母さんとお父さんに挨拶してから、流れ星に乗って……」

人生で初めての航海だったが何とか星の海を渡り、やがて目標の幻想郷の空へとたどり着いた。

だが、ここで一つ問題が発生した。

「せっかく最初の願い事が聞こえたのに、急に流れ星のコントロールが出来なくて墜落しちゃったんだっけ。どうにか不時着しようとしたら、目の前から紅いビームみたいのが飛んできて……」

……目の前からビーム？

つまり、私は撃墜された？

・
・
・

「いやいや！ お父さんが言ってたじゃん！ 幻想郷は美しくって幻想的で、平和なところだって！ 撃墜されるわけないじゃんアハハハ！」

ハ、ハハ……と、その笑い声の勢いが段々と小さくなっていく。

墜落か撃墜かはともかくとして、それならどうして私はここにいるのだろうか？

もう一度周囲を見回してみる。

子供部屋なのだろうか、積み木などといったおもちゃの類や、小さなクローゼット。

壁紙は桃色に赤みを増したような女の子らしい色。

「目が覚めましたか」

「は、はい！？」

突然真横で声がして声が裏返ってしまった。

いつの間に現れたのか、少女の傍には銀色の髪の少女が座っていた。フリルのついたその服装を見て、どこかで覚えあるようなと見つめてから思い出した。

メイドだ。

お金持ちのお嬢様とかお坊ちゃんを給仕したりするお手伝いさんの恰好をしている。

ということは今いるここは誰かのお屋敷なのだろうか。

……それとも、ただのコスプレイヤーなのだろうか。

「……私の服に何か？」

「へ？ あ、ううん。何でもないです」

「あら、目が覚めたみたいね」

すると、今度はピンク色のローブ姿の少女が現れ少女をその血色の瞳でちらと見た。

少女より下か同い年ぐらいの背恰好。

その表情は、少女というには少し大人びているような気もした。

「あ、あの……えと、ここは？」

「ここはレミリアお嬢様のお屋敷である、紅魔館でございます」

すかさずメイドが答える。

しかしその名に全く聞き覚えのない少女は首を傾げた。

「こ、こうまかん……？ それって幻想郷なの？」

少女の言葉に、メイドと血色の瞳の少女が顔を合わせる。

この子は何を言っているのだろう。

そんな言葉がすぐにでも出てきそうな怪訝そうな表情をしていた。

「ええ、幻想郷ですけど……？」

「ホント？ ホントに幻想郷？ はあ、よかったあ……」

ホッと胸をなでおろす少女。

メイドと血色の瞳の少女はさっぱり事情がわからない。

「あ、起きたんだヒカリちゃん！」

突然名前を呼ばれて振り向くと、今度は金髪の少女と目が合った。

血色の瞳の少女と似ているが、それよりどこか幼い顔立ち。

二人は姉妹なのだろうか。雰囲気とか、どこか似ているような気がする。

……しかし、気になったのは少女の言葉だ。

「どうして私の名前を？」

すると金髪の少女は不思議そうな顔をして答えた。

「私が見つけた時に自分で教えてくれたんだよ？ 覚えてない？」

「そ、そういえば……」

ぼやける視界の先に、少女と同じ金の髪を見たような気がする。
もしかして、最初の願い事はこの少女のものなのだろうか。

「あ、私のお名前覚えてないね。私はフランドール・スカーレット。
フランって呼んでね」

フランがにこやかに名乗ると、次いでメイド服の少女が小さく会釈した。

「紅魔館のメイド長を務めさせております、十六夜咲夜いざよひ さくやと申します。
そしてこちらが主である」

「レミリア・スカーレット。レミリアで結構よ」

「えと、レミリアに、咲夜に、それとフラン……」

指を折りながら慎重に頭に刻み込む。

記憶力が大事な仕事だ。

人の名前ぐらいはちゃんと覚えないと。

「うん、覚えた。じゃあ私も自己紹介しないとね。私は緋誓ひちかヒカリ
って言います。ここにはお仕事で来ました」

「お仕事？」

フランが横で首を傾げる。他の二人も同様だった。
レミリアがヒカリに訊ねる。

「貴女の仕事って何なのかしら？」

「はい。私の仕事は“願いを聞くこと”なんです」

「願いを聞く……？ それはどういう？」

「やっぱり！ ヒカリちゃんは流れ星の妖精なんだね？」

「流れ星の、妖精……？」

レミリアの言葉を遮り、フランが目キラキラさせながらヒカリの姿を見つめた。

純白のローブに白金色の髪、肩からかけた小さなポシェット。

まあ……パツと見妖精に見えなくもない。

「だって、流れ星からヒカリちゃん出てきたんだよ？ 私ゼツタイ
そうだって信じてたもん」

「私は妖精じゃないですよ。私は星の子だよ」

「星の子……。新種の妖怪でしょうか？」

「いえ、私は星の子です」

「神とかそういう類の可能性もあるわよ」

「か、神？ そんな大袈裟なものじゃなくて、えと、本当にただの
星の子なんです……」

星の子、というニュアンスが伝わらないのがもどかしい。
レミリアが再びヒカリに訊ねた。

「ねえ、貴女が願いを聞いたらどうなるのかしら？」

「願い事を聞いたら帰るんです。集めた願いは私のお父さんとお母
さんが叶えてくれるんですよ」

「ヒカリさんのご両親がですか……？ 願いを叶えられるなんて、

「一体何者なんでしょうか」

「……パチユリーに訊いてみましょうか。何か知ってるかも。じゃあ、失礼するわ」

レミリアはそう言っただけで部屋を出て行ってしまった。

咲夜は水をお持ちしますね、と言っただけで一瞬消えるとヒカリの傍に水の入ったコップを置いた。

特に無反応のヒカリを見て、咲夜は言った。

「……あれ？　驚かないんですか？」

「何が？」

「いえ、あの……今、一瞬でお水をお持ちしたんですよ？」

「時間を止めて、その間に持ってきたんですよ？　それぐらいなら私は視えますよ」

「み、視えますって……？」

ヒカリの目に嘘についている様子はまるで見受けられなかった。本当に、視えていたのだろうか。

「……コホン。それでは、私も失礼します。何かあればお呼びください」

では、と告げてから再び咲夜の姿がかき消える。

今度も、ヒカリは特にこれといった反応は見せなかった。

「ねえねえ、今の本当？」

「え？　何が？」

「咲夜の姿を視えるって、本当なの？」

「ううん、一瞬だけだけどね。部屋を出て、お水を置いてくれた一瞬だけなら」

「すごい！ ヒカリちゃんって何か能力ちからを持ってるの？」

興味津津といった様子でフランが訊いてくる。
ヒカリは大きくうなずいて微笑んだ。

「うん。まだ上手くコントロールできないんだけどね。フランも何か能力持ってるの？」

「持ってるよ！ ねえねえ、だったら弾幕ごっこしよ！」
「弾幕ごっこ……」

すると、ヒカリは口の端を上げてニツコリと笑った。

「うん、いいよ。私でよければお相手しよう」

そして机の上のポシエットから数枚の術符を取り出してみせた。

「私、けっこう強いからね」

「楽しみ！ じゃあじゃあ、こっち来て！」

「わわッ！ ちょっと待ってよフラン！」

笑顔のフランに腕を掴まれ、ヒカリは部屋を飛び出した。

第二話 目覚める少女（後書き）

小「あの、いいんですか？ フランお嬢様と弾幕ごっこだなんて…

…」

夜「大丈夫だ、問題ない」

小「はあ……そうですか」

夜「こあさん、恐らく明日出番があるから台本をチェックしておくんだよ」

小「が、頑張りますッ」

夜「したらな！」

小「……？」

分かる人だけ分かってくれればそれでいい……

何か、茶番付きのあとがきって良いな！

第三話 図書室ではお静かに

フランに連れられてたどり着いたのは紅魔館の中にある図書室だった。

扉を開けるなり漂うほこりっぱい匂いに、ヒカリは思わず顔を覆った。

「う……、すごい匂いだなあ。古い本とか、カビとかの匂いが混じったような何とも……」

「ここすっごく広いんだよ！ 見てよホラ！」

指差す方向に目を向ける。

当たり前だが本棚がずらりと並んでいる。

だが、不思議なことに本棚の終わりが見えない。

本来なら壁とか窓とかがありそうはずなのに、この図書室にはそんなもの全く見当たらなかった。

ただ延々と、まるで合わせ鏡の世界のように本棚がずっと続いている。

「……す、すごい」

「あれ？ フランお嬢様、こんなところで何をしていらっしゃるんですか？」

すると、本棚の奥から少女がひよいと姿を現した。

両手には大量の本が積み重なっている。

「あ、小悪魔だ。何してるの？」

「図書館の蔵書点検ですよ。常に本が増えたり減ったりでパチュリ様だけでは管理しきれないんです。……あら、そちらの方は？」

「ヒカリちゃんだよ。昨日私が助けたの」
「ど、どうもです」

ヒカリが軽く会釈をすると、小悪魔と呼ばれた少女も軽く頭を下げた。

赤茶の髪に執事風の黒いスーツ。

そして背中には、黒い小さな羽根がぴこぴこ揺れていた。

「それで、お二人は図書館に何かご用ですか？」

「うん。ここで弾幕ごっこしに来たの！」

「だ、弾幕ごっこですか？ でもあの、ここは図書室ですのでそういったことは」

「じゃあやるよー！」

「お、お嬢様あ！」

涙目の小悪魔を無視してフランが飛ぶ。

ヒカリと距離を取って向かいあうと、さっそく術符を取り出し起動させる。

「決闘開始！ 禁弾『スターボウブレイク』」

フランを中心に、赤、青、黄、形や様々な大きさの光弾が浮かび上がり、ヒカリに向かって直進する。

ヒカリはスウツと息を吸うと、姿勢を低く構え床を蹴った。

「きゃあああああ！？ お、お嬢様！？」

「……ッ！？ なになに！？」

弾幕が直撃すると同時に、小悪魔とフランの間を凄まじい暴風が横切った。

小悪魔は天井に激突、フランはどうにか踏ん張って体勢を維持する。
やがて風が止み、弾幕が生みだした黒煙が晴れていく。
そこに、ヒカリの姿はなかった。

「……あれ？　ね、ねえ、ヒカリちゃん？」

「何？」

「ふえ？　ひゃあああ！？」

予期せぬ方向からの返事にはフラン飛び上がって振り向いた。
ヒカリは顔中ほこりだらけでにっこりと笑って立っていた。

「わ、私の弾幕でここまで吹っ飛んじやった？　大丈夫？」

「弾幕？　私は当たってないよ？」

「……ええ？　嘘はダメだよヒカリちゃん？」

「ふふふ。ホントに当たってないよ。アッハハ」

あっけらかんと笑うその姿を見て、フランは少しムツとなって再び
距離を取り直した。

次は、もっと強い弾幕でやっつけてやる。

両手に力を込め、その手に湾曲したやや特殊な先端を持つ剣を作り
出す。

「禁忌『レーヴァテイン』」

一瞬で間合いを詰め、零距离で剣を振りかざす。
直撃は必至、これで私の勝ちだ。

「はあああああああッ！！」

床が抉れ爆音が響き、紅魔館の図書室に巨大な風穴を空けた。

そんな壮絶な光景に小悪魔は放心したように口をパクパクさせていた。

「あ、あわわわ……！　わ、私殺される！　パチュリー様どこるか、咲夜さんにも、レミリアお嬢様にも……」
「はっはっは！　これで私の勝ちだね！」

トントン。

「ん？」

肩を叩かれ回れ右。

「ぎゅんねん、当たってないよ？」
「な、なんでえええ！？」

フランが初めて驚きで叫んだ瞬間、かもしれない。
ヒカリはさっきとほとんど変わらない恰好で、つまりほとんど無傷でフランの背後に立っていた。

驚き戸惑うフラン。

ヒカリはニツと自信満々な笑みを浮かべた。

「これで終わり？」

「ち、違うよ！　まだとっておきがあるもん！」

三度距離を取って飛ぶと、別の術符を取り出し発動。
フランは不敵な笑みを浮かべ両手を構える。

「禁忌『フォーオブカインド』」

突如フランの姿が四人に増える。

当然、両手に集まった光弾も四つに増える。

これで単純に弾幕量が四倍となった。

今までの攻撃よりも遥かに破壊力が増す。

そんなフランの姿を、ヒカリは金色の瞳で注意深く観察していた。

「……すごい速さで動いてる、ってわけじゃないんだ。幻想郷の人ってすごいな」

「恐くなった？ でも、攻撃するからね！」

「ふふん、どんとこいだ！」

「当たれええええッ！！」

「いやあああああッ！？」

四人のフランが一齐に光弾を掃射する。

暴風雨に勝るとも劣らないような弾幕に、小悪魔は悲鳴をあげながら逃げ出した。

図書館が、フランの弾幕を浴びて半壊する。

本は吹き飛び、壁や床は穴だらけ。

そんなことはお構いなしにフランは弾幕を撃ち続けた。

図書館全体が黒煙に包まれたころ、フランはやっと弾幕の手を止めた。

「ふう……。これならゼツタイ当たってるよ。だから私の勝ち！」

黒煙が晴れて、図書館の無残な光景が広がる。

まるで大災害のあとのようだ。

瓦礫の中から小悪魔がプツハア！ とか言いながら顔を出した。

「あ、小悪魔。ヒカリちゃんどこかな？」

「……ふ、ふえ？ ヒカリさんですか？ こんな有様じゃあ流石に

死んでしまったのでは……」

「でも、さっきの攻撃を無傷で避けてたからもしかしたら……」

不意に、背後に気配を感じてフランが振り返り、そして目を見開いた。

瓦礫の山のでっぺんに、白金色の髪の少女が立っていた。

先刻と変わらず、ほとんど、いや、まったくの無傷だった。

「な、んな……ッ!!」

「えっへへ。いやあ、危うく死んじゃうところだったよ。フランって強いね」

「そんな、嘘だよ!？ 私の攻撃全部避けたの!？」

「星の子ですから。速さには自信があるよ」

さて、とヒカリが続ける。

手には白い術符が握りしめられていた。

「今度はこっちの番、行くよ!」

右手を構え術符を発動させる。

全身を金色のオーラが包み、その手に小さな光球が生み出される。

「瞬符『光陰矢の如し』」

術符の名の通り、光球はまっすぐな矢を形作りヒカリの手でふわりと浮かんだ。

それをグッと握りしめ、ヒカリはフラン目掛けて全力で投げた。

「そ、そんな攻撃簡単に避けて」

光の矢はフランの台詞を遮り脇腹をかすめて紅魔館の壁に突き刺さった。

「……え」

あまりの速さに目が、いや、思考が追いつかないほどだった。その一瞬に起こった出来事が理解できない。

今、何が起こった？

ヒカリが矢を構えて、その瞬間には壁に光の矢が突き刺さっていて……
混乱するフランを見て、ヒカリは得意気な表情になって言った。

「すごいでしょ？ 私の術符。スピードだけなら自信があるよ」
「す、スピードだけって……」

速過ぎる。

あまりにも速過ぎる攻撃だ。

それはまるで、目の前を光が瞬くのと同じくらい。
瞬きをしたら見失ってしまう流星とほぼ同じ、いや、それ以上だ。

「……ひ、ヒカリちゃんの能力^{ちから}って、何？」

ヒカリはにっこり微笑んだまま答えた。

「私の能力は『刹那を瞬く程度の能力』。この能力を使うと、瞬きするほんの一瞬ですら駆け抜けられるくらい速く動けるの。私の一歩は、一光年なんだ」

「い、一光年……？」

聞き慣れない言葉にフランは首を傾げる。

それは何、と訪ねようとした瞬間、ヒカリとフランの間に積もっていた瓦礫の山から紫色の何かがボコツと飛びだした。

「ち、違うわよ……」

「わッ」

「きゃあ！？ な、何これ？ そ、それに違うって、何が？」

紫色の次は白い何かが飛び出す。

どうやら誰かの手、らしい。

よく見れば紫色の何かは髪のようなのだ。

白い腕が伸び、何かが這いずり出てくる。

ゼエハアしながらその何かは、フランとヒカリとを交互に見てから言った。

「……ゼエ、ゼエ。げっほ、ケホッ。光年は、速度の単位、じゃなく、距離の単位よ。それと……」

「そ、それと？」

スウッと大きく息を吸い込む。

これから盛大に叫ぶつもりなのだろう。

「図書室では、静かになさあああああああああいつツッ！
！……………はう」

それだけ叫ぶと、紫色の何かはぱたりと倒れてしまった。

第三話 図書室ではお静かに（後書き）

お気に入り登録、評価ポイント等、ありがとうございます。

と言っても、書き始めたばかりだからアクセス数が少ない；
まあ、いいか……

P S

エンドオブエタニティ

最近、EOEにめちゃくちゃハマっております。

下野カッコいいよ、下野！

第四話 星降るバカ

「そういえば貴女星の子だって聞いたけど、星の子って何なの？」

荒れ放題の図書館の最奥で、パチユリー・ノーレッジは相変わらず小難しそうな本に視線を落としながらヒカリに訊ねた。

「ほ、星の子は星の子ですよ。いろんな人の願い事を聞くのがお仕事なんです」

「そうじゃなくて。種族の話。私は魔法使い、レミリアやフランは吸血鬼といった具合よ。貴女は何なのかしら？」

……ちなみに、今現在二人は正座している。

「え？ フランって吸血鬼だったの？」

「そうだよ」

「へえ……吸血鬼って血を吸うアレだよね？ フランも血を吸ったりするの？」

「んゝ、時々」

「そ、そうなんだ……」

やや顔を引きつらせるヒカリの表情を見て、フランはいやいやと両手を振って言った。

「ヒカリちゃんからは吸わないよ。それに、飲みたい気分じゃないから大丈夫」

「そ、そっか。ちょっと安心したかな」

「……で、種族の話よ。どの本にもそれらしい記述はないの。私としては少し興味深いわね」

カップのコーヒーを口につけながらパチュリーが言う。

このコーヒーは小悪魔が淹れてくれたもので、現在小悪魔は崩壊した図書室の修復作業を一人でやっている。

ヒカリは時々背中に突き刺さるような視線を感じていたが、他の二名は気づいていないのか無視してるのか無反応だった。

「種族……。ううん、そんなこと考えたこともないんですけど」

「妖怪なのかしら？ それとも妖精、或いは精霊、亡霊や幽霊の類とは思えないわね。けれど、かなり強力な能力を持っている。……謎だらけね」

「だから、ヒカリちゃんも流れ星の妖精なの。それでいいの！」

「流れ星の精霊って……。そういえば、貴女どうしてここに？ 願いを叶えるってどういうお仕事なのかしら？」

パチュリーの質問に、ヒカリは待つてましたと言わんばかりに胸を張り答えた。

「願いを聞くんていうのは、私たちが流れ星に乗って、地上から届いた願い事を聞くことですよ」

「流れ星に乗る……？ それってどういう意味かしら」

途中、ヒカリもコーヒーに口をつけて息を整える。

……まだ苦い。

角砂糖あと五個追加しないと。

「……貴女、ブラックで飲めないの」

「地上から流れ星として見えるものは私たちの船なんですよ。流れ星には願いを感知するセンサーが付いていて、それを集計して家に帰るのが主な仕事です」

「じゃあ、私たちが普段見ている流れ星は、貴方たち星の子の船だ
ってこと？」

「はい、そうですよ」

角砂糖だけじゃ足りない。

ミルクも入れないと。

「……甘過ぎない、それ」

「私、苦いの苦手なんです」

これでもまだ足りないくらいだ。

甘過ぎてもはやとコーヒーと呼べなくなったカップの中身を一気に
飲み干してソーサーに戻す。

パチュリーが初めて顔を上げる。

薄紫色の瞳はぼんやりと眠たげだった。

「それで貴女、これからどうするの？ 確か貴女の乗ってきた流れ
星、紅魔館の横の湖に墜落しているんじゃないかったかしら」

「あ……そ、そういえばそうだった。どうしよう……」

ヒカリの表情が曇る。

このままでは仕事が出来るかどうかわからない。

もし、出来なかったらどうしよう。

せつかく一人前の星の子になって、お母さんとお父さんの役に立て
るんだと張り切って出ていったというのに、このままじゃ……
すると、フランがヒカリの顔を覗きこんできた。

「ねえ、ヒカリちゃん。よかったら湖に行ってみない？ 私も一緒
に行ってあげるから」

「え……」

顔を上げると、うつすら滲んだ視界の向こうでフランが微笑んでいた。

「私も興味があるから一緒に行つてあげるわ。支度が出来たら玄関で待っていてなさい」

それだけ言うとパチュリーは本をぱたりと閉じ、ふわふわと飛びながら図書室を出ていった。

「じゃあ、夜になったら行こつか。それまで、何して遊ぶ？」

「夜に……ああ、フランは吸血鬼だから、夜にしか出歩けないんだ」

「そんなことはないんだけど、夜の方が動きやすいし楽しいの」

「ふうん……？」

幻想郷の吸血鬼というのは強いものらしい。

ヒカリは両目をごしごしこすってから、フランと一緒に図書室を後にした。

「あのう……、これ、ホントに私一人で……？」

小悪魔の言葉は誰の耳にも届いていなかった。

・

太陽が西に沈み、幻想郷の空に漆黒の夜空が広がる。
適当に準備を済ませ玄関に向かうと、そこにはやっぱり本に視線を落として浮かぶパチュリーの姿があった。

「本、好きなんですか？」

「ええ、大好きよ。自分の知らない知識を得るということはとても素晴らしいことなの」

「フランもよく咲夜に読んでもらってるよ」

「じゃ、さっそく行きましょうか」

ふわりと風に乗るようにパチュリーが飛ぶ。

次いでフランが飛び、そしてヒカリが最後になる。

「けっこう派手に墜落したのね。湖の端が抉れてるわ」

湖の水は元に戻ってはいたが、地面は抉られたままだ。

その跡を辿って行くと、やがてヒカリの乗ってきた流れ星が見えてきた。

「私が最初にここに来て、ヒカリちゃんを見つけたんだよ」

崩れた地面と流れ星の間を指差しながらフランが言う。

だがフランの言葉はほとんど届いておらず、半ば放心状態でヒカリは流れ星の前に立ち尽くしていた。

「あ、ああ……」

表面を触りながらぐりぐりと一周。

その後ヒカリはハツとなり流れ星にぼっかり空いた穴の中に顔を突っ込ませた。

「……よかった。まだ完全に使えなくなったわけじゃないみたい」

内部は思いの外損傷がなく、一部の機能はしっかりと生きていた。

願いを感知するセンサーモジュール、船体の生命維持装置。
しかし、何故か食料庫だけは空っぽになっていたが。

「……？ 何だろ、コレ」

食料庫の奥の壁に、何やらペンで書きなぐったような文字が書かれていた。

もちろん、ヒカリのものではない。

そもそもヒカリは漢字も英語も、その他の言語も多少は書ける。
それなのに、その文字は……

「……あ、た、の？ サ、ル……？ 何だろうこのラクガキは」

辛うじて読めたその文字は、まるでミミズが全速力でダンスをしたような滅茶苦茶な文字だった。

……いや、これでは文字に失礼かもしれない。

「まあいいか。後は動けるかどうかチェックすれば大丈夫……」

コンソールに手を伸ばし起動させる。

船体が微かに振動し、パネルに光が灯っていく。

「これで、動けば……あれ？」

と、そこで何故か振動が停止し、パネルの光も無くなってしまった。
別のコンソールを動かし再び試すが、それっきり動かない。

何度も、何度も試したが……

「な、何で？ 何で？ エンジンの故障？ それとも、燃料切れ？
え？ え……」

「ちょっとー！ アタイの秘密基地に何してんのさー！」

不意に外から声が響いてヒカリはその手を止めた。
秘密基地？ あたい？

フランの声でもないしパチュリーの声でもない。

ヒカリが流れ星から顔を出すと、フランとパチュリーの前に不思議な女の子が腕を組みながら浮遊していた。

青いショートカットに空色の瞳。

何やら怒っているらしく、眉を歪ませ両手をぶんぶん振り回して抗議しているようだ。

そして背中には、細い宝石のような翼が忙しそうに羽ばたいている。

「だからチルノー、これはヒカリちゃんの流れ星で、チルノの秘密基地じゃないよ」

「だって名前書いてなかったもん。自分の物ならちゃんと名前書いておくべきでしょー」

「だからって勝手に入るのはよくないわよ」

「いいの！ アタイは最強だからいいのー！ 今度みんなを呼んでここで弾幕ごっこする約束もしたの！ だからもうアタイの物だよー！」

「む、むう……」

「チルノらしい単純な思考ねえ……。私とフランで懲らしめましようか？」

「ま、待つて！」

パチュリーが本から七色の術符を取り出し構えたところで、ヒカリがチルノの前に躍り出た。

「おお？ 誰だお前？」

「私はヒカリ。あの流れ星は私の物なの。だから、私が相手をする

！」

「流れ星？ あの秘密基地の名前？ カッコイイ名前だな！」

チルノは嬉々として頷き、ヒカリを見据え指を差した。

「いいよ！ 最強のアタイが相手したげる！ まずは」

「弾幕勝負……」

すると、指差した指が三つ立てられた。

「三本しょーぶ！ 今日のアタイはしんしてきたから、あんたにチャンスをあげよう！」

「三本勝負……？ じゃあ、最初は何で勝負するの？」

チルノが不敵に笑う。

初対面のヒカリが見ても、全然似合っていない。

そんなことは露知らず、チルノは声高らかに宣言した。

「さいしょは、かけっこで勝負だ！」

ヒカリの顔が一瞬ポカンとして、それからチルノとは対照的にニッコリと、輝かんばかりの笑みを浮かべた。

第四話 星降るバカ（後書き）

何となく、今日はあとがきが浮かばないので特に無しです。

感想、ご意見、お待ちしておりますよ〜

第五話 ミッドナイト・バトル

「おいっちにー、さんしー……っ」と

体を曲げたり捻ったりしながらチルノは準備運動をしていた。場所は少し変わって開けた草原。

ヒカリも真似をしながら準備体操をするが、正直意味がない。

「チルノ、ヒカリちゃんのこと何にも知らないもんね……」

「そんなに速く動けるの？ 少し信じられないんだけど」

「まあ、見ててくださいな」

チルノのストレッチが終わり、くるつと振り返るとヒカリはビシッと指を差された。

「ふっふっふ。幻想郷最強のあたいに勝てると思わないことね！」

「わー、さいきょうかー、こりゃあかてないなー、どうしょー」

完璧なまでの棒読みっぷり。

しかし相手はチルノ^{バカ}である。

余裕たっぷりに笑うと、地面に小枝で線を引く。

それから、正面に見える大きな木を指差してから言った。

「ここがスタートで、向こうの木がゴール！ 飛ぶのも特別に許しあげるよ」

「他にルールはないの？」

「ない！ 勝った方があの秘密基地を手に入れるのだ」

気合い十分のチルノはクラウチングスタートの姿勢を取って構える。

おお、本格的だな、とヒカリは心の中で呟いた。
……決して馬鹿にしているわけではない。

「……………」

「……………何よ、その目は」

「よいドン、って言って」

「仕方ないわね……………いい？ よーい……………」

チルノがグツと脚を曲げ姿勢をさらに低くする。
ヒカリも、一応形だけ構えを取った。

「ドン！」

パチュリーの合図と同時にチルノは駆け出し、滑空するようにしながら飛び出した。

ヒカリはその後ろ姿を追いかける形でゆっくりと走り出した。

「ハッハッハ！ 勝ったぞアタイ！ 強いぞアタイ！ きょーじん！
むてき！ さいきょーだ！」

「……………いいの？ バカだけどアイツ結構なスピードよ？ 追いつける？」

「ん、じゃあそろそろ行ってきます」

姿勢を低く構え右足に力を込めて、本気で地面を蹴る。

ドオンツと爆風にも似た轟音が響くと同時に凄まじい風が巻き起こり、パチュリーの帽子が遥か彼方にぶっ飛んでいく。

「な……………何！？ 何が起こったの？」

「うう、やっぱり速過ぎて目が追いつかない……………」

気がつくと、チルノの指差していた木の横に白金色の少女が両手を振りながら立っていた。

チルノはまだ半分も進んでいない。

それでも全速力で飛んでゴールし、勝ち誇った笑みを上げようと顔を上げたら、目の前には既にヒカリがにっこりと微笑んでいた。

「あ……アレ？」

「えへへ。私の勝ちだね」

ブイ、と右手でVサインを作って見せる。

チルノはぐぎぎと歯ぎしりしてから叫んだ。

「い、インチキだ！ はんそく！ そんな速く動けるなんておかしいじゃん！」

「え？ そんなことないよ、私は一生懸命走ったもん」

「ぐ、ぐぐぐ……！」

さて、と得意気な表情のヒカリはチルノに訊ねた。

「一本目は私の勝ちだね。次は何で勝負するのかな？」

「こ、今度は……」

チルノが考えている間にフランとパチュリーも木の近くへ合流する。長いこと唸り声をあげながら、チルノが提案した二本目の勝負は、

「だ、弾幕ごっこだ！ こうなったらアタイの最強の弾幕見せてあげるよ！」

「やっぱり弾幕ごっこでくるか」

「……本当はそれ以外に考えてないだけなんじゃないの？」

「う、うるさいうるさい！ アタイは最強だからいいの！ アタイ

がルールなの！」

チルノが分かりやすく動揺する。凶星らしい。

「アタイの弾幕は最強なんだぞ！ 当たったらゼツタイピチューン
つてなるんだぞ！ 恐くなったら降参してもいいんだぞ！」

「どんな弾幕かは分からないけど、あの流れ星を取り戻すために受
けて立つよ」

「ふっふっふ、後悔してももう遅いんだからね！ とおッ！」

華麗に飛んでヒカリの真上を取ると、さっそく青い術符をポケット
から取り出し起動させる。

どんな攻撃が来るのか、ヒカリはその場でジッと構え術符を見据え
た。

「氷符『アイシクルマシンガン』！」

ババババババツ！

チルノの両手から凄まじい量の氷柱ついでがまるで機関銃マシンガンのようにヒカリ
に降り注ぐ。

……ちなみに、この効果音はチルノが口でやっている。

「氷が飛んでくるのか。当たったら痛そうだなあ」

「……絶対当たらないって言ってるじゃないあの子」

ヒカリの額に氷柱が突き刺さりそうになる瞬間、突如その姿が霞み
消える。

チルノはそんなことにもちろん気づかず、そのまま氷柱の弾丸を掃
射する。

氷が弾けて白煙が舞い上がるのを確認すると、その手を止めた。

「勝った！ アタイの勝ちだ！」

「ねえ、チルノ」

「何、フラン？」

ちよいちよいと指でチルノの後ろを指差す。

肩に虫でも付いたのだろうか、とチルノが振り返るとゲゲツ！と呻いてから後ずさった。

「いやあ、機関銃は強敵だったな」

「な、何で！？ 何で当たってないの！？」

「これで終わり？」

ニツコリと笑顔で挑発。

もちろん、チルノは顔を真っ赤にして答えた。

「ま、まだまだ！ アタイの最強の術符を見せてあげるよ！」

ヒカリと距離を取って再び術符を取り出す。

次はどんな攻撃がくるのだろうか。ちよつと楽しみだった。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

ゴーツ！ ババババババツ！

今度は猛烈な吹雪が襲いかかり、ヒカリの視界が白に奪われていく。
……相変わらず自分で効果音入れている。

「わ……、これはちよつと厳しいかも」

先刻の弾丸と違って、チルノの前方から放射状に広がる攻撃。少しめんどくさいけど、回り込むしかないか。

再び姿勢を低く構え地面を蹴る。

轟音が響きヒカリの姿が霞むと、チルノの真後ろを捉えた。

「いやあ、もう氷漬けになっちゃったかな？ やっぱアタイったら最強ね！」

「じゃあ、最強を倒したらどうなるのかな？」

「ふえ？」

間抜けな声をあげて振り向くチルノ目がけて、ヒカリは片手を躍らし光の矢を掴む。

「瞬符『光陰矢の如し』」

それも、一本ではなく片手に二本ずつ。

両手でそれらを投げると、光を帯びた矢はチルノの羽を貫き木に張り付けるようにして突き刺さった。

「あ……あれ？」

それはまるで昆虫採集で捕まった虫のように、少々哀れな姿のチルノが出来あがった。

身動きが取れず、チルノは両手両足をバタバタさせてもがいている。

「うわーん！ 何これ、動けないよぉ！」

「へえ……。見事なものね」

「ヒカリちゃん強い！」

「えへへ。ありがと、フラン。さてと」

「う、うう……」

半泣きのチルノがヒカリを見つめる。

しかし何故かヒカリは矢を抜いてチルノを解放した。

「私の勝ちでいい？」

「……う、うん」

ほとんど声は聞えなかったが、首だけはしっかりと縦に振った。それからスツと右手を差し出しチルノに向ける。

「なに？」

「最強の弾幕ごっこ、面白かったよ。また今度やろうね」

「……ま、まあ、いいけど！ 今度はアタイが勝つもんね！」

差し出された手を退けると、チルノは一目散に飛びだした。

……そして、ヒカリの方を振り向いてあっかんべー！ と叫んでから夜の森の中へと消えていった。

「……これで流れ星の無事は確保できたわね」

「うん。それで、あの……一つお願いが」

人差し指をちゅんちゅん合わせながら光が呟く。

何なに？ とフランは顔を覗きこむが、パチュリーは何となく予想がついていたので顔をしかめた。

「……これを運べとか言うんでしょ？」

「お、お手数おかけします……」

「いいよ！ 私が運んであげる！」

すると、フランは穴の空いた流れ星をひょいと持ち上げてニッコリと微笑んだ。

思わぬ怪力に、ヒカリは思わず目を見開いた。

「吸血鬼って、すごいなあ……」

「じゃあ、戻りましょうか。そろそろ眠くてしかたないわ」

パチュリーが軽く欠伸をしながら言った。

気がつくと、遠くの空が微かに白みはじめていた。

第五話 ミッドナイト・バトル（後書き）

美「そういえば、チルノは初出演ですよね？」

夜「書きたい書きたいとか言っておきながら、ほとんど書いてなかったからね。紅魔館から話を広げるときにちょうどよかったんだよ」

美「ってことは、今作は紅魔郷からキャラを？」

夜「別にそんなことはないよ。ただ、ヒカリに関係しそうなキャラは出るけど」

美「ヒカリさんに関係するキャラ……ですか？」

夜「ま、そこはお楽しみってコトで」

美「はい。……ところであの、私の出番は」

夜「したらな！」

美「……………」

言われてみれば、今のところ紅魔郷の範囲でしかキャラが出ていない。

ああ、久々の弾幕ごっこシーンは楽しいな！

早くアイツと戦わせたいぜ……

第六話 メイドと一緒に

次の日、というか、チルノと戦ってから数時間後。

ヒカリは日の出の少し後に自然と目が覚めた。

自室にと宛がわれた部屋を出て、途中妖精メイドに道を訊ねながら食堂へと向かった。

「おはようございます、ヒカリさん」

「お、おはようございます」

ヒカリの姿を見つけるなり、メイド長の咲夜はすかさずコーヒーを淹れてくれた。

目の前の角砂糖とミルクをポイポイ突っ込んでから一口つける。

うむ、朝の一杯は美味しい。

「そういえば、昨日は大丈夫でしたか？ 湖の方へ行ったと聞いたのですけど」

「うん。大丈夫でした。流れ星も、ちょっと修理できれば使えるようになると思います」

「そうですか。それはよかった」

穏やかに微笑む咲夜。

銀の髪が朝日に煌めいてとても綺麗だった。

「今、朝食をご用意いたしますね」

「すみません。昨日いっぱい動いたからお腹空い……ハッ」

図書室のことをすっかり忘れていた。

わなわなと体を震わせながら振り向くと、既に咲夜がテーブルに朝

食を並べていた。

「ふふ。図書室の件でしたらお気になさらずに。もうすでに片付け終わっていますから」

「す、すみません……」

流れ星、宿、朝食。

もはや一宿一飯を通り過ぎて色々とお世話になりっぱなしだ。

「……あの、私出ていった方がいい……でしょうか？」

咲夜は一度きょんととして、それからクスクスと優しく微笑を浮かべた。

「ふふふ。そんなこと気にしていらしたんですか？　でしたら心配無用ですよ。お嬢様も、貴女をしばらくここにおいてあげてもいいと言っていましたよ」

「レミリアが……？」

「それに、すっかり気に入られたみたいですし」

「……？」

咲夜の最後の言葉に首を傾げる。

すると食堂の扉が開き、寝ぼけ眼のフランがフラフラと歩いてきた。

「咲夜、おはよ……」

「はい。おはようございます。珍しいですね、フランお嬢様が早起きするなんて」

「今日は、なんとなく……はわぁ……おはよ、ヒカリちゃん」

「うん。おはよ」

寝起きのフ란の金髪は四方八方にぶっ飛んでて大変なことになってる。

あの部屋、鏡台があつたような気がしたのだが。

続いてレミリアが寝間着姿のまま現れ、次いで小悪魔、最後にパチユリーが現れ紅魔館の朝が始まる。

ヒカリが座つてちょうど席が埋まる。

どうやらこれで全員らしい。

ヒカリは気兼ねなくトーストにジャムとマーメイドをこれでもかと塗りたくってからかじった。

「そつえばヒカリ、貴女これからどうするの？」

ハムステーキにフォークを刺しながらレミリアが訊ねた。

「と、とりあえず自分のお仕事をやるつもりです」

「仕事……、願いを聞く、だっけ？ 何だかちょうどいい時期に堕ちて来れたわねえ」

「……？ ちょうどいい？」

レミリアのドレスにソースが零れ、一瞬でシミが消える。

その一瞬、咲夜がすごい勢いでシミをふき取るのが視えた。

「ま、それは里に行けばわかるんじゃないかしら」

「里……」

そつえば幻想郷に着いたものの、ヒカリはこの地理がさっぱりわからない。

咲夜に地図が無いが訊ねたが、不思議なことに幻想郷を描いた地図はないのだという。

「自分の目で見るのが一番じゃないかしら。論より証拠、百聞は一見に如かず、とか言うでしょ」

パチュリーがブロッコリーをつまみながら口を挟んだ。

「そうね。……咲夜、今日買い出しに行く日よね」

「はい」

「ヒカリも一緒に連れて行ってあげなさい。荷物でも運ばせれば多少は役に立つでしょうし」

「い、いいんですか？」

咲夜は微笑みながら頷く。

ヒカリは小さくガッツポーズした。

「いいなあ。フランもお出掛けしたいなあ」

「フランはダメ。外で何かあったら大変でしょう？」

「平気だよ。だから私も一緒に」

「ええ。今度機会があれば、ね」

「……………」

姉の冷たい言葉にフランは唇を尖らせフォークをテーブルに突き刺した。

木製の洒落たテーブルが一瞬で軋み、ギシィ！ と派手な音を立てて半壊した。

「……何よ、その目は」

「お姉様のケチ。やっと部屋から出れたのに、今度は館に閉じ込めるの」

「違うわよ。これは貴女のためでもあるの」

「そればっか！ 意味わかんない！」

フランが椅子を蹴って宙に飛ぶと、すかさずレーヴァティンを構え姉を見据える。
レミリア

血色の目に妹を映しながら、レミリアは薄く笑みを浮かべた。
フラン

一触即発の空気が漂い、パチュリーは本を閉じ、咲夜は至って冷静にテーブルを瞬時に直した。

「あの、あの……！」

突然勃発しそうになるケンカを前にヒカリがおろおろと慌てふためく。

「いいんですよ。いつものことですから」

「そうよ。ケンカなんて日常茶飯事なんだから」
殺し合い

「でも……」

二人の狂気じみた表情を見てヒカリは悲しそうに顔を歪めた。
ヒカリは知っている。

あの日、フランが流れ星に願ったことを。

フランの願い事は、姉と……

「ヒカリさん、準備が出来たら私のところに来てください。すぐに出発しますので」

「あ、はい……わかりました」

二人の魔力が高まり合って部屋に青い稲光のような火花が散る。
妖精メイドに避難を促され、ヒカリは渋々部屋へと戻った。

「私に勝てると思ってるの？」

「お姉様が負けるまでやる」

「子供ね……」

その手に深紅の槍が握られる。

紅魔館の食堂は一転して戦場へと化し、二人の殺気が包み込んだ。

「うあああああああー!!」

フランの絶叫を背にしながら、ヒカリは自室へと戻った。

・

・

「咲夜さんに準備が出来たら、って言われたけど……」

正直、準備するほどのことは何もなかった。

着替えは下着だけだし、このローブの下にはタンクトップとショーツパンツだけ。

結局、髪を整えておくことしかできなかった。

あっという間に支度を終えて玄関で待っていると、咲夜が音もなく現れた。

「あの、時間を止めてくる必要あるんですか？」

「色々やることがあります。……それにしても、本当に私を目で追えるんですね。いったいどうやって……」

「星の子は動体視力とかがすごく良いんです。でないと流れ星に乗って願い事を聞くななんてお仕事できませんから」

「そ、そうですか……」

単純に動体視力が高いというだけで、時間を止めて作り上げた咲夜

だけの世界を目で追えるわけがない。

それだけならば強い妖怪でも出来るだろう。

他にまだ、何かしらあるはずだ。

彼女の能力ちからだろうか。

すると、しばし無言で思案していた咲夜の顔を見上げるヒカリの目と合った。

「失礼しました。それでは、里へ向かいましょうか」

「はい。あの、やっぱり出かける時も時間、止めるんですか？」

ヒカリの言葉に、咲夜はくすりと笑って答えた。

「買い物するときなどは、ちゃんと流れる時間を感じていたいので能力ちからは使いませんよ。ご安心を」

「そ、そっか。そうだよね」

紅魔館の門を過ぎたところで、ふと横に気配を感じて振り向いた。

「……………」

こつくりこつくりと首を揺らしながら、赤い髪の少女が壁に寄りかかって寝息を立てていた。

門番……………なのだろうか。

ヒカリが咲夜の方を振り向くと、やれやれといった様子でため息をついていた。

「あの……………この人は」

「一応、紅魔館の門の番人です。……………一応」

「起こさなくていいんですか？」

「……………いえ。今はお買い物を優先させましょう。それに、ヒカリさ

んの件もありますので」

「ご、ご迷惑おかけします」

「いいんですよ。では、行きましょうか」

居眠りする門番を残したまま、二人は紅魔館を後にした。

途中、ヒカリは妙に背筋が寒かったのだが何故だろうか……

第六話 メイドと一緒に（後書き）

美「ちょうどいい時ってなんですか？」

夜「そもそも、このお話を書くきっかけとなった出来事とはなんでしょう」

美「きっかけ……あ」

夜「そういうコト」

美「ところで、私の朝ごはんは」

夜「あ。明日はバイトで更新が遅れます」

美「私の朝ごはん……」

アクセス数が少しずつ上がってきた感じ。

読んでくれている方々、ありがとうございます。

第七話 初めての人里

紅魔館から南に向かって歩くこと十分程度。

森を抜けた先でヒカリは視線の先に集落を見つけた。

「あれが、人里なんですか？」

大小様々な木造の建物が建ち並んでいて、その間をたくさんの人が行き交っている。

思いの外賑わっている様子を見てヒカリは目を輝かせた。

「ここが、幻想郷に唯一存在する人里です。ここ以外では他の人間を見ることはありません」

「他の人間……？」

「あ、幻想郷のことあまり知らないでしたね。では、歩きながら説明しましょうか」

なだらかな坂道を下りながら咲夜が説明した。

「ここ幻想郷には様々な種族の者が生活しています。例えばこの人里に生きる人間。妖怪、物の怪といった異形の者。山を管理、統制する天狗や自然界の精霊。紅魔館でメイドをしている妖精や、パチユリー様のような魔法使い。レミリアお嬢様とフランお嬢様は吸血鬼などと言った具合です」

「すごいなあ……。そんなにたくさん種族の人がいるんだ……」

どうやら願い事を聞くのは一筋縄ではいかないようだ。

けど、それは逆に考えればいろんな願い事が聞けるということ、それはそれで楽しみだった。

「他にも例外があつたりしますが、それはまた別の機会に」

「色々ありがと。咲夜さん」

「いえ。また何か訊きたいことなどあればご自由に」

「じゃあ、一ついいですか？」

どうぞ、と促されヒカリは言った。

「あの、どうしてフランは外に出ちゃいけないんですか？」

ヒカリの言葉に、咲夜は一瞬だけ足を止め、その端正な顔を少し歪めた。

悲しそう、というより、少し寂しそうだった。

「それは……フランお嬢様の能力が原因なんです」
ちから

「フランの能力って？」

「フランお嬢様の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。これは、文字通り相手を破壊する能力。一度この能力が使われれば、目の前に存在する全ての物を破壊してしまうんです」

「そ、そんなすごい能力なんだ……」

そんな弾幕を受けて、よく図書室は崩壊寸前で収まったな。

……というか。

「やっぱり、それって弾幕にも影響しますか？」

「もちろん。直撃したらまず命はありませんよ」

そんな強い能力を持っていたから、あんなに自信満々で勝負を持ちかけてきたのか。

もし、自分の能力がなかったら今頃どうなっていたか……

考えただけで体がブルツと震える。

「ですので、お嬢様が外に出るのは危険なんです。うっかり誰かを破壊して帰ってきたら大変ですもの」

「そ、そうですね……」

確かにそれはそれで大変だが、本当にそれだけなのだろうか。

ヒカリは今しがた見せた咲夜の表情が気になっていた。

それだけなら、どうしてあんな顔をしたのだろうか。

他に何か理由があるのだろうか。

何となく追求してみたかったが、気づけば目的地の商店街に辿り着いていた。

「さて、お買い物を済ませましょうか」

「に、荷物持ちます！」

「はい。お願いしますね」

・

・

一通り買い物を終えた二人は、咲夜の提案により茶屋で休憩することとなった。

ヒカリはお金のことを心配したが「ご馳走しますよ」という咲夜の好意に甘えることにした。

「私は、あんみつをいただきますでしょうか」

「みたらし団子、蜜十割増しで」

「十割増し!？」

間もなくしてみたらし団子とあんみつが届く。

リクエスト通り、団子を包む蜜は皿から溢れるぐらい、というか溢れていた。

普通にあんみつと並ぶと、違和感がとんでもないことになっている。

「……あの、流石に甘過ぎませんか、それ」

「私甘いモノ大好きなもので！」

口中蜜だらけのヒカリが答える。

咲夜はポケットからハンカチを取り出してヒカリの口を拭ってやった。

恥ずかしそうに頬を染めるそのヒカリの仕草は、ちょっと可愛かった。

……お嬢様ほどではないが、と心の中で付け加えた。

「お二人さん、ちよいとゴメンよ」

すると、二人の後ろから茶屋の女将が何かを抱えながら店の奥から現れた。

それは緑色の細長い物体で、ヒカリにとっては馴染みのあるものだった。

「あ、それは」

「もうすぐ七夕だからね。ちよいと早いけど子供たちが早く出してつてうるさくて」

女将はよっこいしょと、店の軒先に青々とした葉竹はだけを飾りはじめた。

「もう少ししたら七夕なんです。だからお嬢様はちょうどいい時期だと仰っていたんですよ」

「七夕……」

葉竹を飾る女将の後ろ姿を見つめながらヒカリがぼんやりと呟く。
七夕。

ここ幻想郷では一年に一度、七月七日に行われる一種の神事だと咲夜は言った。

短冊に願いを書きこみ葉竹に吊るすと、その願い事が叶うのだと言われている。

「あなたのお仕事と似ているでしょう?」

「似てるっていうか、これは……」

懐かしい。

七夕の風習を、神事として行っている場所などそうは残っていない。
現代を生きる人は、せいぜい葉竹を飾るだけで後は無粋に適当に騒ぐだけだ。

少なくとも、ヒカリの見ていた世界では。

「……どうかしましたか?」

「ううん。何でもない。ちょっと運命感じちゃっただけですから」

「運命?」

蜜だらけの皿を卓に戻し、ヒカリは一度ウンと背伸びした。

初仕事、やる気が出てきた気がする。

「お勘定、ここに置きますね」

咲夜が団子とあんみつの代金を支払うと、ヒカリと咲夜は大量に買い込んだ荷物を抱えながら帰路へと着いた。
途中、ヒカリが訊ねた。

「私、決めました。今日の夜から仕事を始めます」

「今日の夜、ですか？ それはまたずいぶん急なお話ですね」

「だって、もうすぐ七夕が始まっちゃいますから。七夕の日までには帰れるようにしておきたいし」

「と言つと……」

咲夜が指折り数える。

今日は七の月の一日で、七夕まではあと六日というところだ。

「帰つたら準備しないとな」

「そついえば、願いを聞く仕事というのはどういう風にするのですか？」

興味を抱いた咲夜が訊ねる。

するとヒカリは片手で荷物を抱えながらポシエツトを探り、黒くすすんだ小さな宝石のようなものを取り出して咲夜に見せた。

「……これは？」

きぼうせき

「輝望石きぼうせきって言います。私たち星の子は、流れ星のセンサーで願いを調べてこの石に集めるんです。願いが集まれば集まるほどこの輝望石は輝きを増します。……今は、一人だけしか聞いてないから全然光ってないんだけど」

「願いが集まると光るんですか？」

「はい。願いでいっぱいになるとすっごく綺麗に輝くんです。でも、ちよつと使うのが難しいんです」

輝望石をポシエツトにしまつてからヒカリが続ける。

「ただ、この輝望石はどんな人の願いでも吸収してしまう特性があ

って、時々うつかり悪い願いも吸収しちゃう時があるんです。もしも悪い願いが吸収されると、輝望石が汚れてその効力を失ってしまうことがあるんです」

「悪い願い……ですか」

「だから私たち星の子はセンサーを使って願いを選別し、なるべく公平に良い願いだけを聞くことにしています。でも、ごく稀に悪い願いを叶えてしまうこともあるんですけどね……」

誰かを殺したい。誰かを陥れたい。

そんなこと、わざわざ星に願わなくてもいいのに。

ヒカリは少しだけ顔をうつむかせたが、すぐに首を振った。

「……大変そうですね」

「そんなことない……と、思います。実を言うと、私今回が初仕事なんです」

「でも、ずいぶんとお詳しいんですね」

「お母さんとかお父さんによく話を聞いたし、よくソラを見てたから。みんな、すっごく綺麗でカッコよかった」

「ヒカリさんも、そうなるよう頑張らないといけませんね」

「うん。今日からさっそく頑張るよ。……あれ？」

目の前の紅魔館から白煙が上がっているのを見つけて、ヒカリと咲夜は同時に目を見開いた。

あの場所……図書室のあった場所だ。

「紅魔館から煙……！？ ヒカリさん、急ぎましょう！」

一分一秒が惜しい。
ちから
能力を使っても急ぐべきだと力を込めた瞬間、ヒカリに手を掴まれた。

「ヒカリさん？」

「そっちより、私の方が速い」

「何を……いッー！」

一瞬、息が止まったかと思うと凄まじい圧力に胸が押しつぶされそうになる。

ジェットコースターなどの比ではない。

巨人の手で全力で投げられたら、こんな圧力が全身を襲うのではないだろうかというほどの圧迫感。

あまりの衝撃に、着地した咲夜は激しく咳き込みその場でうずくまってしまった。

「か……は！？ げ、ほッ、つ、い、今の……は！？」

「ご、ゴメンなさい！ 咲夜さんが普通の人間だとは思わなくて…

…」

「い、いえ……それは、構いませんが」

今の衝撃を受けて平然と立っているヒカリの姿を見て、咲夜は驚いた。

咲夜が時を止める、その一瞬よりも早く紅魔館に辿り着いてしまった。

そんなこと、普通なら到底信じられない。

けれどもしかし、咲夜はそれをその身でもって痛感した。

人だとか妖怪だとか、そんなこと無しにしてもヒカリはとてつもないチカラを持っている。

星の子。

まさか本当に星が生み出したとでもいうのだろうか。

しかし、そうでもなければこのチカラは信じれるものではなかった。

「咲夜さん、急ごうよ」

「あ……は、はい！」

思わず呆けてしまっていた。

今はそんなことよりも、お嬢様たちの安否が心配だ。

何とか咲夜が呼吸を整え立ち上がると、二人は一気に館内に向かって走りだした。

第七話 初めての人里（後書き）

美「七夕でしたか」

夜「その通り」

フ「さゝさゝのは、ばらばらッ！」

美「お嬢様、歌詞が違いますよ」

フ「そうだっけ？」

1時間遅れの更新となってしまった；

それにしても、“個性”って難しいなあ……

第八話 火事場ドロボウは魔法使い

「お嬢様、大丈夫ですか!？」

玄関を駆け抜け煙の方へと疾駆する咲夜とヒカリ。

そこで目にしたものは見事なまでにぽっかり空いた巨大な風穴だった。

その傍らでパチュリーが顔を真つ赤にさせながらヒステリックを起している。

「もう！ 魔理沙ったらまた無断で本を持って行って！ しかもめんどくさいからって図書室にこんな大穴空けて逃げて！ また直さなきゃいけないじゃない！」

「……パチュリー様、もしかしくなくてもまた私ですか」

「当然」

「……………ぐすん」

「まりさ？ 魔理沙って誰ですか咲夜さん」

ヒカリの問いの答えはパチュリーの方から返ってきた。

「私と同じ魔法使いよ。……勉強熱心なのはいいんだけど、物を借りる時のマナーがなってないの」

「なってないというか、あの頭の中に存在していますかね……？」

「一度解剖してみようかしら？ キノコとか出てくるかもしれないわね」

「……あの、頭からキノコとかすっごく恐いんですけど」

どんな化け物だ。

パチュリーと同じ魔法使いで、頭からキノコが出てくる魔理沙って

人は。

もしかして侵略者^{エイリアン}の類だろうか。
だとしたら紅魔館の危機である。

「あの、その魔理沙って人が来てたのって何時ぐらいですか？」

「ついさっきよ。……そうか。貴女なら追いつけるのよね」

「はい。速さには自信がありますから」

「ちょうどいいじゃない。私も一緒に行くから魔理沙のところまで飛ばしてちょうだいよ」

「いや、あの、パチュリー様。それは止めておいた方が……って、パチュリー様！」

咲夜の制止も聞かずにパチュリーはヒカリの手をぎゅっと掴んでいた。

「わかりました。じゃあ、本気出すんでしっかりつかまっていますくださいよ」

「ひ、ヒカリさん、パチュリー様は魔法使いですけどお体がくうッ！？」

時既に遅く、爆音と暴風とを残してヒカリの姿は影も形もなくなっていた。

「……あれ？　咲夜、今ヒカリちゃんいなかった？」

気がつくと、フランが図書室の入り口から顔を覗かせていた。

「あ……はい。ですが、今しがたパチュリー様と一緒に外へ……」
「ふうん……」

フランは何か他に言いたげな表情をしていたが、やがて図書室に空いた大穴の向こうをしばらくじいつと見つめていた。

・

・

「あの、パチュリーさん。ところでどこへ向かえば……」

「……………う、うあ……………うあ」

「ぎにゃああああ！？」

行き先を訊ねようと振り向いたら、顔面蒼白のパチュリーがヒカリの肩からだらりと体を揺らしていた。

あまりの恐怖にヒカリは思わずベシッ！ とか音を立ててパチュリーを地面に叩き落としてしまった。

今にも死にそうな顔でヒューヒューと力無い呼吸をしている。

「あの、あの！　だ、だだ大丈夫ですか！？」

「だ、大丈夫に……………見えるの、かしら？」

「いえ。これっぽっちも」

「せ、せっかく、今日は、ケホ、喘息の調子も良かったのに……………貴女のせいで一瞬、三途の川が見えた、わ」

「ううん、この能力に耐えられる人じゃないと使えないなこの移動手段」

パチュリーの背中をさすりながらヒカリが呟いた。

「……………はう。ありがとう。少し落ち着いたわ」

「こ、今度は気をつけますから！」

「い、いえ結構。今度は自力で飛ぶから」

「すみません……」

ヒカリが周囲を見回す。

特に何も考えず飛んでしまったが、ここは何処だろうか。

右を向いても左を向いてもうつそうと木々が生い茂っていて見通しが悪い。

「ここは魔法の森。名の通り、少し変わった森なの。……ほら、見てみなさい」

パチュリーが指差す方向には、人の背丈ほどはあろうかという巨大でカラフルなキノコがうねうねうごめいていた。

それはそのうち華麗なブレイクダンスでも披露してくれそうなほど、激しく小刻みに動いていて、正直グロい。

「この森にはああいった特殊なキノコが自生しているの。その孢子には幻覚作用とか危険な物質が含まれているから、直接吸わないように気をつけなさいよ」

「は、はい……」

誰が好んであんなお化けキノコに近づくもんか。

「でも、そのキノコには危険な物質と共に豊富な魔力が蓄えられていたりするの。だから、魔法使いにとっては良い材料なんだけどね。魔理沙はこういうキノコを使って独自の魔法を研究していたりするの」

「こんなキノコが……研究材料」

同じ魔法使いのパチュリーが言うのなら本当なのだろう。

しかし、こんな気持ちの悪い物で研究なんかして楽しいのだろうか。

パチュリーがふわりと飛んで奥へ進み始めたのでヒカリも後を追う。森の奥に進むにつれて怪しげなキノコがさらに増えていく。

もしも、いきなり手足が生えて襲いかかってきたらどうしようか。そんなことを考えてながら進んでいると、いつしか森を抜けて開けた場所に出た。

ぽつかりと空いたその中心に、青い屋根が特徴的な一件の家が建っている。

どうやら何かのお店らしく、古ぼけた看板には『霧雨魔法店』と不躰な字で書いてあった。

「……ここですか？」

「そうよ。ここに魔理沙がいるはず。さっそく入りましょうか」

パチュリーが何の遠慮も無しに店の戸を乱暴に開け放つ。

不法侵入で怒られるんじゃないかとヒカリは心配でしようがない。

店の中は、一言で言えば滅茶苦茶だった。

棚の本は雪崩のように崩れ、壁には所々に穴だったりヒビだったり。

そしてこの部屋のありとあらゆる場所に本が散らばっていた。

それはもう、本当に足の踏み場がないほどにびっしりと。

「あの……本当にここにその、魔理沙って人が住んでるんですか？」

お菓子の食べカスとかひどい有様だ。

ゴキブリとか……考えたくもない。

「多分、全然片づけ出来ない性格なのよ。自分で片づけしてるの見たことないし、いったいどういう頭してるんだか」

ふわりふわり、本の上を通りながらパチュリーが「ん？」と動きを止めて一つの本に手を伸ばした。

それはだいぶ痛んだ表紙の本でかなりぶ厚い。
パツパと表紙のほこりを取って一度頷く。

「……これよこれ。全く、借りたければ一言私に言えればいいのに、
どうしてそれが出来ないのかしら」

一応確認のため、とパチュリーが本の表紙を開けた途端、まばゆい
閃光が部屋中を包みこみヒカリたちの視界を真っ白に変えてしまっ
た。

「きゃ！」

「わわわ！ な、何にも見えない……！」

「取り返しにに來たのは本人か。念のためにと罫を張っておいて正
解だったぜ」

視界が元に戻り、ヒカリは声の主を求めて辺りに視線を動かす。

「あ、パチュリーさん！」

「魔理沙……！」

部屋の上空に、白と黒のローブ姿の少女が箒に乗って浮かんでいた。
長い金の髪が箒の動きに合わせてゆらゆらと動く。

「魔理沙！ いつも言っているでしょう？ 本を借りたいのなら貸
してあげるって！ なのにどうしていつもいつも勝手に持ち出
すのよ！」

「別にいいだろ。気が向きや返すって。アタシが死ぬまでのほんの
短い時間だ。ケチケチすんなって」

「またそんな屁理屈を！」

「屁理屈も立派な理屈」

「もう！ あつたまきた！」

喘息の調子が良いパチュリーが颯爽と飛び本のすき間からスベルカード術符を取り出す。

そして彼女の周囲に不思議な紋様と文字が浮かび上がり、ある種の魔方阵のような陣が形成される。フィールド

「月符『サイレントセレナ』」

パチュリーの右手から鋭い閃光が奔り、魔理沙目がけて直進していく。

と、魔理沙の目の前で閃光が弾け、彼女を包みこむように四方八方から包み込むようにして襲いかかった。

「なッ！？ こんな応用もありかよ！？」

「大人しく捕まりなさい！」

「はいそうですね、いくかよ！」

閃光のすき間を縫うように箒を操り、魔理沙はするりと弾幕を掻い潜った。

そのまま箒を逆手に構え、不敵に笑った。

「に、逃げられた！？」

「先に仕掛けたのはそっだからな。吹っ飛べ！ 彗星『ブレイジングスター』！」

「ッ！」

箒の先端に光が集まると、それは極太のレーザーとなつて一気にパチュリーに迫る。

術符を使い終えたばかりのパチュリーはほとんど無防備で、成す術

なく巨大な閃光の前に立ち尽くすことしか出来なかった。

「こんのッ！」

直撃を覚悟し目をつぶった瞬間、ヒカリがパチュリーの前に躍り出てそのレーザーを蹴り上げた。

「は、はあッ!？」

「な、何が起こつて……!？」

魔理沙もパチュリーも、呆けたようにヒカリを見つめていた。

「弾幕勝負の最中だったけど、無粋だった？」

「い、いえ……助かった、わ」

「おいおいおい！　なんだ今の!?　弾幕を蹴った？　アタシのブレイジングスターを？　お前、何者だ」

「あつつつ……。い、今のめっちゃ熱かったな……あ」

ごほん。

「わ、私は星の子！　緋誓ヒカリ！　この勝負、私がパチュリーさんに変わってお相手するよ！」

ビシッと指差しポーズを取る。

小さいころから（今も小さいが）ヒカリは正義のヒーローが大好きだ。

困ってる人の目の前に颯爽と現れ、悪を懲らしめる。

今まさに、気分は正義のヒーロー。

テンションは最高潮。

胸が高鳴り過ぎて手汗がヤヴァイ。

「ハッ。いいぜ。何処の誰だか知らねえが相手してやる。ここじゃ狭いからな。外に出なッ！」

「望むところ！」

「ま、待ちなさいよ！」

すごい勢いで窓を破って外へ出る二人を、パチュリーは呼吸を荒げながら追いかけた。

第八話 火事場ドロボウは魔法使い（後書き）

美「きみだけの、ファインダーにうつる」

夜「俺の好きなボカロ曲を歌ったとしても出番はないぞ（しばらくは）」

美「……解せぬ」

ふと思ったけど、自分の書いているオリキャラが全員集まったらどうなるんだろう？

別に俺だけの話じゃなくて、例えば複数作品をアップしてる作者さんにも言えるんだろうけど。

俺のそこは、少なくとも千花は肩身が狭そうw

第九話 『パワー』 VS 『スピード』

「へへッ。こんだけ広けりゃ十分かね」

魔法店を出てしばらく飛んだ先、魔理沙とヒカリは森の中心部で対峙していた。

箒の上で術符を握る魔理沙。

対してヒカリは以前と同様に姿勢を低く構えている。

まずは、相手の弾幕を見切らなくては。

さっきの攻撃は、直進的で恐らく回避は容易いがその威力は計り知れないだろう。

まだ足がヒリヒリしてる。

「ルールは知ってるんだよな？ いきなりで悪いが、遠慮なくやらせてもらうぜ」

握っていた術符を投げ、発動させる。

小さな光弾が弾けると、先ほどの攻撃同様一直線にヒカリに突っ込んでくる。

猪突猛進な攻撃は見切るのが簡単で助かる。

ヒカリは光弾を、可能な限り引き付けてから地面を蹴って光速で回避した。

「……ッ？」

たった今爆発した場所のすぐ横に、ヒカリが無傷で立っていた。

別に強力な攻撃をしたわけではないし、今の弾幕ぐらい避けてくれないと流石に相手にならない。

ただ、魔理沙はほんの一瞬だけ、光弾が着弾する瞬間にヒカリの姿

が霞むように消えたように見えた。
何かの能力だろうか。

「これぐらい、どうってことないよ!」

「何言ってやがる。今のはほんの小手調べ。アタシの弾幕はあんなに貧弱じゃないっての」

微かな違和感を抱えたまま、魔理沙が次の術符を装填する。
次は、もう少し範囲を広げてみるか。

白い術符に光が奔ると、それは魔理沙の手の中で弾けた。

「恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

今度は威力が劣るかわりに広範囲をカバーできるレーザー攻撃。
恐らくこれも容易く避けられるだろう。

だが、ヒカリはレーザーが迫ってくるというのに依然として動く素振りを見せない。

それどころか、微かに困惑がうかがえたような気がした。

「は、範囲攻撃か……。しかもチルノのと違って今度はレーザーだし……」

それでも、どうにかすき間を探しながら光線を回避、それから地面を蹴る。

そしてヒカリは魔理沙の斜め後ろ辺りに着地。

魔理沙は一瞬驚いたように目を見開いて、それから言った。

「……これも避けるか。速さには自信があるみたいだな」

「まあね。もう弾幕は終わり? 次は私の番かな」

「いいや。まだだね」

……試してみるか。

魔理沙は一度地面に着地してから箒をくるりと持ち替えた。一度見られた技だが、囷としてならちよいどいいかもしれない。右手だけで構えた箒の先端に集束していく魔力。

同時に、こつそり左手をローブのポケットに忍ばせる。

「彗星『ブレイジング』」

聞き覚えのある術名にヒカリはこつそり口の端を上げた。

あの術符は凄まじい威力だがあまり範囲はカバーできない術。これなら射線から少し身を引いて飛べば背後を取れる。

「彗星『ブレイジングスター』」

高威力の閃光が地面を抉りながら直進してくる。

思った通り、横の範囲は広くない。

地面を蹴って光線のすぐ傍を走り抜けながら魔理沙の背後でブレーキ。

「……フッ」

「え……ッ？」

顔を上げると、魔理沙と目が合った。

しかしそれは通常ならありえないことだ。

ヒカリの速度は瞬間的とはいえ光速をも越える。

それは人間、いや、生き物が反応できる速度ではない。

それなのに、魔理沙は笑っていた。

「恋符『マスタースパーク』」

魔理沙の左手が輝き、虹色の閃光がヒカリを包み込む。
魔力の奔流に吹き飛ばされ体を激しく叩き付けられた。

「あ……ッ、くうッ……！」

「ヒカリ！」

「騙して悪いが、こつちが本命だ」
マスパ

閃光を浴びてボロボロの体をどうにか起こし、ヒカリは魔理沙を見つめた。

「目で追った……わけじゃないよね。どうして私の位置が分かったの」

「確かにとんでもねえ速度みてえだが……どうやらソレ、まっすぐにしか移動できねえみてえだな」

「……どうしてそう思ったの？」

すると魔理沙はトントンと指で自分の足を示してみせた。

「お前、地面を蹴ってその能力ちから使うだろ。最初っから飛んで戦わな
いってのも変だと思ってたんだがよ、試しに罠を使ってみたらこう
なったってわけだ」

「……そうなの、ヒカリ？」

ヒカリは微かに頷いた。

「……正解。そしてそれが私の能力の弱点。この能力、実はほとんど直線的にしか動けないの。ちょっと悔しいな。フランやチルノは全然気づかなかったのに」

「伊達に異変解決に首を突っ込んでないんだよ。それに、フランは

「ともかくチルノと比べられるのは心外だな」

さて、と仕切り直して魔理沙は筭を構え直した。

先端をヒカリに向けつつ再び術符と小さな炉右手に握る。

「これはもう勝負あつたる。このままフィニッシュと洒落込もうか」
「そうは、いくもんか」

傷付いた体でヒカリが立ち上がり、ポシエットから銀色の術符を取り出す。

ヒカリの持っている術符の中で、いっちばん速い術符。

「速いだけじゃアタシの弾幕は破れないぜ？ 弾幕はパワーがあつてこそそのモノつてのがアタシの信条だ。どんなに速かろうが威力が薄けりや意味がない」

「相手よりずっと速く動いて何もさせずに仕留めることだってできる。力だけの一本槍の攻撃なんて当たらなければ意味がないよ」
パワー

「……さしずめ、お前とアタシは正反対なタイプってわけか」
「そうかもね」

ニツと白い歯を見せ魔理沙は余裕の笑み。
それは勝利を確信した顔だった。

「次で終いだ。手加減も何も無しで来いよッ！ 恋符『マスター」
「」
「刹符『プラチナラピッドファイア』」

魔理沙渾身の術符が発動し、八卦炉から森を半壊させるのではと思わせるような光線が、

バチ…… インッ！

「スパアアアアアアアアアアッ！！」

・
・
・

…… 出なかった。

ヒカリは右手を構えているだけで何の変化もないし、魔法の森も至って平和である。

叫んだ後の妙な沈黙に、魔理沙の顔がみるみるうちに赤くなっている。

「ど、どういうことだ！？ 何でアタシの術が……あッ」

そして、魔理沙は自分の右手にあった物が無くなっていることに気がついた。

今この手には、魔力を込めた自慢のマジックアイテムがしっかりと握られていたはずなのに、その姿が忽然と消えていた。

「お探しのモノは……アレかな」

ヒカリが悪戯っぽく笑いながら、魔理沙の遙か後方を指差す。

そこには小さな八角形をした、魔理沙の大切なアイテムが無造作に転がっていた。

ただただ呆然とそれを見つめて、魔理沙は油の切れた機械みたいなぎこちない動作で振り向いた。

「……う、嘘だろ？」

「いろいろ言いたいことはあるけど……とりあえず」

右手を銃に見立てて構え直し、指先に光弾を集める。

「私に勝つには、速さが足りない」

「あ、ああッま、待て待て待て！ そんな速さの弾幕なんて避けれるわけが」

そんな魔理沙の言葉が耳に届くよりも先に、ヒカリの放った光弾の一斉掃射は容赦なく魔理沙を貫いていった。

光弾が止み、力を使い果たしたヒカリはその場にぺたりと座り込んでしまった。

「……ふう。疲れた。能力込みの術符は骨が折れるよ」

「ち、ちよつとやり過ぎな気がしなくもないけど……。とりあえず本は返してもらっわよ、魔理沙」

ぐったりと倒れこむ魔理沙にパチュリーは言った。

魔理沙はほとんど穴あきチーズみたいな状態でぐうの音も出ない。微かに体がピクピク動いているため、一応は生きてるようだ。

「それにしても、本当に強いわね。チルノの時も思ってたけど、貴女大したものだわ」

パチュリーに褒められた途端、ヒカリは全身を真っ赤にさせてもじもじしながら心底恥ずかしそうに、だけど嬉しそうに言った。

「え、えへへ……。そ、そそそれほどでもないって。か、帰ろう、パチュリーさん」

「先に行つていいわよ。私は貴女の速さには追いつけそうにないし、それに貴女は能力を使えばあつという間でしょ」

「わ、わかりました。じゃあ、紅魔館で待つてま」

ドゴォッ！！

その姿が霞んだかと思えば、ヒカリは何故か目の前の木に全身がめり込んでいた。

漫画の登場人物が人型の穴で墜落するそれと同じように、くつきり人型の穴が出来上がっている。

「……ヒカリ？」

「ら、らいひょうぶ、です！　アハハ………きゅう」

フラッフラでとても大丈夫には見えないが、ヒカリは案の定その場にひっくり返ってしまった。

本当に目をぐるぐる回しながら気絶する少女を、パチュリーは初めて目にした。

「……こんなの、漫画だけのコトかと思っ たわ」

一度大きなため息をついてから、パチュリーはヒカリを肩で担いで魔法の森を後にした。

第九話 『パワー』 VS 『スピード』（後書き）

美「あのー、質問です」

夜「何かね」

美「もし、ヒカリさんの能力のイメージがしづらいつて人がいたら何と説明するんですか？」

夜「そうだな……例えるなら『BLEACH』の《瞬歩》が一番分かりやすいと思うけど」

美「なるほど」

夜「ちなみに、能力の元ネタはとあるゲームの主人公機機能『ゼロシフト』だったりする」

フ「はいだらー」

夜「フランドール・スカーレット！ きさま！ 知っているな！」

元ネタ知ってる人は俺と握手！

ヤツの服を脱がしていたら俺とマヴダチだッ！ W

第十話 妹様の家出

「……ふぁ？ 私、どうなって……アレ？」

目が覚めると、ヒカリは自室のベットで寝かされていた。私はついさつき魔理沙と戦っていて……それから？ 何故かそこから先の記憶が出てこない。

「気がついた？」

振り返るとパチュリーが扉から顔を出していた。

「あ、パチュリーさん」

「まったく。せっかくカツコよく戦ってたのに、最後がアレじゃ締まらないわよ」

「最後……あ」

思い出した。

パチュリーに褒められてご機嫌になってよそ見しながら能力を使っ
たせいで木と正面衝突してしまったんだ。

思い出したら恥ずかしくて全身がカーっとなってきた。

本当に顔から火が出そうだ。

「で、貴女は大丈夫なの？ 服だってボロボロで……？」

パチュリーがヒカリの服を指差しかけて止まる。

魔理沙の術符を直撃したはずのヒカリのローブは、まるで新品同様に直っていたのだ。

ついさっきまで焦げていたり穴が空いていたりしていたのだが、ど

ここにも見当たらない。

「ど、どうかしましたか？」

「……いえ。何でもないわ。それよりも夕食の時間なの。準備が出来たら食堂へ来てってさ」

「あ、はい。わかりました」

何か言いたげな横顔を見送ってから、ヒカリは髪の乱れだけ直して部屋を出た。

食堂ではすでに料理が並べられていた。

大きな鍋には細くて白い麺、そして手元にはめんつゆらしき物の入った椀。

「……え、えっと」

そうめんだった。

咲夜もレミリアもパチュリーもフランも、何も言わず平然と白い麺をつるつるすすっている。

別に夏なのだから別に問題はない。

ない……のだが、この何とも言えないわだかまりは何だろうか。

「どうしたのヒカリ。早くしないと無くなっちゃうわよ？」

フォークでそうめんを食べるレミリアが言う。

そうめんにもフォークってどうなんだ。

「ああ……はい。じゃあ、いただきます」

割り箸を割って麺をすする。

味も至って普通のそうめんだった。

「そういえば、咲夜から聞いたわよ。貴女、今日から仕事を始めるそうね」

レミリアに言われヒカリは頷く。

「はい。でも、この後流れ星に行つて準備しないといけませんけど」
「でも、何も夜行く必要はないんじゃないかしら？ 幻想郷の夜は危ないわよ？」

「たぶん大丈夫だと思います。それに、星を見るのは普通夜でしょう？ だからこの方がいいんです」

「そう。まあ、頑張りなさいな」

それだけ言つてレミリアは食事に戻る。

ふと、フランと視線が合った。

「どうしたの？」

「う、ううん。何でもない」

「……？」

その後、ヒカリは簡単に支度を済ませてから流れ星へと向かった。前にフランに運んでもらつていて、今は紅魔館の犬小屋の傍に置いてある。

「……犬小屋？ 紅魔館に犬なんていたっけ？」

……吸血鬼姉妹の飼う犬つて、どんな犬だろうか。
ちよつと気になったが、想像するのは止めておく。
流れ星の中に入って電源を入れる。

ポウッとパネルに光が灯り内部を照らし出す。

今回用があるのはセンサーだけだ。他の機能に用はない。

「どこだっけ、こっちだったかな……ん？」

パネルの奥に手をつ突っ込んでみると、背中に視線を感じてその手を止めて振り返った。

「フラン？」

流星の穴からフランがヒカリの方を見つめて立っていた。
フランはニコニコしながらヒカリの元へとやってきた。

「えへへ」

「どうしたの？」

するとフランは、人差し指をちょんちょんさせながら上目づかいになっ

て言った。

「あの、ヒカリちゃん今日からお仕事行くんだよね」

「うん。そうだけど？」

「わ、私も一緒に行っちゃダメかな……？」

「一緒に……？」

「私も、外の世界見たいの。お姉様には外を出るなって言われてるけど……でも！」

顔を上げたフランと目が合う。

決意と、迷いが混じったその目は微かに揺れていた。

「め、迷惑かけないようにするから、一緒に連れて行って！」
「うん。いいよ」

「ぜ、絶対邪魔しない。約束す……え？」

ヒカリはニツコリと笑って、フ란の金の髪を撫でた。

「いいよ。一緒に行こうか」

「ホント！？ ホントにいいのヒカリちゃん！」

フ란の表情に笑顔が戻る。

見たこともない世界を見たい、そんなフ란の気持ちはヒカリもよくわかった。

「じゃあ、皆が寝てから行こうか。見つかったら怒られちゃうもんね」

「うん！ じゃあ、また後でね！」

笑顔に戻ったフ란は元気いっぱいになって紅魔館の方へと戻っていった。

その後ろ姿を見ていたら、何だか自分に似ているような気がしてちよっと面白かった。

「私も、世界を見たいからこのお仕事に志願したんだよね……懐かしいな」

流れ星を出て空を見上げる。

満天の星空に、一際輝く星々の大河。

天の川に手を伸ばしながら、ヒカリは呟く。

「……頑張るからね、私。お母さんとお父さんの娘だもん。絶対やり遂げてみせる。だから、見守っててよ」

それからもう一度流れ星に戻って作業を再開する。

やがて夜も更け時計が十二時を指したころ……

「それじゃ、行こっか」

「うん！ どうしよ、ドキドキしてきた！ ねえねえ、最初はどこに行くの？」

「ちょっと待つてね……ん、最初はあつちかな」

「わーい！ 早く行こうよ！」

「フラン、しーッ」

「あ……えへへ」

なるべく物音を立てないよう紅魔館の門を抜け、二人は深夜の幻想郷へと旅立った。

「……………」

そんな二人の姿を、メイド長はこっそりと見送っていた。

第十話 妹様の家出（後書き）

レ「私、ちゃんとお箸使えるわよ」

夜「えッ」

レ「えッ」

今回少なめですが、次回からお仕事スタートです。
最初に会うのは誰なんだろ……？

……わりとあっさり外出れたな；

第十一話 妖精の願い

「ええ……最初はここなの？ 昨日も来たんだけどお」

フランがつまらなそうに顔をしかめた。

二人が最初に向かったのは紅魔館から出てすぐのヒカリの流れ星が墜落した湖だった。

「でも、こつちに反応があるんだけどな」

ヒカリは先ほどつけた腕時計のような形をした機械を示した。
湖の方へ機械を向けると、機械の中心パネルが赤く点滅する。
どうやらここで、誰かが何か願いを祈っているらしい。

夜の湖はほとんど静まり返っていて、時折虫の音が風の音が聞こえてくるだけで、人や何かの気配といったものも感じない。

「チルノじゃないの？ 最強の妖精になるとか、そんな感じの」
「距離が遠いから、まだわからないけど……あ」

センサーの示す方向に、緑色の髪の少女が夜空を見上げていた。
輝望石が微かに震える。

どうやらセンサーの反応は彼女だったようだ。

「あれは……妖精？」

「チルノとよく一緒にいる子だ。何してるんだろ」

フランはトン、と地面を蹴って少女のすぐ目の前へと飛んだ。

「わ！ だ、誰……？」

当然驚く少女。

ヒカリも慌ててフランの後を追いかけた。

「もう。フランったら、いきなり目の前に出たら驚いちゃうでしょ」
「そう？　ねえねえ、あなた何をしてたの？」

少女は少し怯えたような顔になって、スツと身を引いてから答えた。

「あの、流れ星を探してて、その……」

「お願い事するの？　何なに？」

「ふ、フランったらッ」

コホン、とヒカリが咳払い。

なるべく少女を刺激しないように、ヒカリは優しく話しかけた。

「あの、私ヒカリって言います。よかったらあなたのお名前、教えてくださいませんか？」

「な、名前……ですか。私は特に名乗るような名前が無いんですけど……皆からは、大妖精って呼ばれてます」

「でも、そんなにおつきくないよねー？」

しげしげと大妖精を見つめるフラン。

大妖精はますます怯えてしまって、さらに距離を遠くしてしまった。

「あう……」

「そ、そんなに怯えないで。私たちはね、お願い事を聞きに来たの」
「お願い事を……聞く？」

不思議そうに聞き返してきた大妖精に、ヒカリは簡単に説明した。

「私はね、みんなの願い事を聞きにこの幻想郷にやってきたの。夜は、流れ星に願ってる人を探して、お昼は七夕の短冊を調べる予定なの」

「へえ……。願い事を集めているんですか」

「うん。それで、早速なんだけど、あなたの願い事はなんですか？」
「わ、私の願い事……」

すると、大妖精は真夜中でもわかるぐらいに顔を赤く染めてうつむいてしまった。

「えと、その……」

「どんなこと、お願いしてたの？ 主役になりたいとか、自機昇格とか？」

「え……。あの、フラン。何の話？」

「そんなこと、願ってませんよ。私が願ってたのは、その……」

後半はほとんどごによごによとしか聞こえなかった。

……もしかして、誰かに聞かれたら恥ずかしい願いだったのだろうか。

「あ……。ごめんなさい。もしかして、言いにくいかな……？」

「い、いえ。ただ、ちょっとだけ恥ずかしくて」

「もったいぶらずに教えなさいよ」

なかなか言い出さない大妖精に、フランはだんだんとイライラし始めた。

殺気にも似たピリピリした空気をヒカリは肌で感じる。

「私は、友達とみんな元気に、毎日一緒にいられたらいいなって」

「ええ？ なあんだ、そんなこと」

「わあ、素敵な願い事だね！ ちょっと感動しちゃった」

フランは興味無さそうにそっぽ向いて、ヒカリは瞳を輝かせた。
同時に、ポシエットの輝望石に反応があった。

今の大妖精の願いを感じて吸収したらしい。

ポシエット越しに柔らかな温もりが伝わってきた。

「えへへ。教えてくれてありがとう！ じゃあ、帰ろっか、フラン」

「えー……………うん」

大妖精にお礼を言ってお湖を去る二人。

二人の背中を見送ってから、大妖精ははあとため息をついた。

「びつくりした。咄嗟に言っちゃったけど、もしかしてこれでお願
い事が叶うのかな。だったら……………」

もう一度空を見上げて、ぽつりとつぶやいた。

「…………チルノちゃんを、賢くしてください、とかの方がよかったか
な」

・
・

「ねえ、ヒカリちゃん」

「何？ フラン」

早速一つ目の願い事を聞けて満足しているヒカリに、フランは正直

に言った。

「願いを聞くお仕事って、つままないね」

「そ、そんなことないよ。良いお願い事だったでしょ？」

「つままないの。もっとバーン！ って何かするのかと思ってたのに、地味でつまんなかった」

「……そうかなあ」

願いを聞くって、面白いと思うんだけど。

フランはぶつくさ文句を言いながら紅魔館へと続く道を歩いていた。センサーにはもう反応が無いので今日の仕事はこれでお終い。

早く紅魔館に帰らないと、もしかしたらフランが外出したのがバレてしまうかもしれない。

と思っていたところで、ヒカリのセンサーが再び反応した。

今度は少し距離があるが、行けない距離ではない。

「確かこの方角って、人里がある場所……だったかな」

「人里？ 人間が住んでるところ？」

「うん。……って、フランは紅魔館から出たことないから知らないのか」

「そうだよ。お料理になって出てきた人間なら見たことあるけど」

「へえ、人間のお料理……」

……ちよつと待て。

「……フラン、今何て言ったの？」

「ん？ 人間のお料理？」

思わず自分の耳を疑った。

人間のお料理？

人間のお料理って何だ、ソテーとかステーキとか……って、そうじゃなくて！

「ふ、ふふふフランは人間を食べたことがあるの！？」

「あるけど？」

「う、嘘はいけないうフラン！　いくら吸血鬼だからって、人を食べるってのは……」

するとフランは頬を膨らませながら語気を荒げて言った。

「嘘じゃないもん！　ホントだもん！　ずっと前、咲夜に人間のケーキだって教えてもらったもん！」

……今すぐ耳を取り外して交換したい。

そうすれば、今のフランの言葉がただの幻聴に聞こえていたのかもしれない。

ヒカリは本気で思った。

「……ま、まあその話はいいや」

「今度は人間の里かあ。人間ってどんなんだろ。楽しみ」

嬉々として歩きだすフラン。

……里の人間を襲ったりしないだろうか。
もしそうになったら……

「……いや、そうならないように、私が頑張ろう」

フランを連れてきたことをちょっとだけ後悔しながら、ヒカリはそう決意を新たに人里へと向かった。

第十一話 妖精の願い（後書き）

レ「ホント地味な話ねえ……」

夜「う、うるさいな！ 俺だって書いてて地味だと思ったよ！（泣）

」

レ「私の出番も少ないし……。ところで、このメモは何かしら」

夜「あ、それは」

レ「……次回作メモ？ 今度のヒロインは……」

夜「か、勝手にメモを見るんじゃない！ というか、それ落書きみたいなモンだから書くかどうかわからないぞ」

レ「なら、今の内に私が主人公の素敵なお話にすり替えましょうか」

夜「俺口リじゃないんだけど……て、オイ！ 何で俺にグングニル向け」

」

もし書くとしたら、次のヒロインはもう決まっています。

ついでに、主人公は男です。

まだ書くか分からないけど……

第十二話 本能的殺意

センサーの指示通りに歩いて数十分後、ヒカリたちは人里ではなく大きな石段の前にやってきていた。

石段の先は小高い丘となっていてその先には鳥居が見えた。

「……人里からずいぶん離れちゃったけど、どうやらここみたい」

「んん？ 何だか覚えのある匂いがするなあ……」

「ここ知ってるの？ フラン」

フランは何か知ってるような、知らないような曖昧な表情をして答えた。

「わかんない。でも、何となく知ってる人がいそう」

「ふむ……よく分かんないけど、この先に誰がいるんだよね。神社みたいだし、巫女さんかな」

神事として七夕をやるぐらいだから、きっと清楚でおしとやかな巫女さんなんだろうな。

前向きなイメージを抱きながらヒカリは石段をゆっくりと登っていく。

石段は思った以上に長く、頂上に着くころには少々息が切れてしまっていた。

「ふう……。やっとついた」

真夜中の境内には当然人の気配などなく辺りはシインと静まり返っていた。

夜の闇の中にそっと浮かび上がる社は神聖な建物のはずなのに何と

も言えない不気味さを醸し出している。

……その社が、少々ボロいことも関係しているかもしれない。

「夜の神社って意外と不気味だねえ。何か出てきそう」

「何が？」

「何がって、そりゃもちろんオバケとか」

「オバケが出るの！？ 見たい見たい！」

瞳をキラキラさせながらフランが元氣よく答える。

……吸血鬼もオバケと似ているような気がしなくてもないが、とりあえずヒカリは軽く笑って誤魔化した。

本当にいるわけもないし。

センサーを頼りにヒカリが歩きだしその後ろにフランがついてくる。

神社の裏手には幻想郷を見渡せる小高い丘があったが誰もいなく、肌につくような生ぬるい風が吹いているだけだった。

「……誰もいないね」

「でも、気配はするよ」

フランは社の方を指差す。

すると、風に乗って誰かの話し声のようなものが聞こえてきた。

「行ってみようか……フラン？」

何故かフランは少し顔を強ばらせながら社の方を見つめている。

それは何かを警戒、あるいは威嚇しているようにも見えた。

この先に何かがいるとでも言うのだろうか。

「フラン。今度は静かにしててよ？ さっきみたいに驚かせちゃったら大変だからね」

「……………ん」

建物の陰を通りながらそつと歩きます。

どうやらそこは神社の縁側らしく、空を見上げながら何かを話している二人の少女がいた。

一人は、恐らくこの神社の巫女だろう。

赤と白を基調とした和服を着ていて、隣の少女を横目に小さな杯で酒を飲んでいた。

そして、巫女の隣には長い金髪の少女がくすくす笑っていた。

紫色のゆつたりとした出で立ちで、同じく杯を交わしている。

息を飲むほどに妖艶な少女だがどう見ても巫女には見えない。彼女の友人だろうか。

「……………つたく、どうして私はアンタの気まぐれで叩き起こされて星見酒だなんてくつたらないことに付き合わされなければならないのよ」

清らかな姿容を歪めながら毒づく巫女の口調は、ヒカリのイメージをぶち壊すような、恐ろしくぶっきらぼうなものだった。

対して毒づかれた少女は、何が面白いんだか相変わらずくすくす微笑んでいる。

「いいじゃないの。もうすぐ七夕なんだし、ちょっとぐらい風情を楽しみなさい」

「それなら七夕当日でいいじゃないの。私は疲れて眠いの。飲み終わったらさっさと寝るわ」

「つれないわねえ……………。こんな静かで美しい夜なのよ。きっと素敵なのがあるわよ。例えば……………」

艶やかな瞳が細まり、ヒカリたちが隠れている草の陰の方へ向けら

れた。

妖艶な唇がそつと開く。

「思わぬ来訪者……とかね」

「ッ……！」

突き刺さる視線。

ヒカリは思わず体を強ばらせ、動くべきかどうか一瞬迷った。

「隠れていても無駄よ。最初から、とつくに気づいてるんだから」

仕方なく、陰から姿を現すヒカリ。

胸の奥がざわついていて気持ちが悪い。

この人は何だ。それに、どうして私は恐怖している。

目の前の少女はヒカリの姿を見て楽しそうに再び笑んだ。

「可愛らしい来訪者ね。何かご用？」

「わ、私はヒカリって、言います。その、決して怪しい者では、なくて」

「……貴女の後ろの子は、誰なのかしら？」

少女に感づかれフランも姿を見せる。

この人、フランの存在にも気づいていたか。

フランの姿を見ると、二人の少女の目が軽く見開かれた。

「……………」

「吸血鬼の……、レミリアの妹。どうして紅魔館を抜けてここにいるのかしら」

何故か巫女はフランがレミリアの妹だということまで知っていた。

この二人、本当に何者なのだろうか。
そして気がつくと、フランの全身から殺気がにじみ出ていた。
矛先は、巫女の隣の少女。

「……何だお前。胡散臭いやツ」

「初対面で胡散臭いだなんて言うもんじゃないわよ、吸血鬼のお嬢さん。お姉さまに常識を教わらなかった？」

「知らない、そんなの」

「そう。じゃあ仕方ないわね」

少女は縁側から腰を上げ、ヒカリとフランの正面に対峙する。
武器も何も持っていないし、特に構えを取っているわけでもない。
それなのに底知れぬ恐怖を感じるのは何故だ。
ヒカリの足が震える。

こんな感覚は初めてだった。

「……あら、怖いの？」

「ち、違つよ！」

少女が巫女をちよいちよいと指で招く。
巫女は大袈裟に顔をしかめてから首を振った。
面倒事はうんざり、と顔に書いてある。
すると少女が言った。

「ねえ、お二人さん。よかつたら私たちと弾幕ごっこで一緒に遊ばない？」

「わたし“たち”って何よ。私はやるとなんて一言も」

「どうかしら？ 楽しいと思うわよ」

「……聞いてないわね。はあ。せつかくの休みだったのに」
「貴女は年中休みでしょ」

巫女までも腰を上げて少女の前に出て術符を構える。
巫女服と同じ赤と白の術符だった。

「私は八雲紫。やくもゆかり 気軽に紫って呼んでくれて構わないわ」
「博麗霊夢。はくれいれいむ 恨みはないけれど、面倒だからさっさと倒れてちょうだい」

「ち、違います！ 私はお仕事で」

「いいよ。やってやる」

「ふ、フラン！？」

ヒカリの前に出ると、その手に湾曲した剣を握りしめた。
その瞳は殺る気満々。

フランはとても愉しそうに、狂気じみた笑みを浮かべていた。

「今度は負けないからね、霊夢。それから……」

紫を睨み剣を突き付ける。

「お前は何か、嫌いだ。だから壊す」

「ふふ。出来るのならどうぞ？」

瞬間、火蓋が切られた。

常人であれば目で追えないような速度でフランが飛びかかる。

真夜中の博麗神社で、爆音と轟音のオーケストラが幕を開けた。

第十二話 本能的殺意（後書き）

夜「どうでもいい話だけど、東方キャラで野球やったらどうなるんだろうね？」

パ「私はやらないわよ」

美「能力はありますか？」

夜「もちろん。だけど、術符は1試合につきランダムで3枚だけね」
パ「ド ベースじゃないの」

美「でも、面白そうですね。咲夜さんが時を止めて打ったり、投げたり守ったり……」

パ「魔理沙はマスタースパーククラスの剛速球、アリスなら人形使えば一人で9人以上動けるし、レミィやフランのピッチャー返しは即死クラス……」

美「あ、天狗の新聞記者さんならバントでランニングホームラン出来ますよ」

夜「おい、普通に野球しろよ」

でも、書けたら面白そうだな。

チームを考えるのも、何か特別なルールを考えるのも、もちろんタイトルは「東方野球娘」で。

（既出っばいけど、既出でしたらすみませぬ；）

け、決して大正野球娘にハマっているわけではないぞ！
何となくプロ野球の試合見てたらそう思ったただけだ！

第十三話 彼の願い、夜闇を切り裂いて

「あああああッ!!」

真夜中の博麗神社に響く絶叫。

社の屋根の上で、フランは湾曲した剣、レーヴァティンを振り回しながら紫に猛追していた。

「ふふふ。力^{りき}んじやって可愛いわね」

そんな激しい攻撃を紫は容易く往なし、或いは避けながら、フランをからかうように微笑んだ。

それは圧倒的なまでの余裕。

負ける見込みなど微塵も存在しないと、その貌^{かお}が語っている。
事実、フランの弾幕はかすりもしていない。

「すごいな……あの。フランの攻撃を踊りながら避けてる」
「あら、よそ見してるなんてずいぶん余裕ね」

フランの方へ泳がせていた視線を戻し地面を蹴る。

私も自分の敵に集中しないと。

襲いかかる黒と白の、よく分かんない弾幕の間を駆け抜け身を躲す。
巫女は何の驚きも見せずに攻撃を続ける。

「速いわね。すぐくめんどくさいんだけど」

「あの！ だから話を聞いてくださいよ！」

「ん？ 妙な勧誘ならお断りよ。新聞もキャッチセールスもパパラッチも勘弁」

「違うのに!!」

取り付く島もない。

ヒカリは霊夢の弾幕を避けながら、どうにか説得できる方法はないだろうかと考えていた。

とりあえず、よほどの事が無いかぎりこの速度の私を捉えるのは不可能なはず。

巫女と言ったって、恐らく普通の人間だろう。

前の、魔理沙とか言う人には運悪く捉えられたけど今度は失敗しない。

姿勢を低く、低くしてから地面を蹴る。

目の前か背後を取ってこっちの術符で勝てるはず。

ヒカリは霊夢の隙をうかがいながら弾幕を避け続けた。

「……何考えてるのか知らないけど、いい加減倒れてくれない？」

「だから、私は話を聞いてくれればそれで」

「やれやれ。ちつとも聞きやしない」

「どつちが!？」

不意に、霊夢の術符を投げる手が止まった。
今しかない。

ヒカリは渾身の力で地面を抉るほどの蹴りで突進。その刹那で、霊夢の真正面を捉えた。

軽く目が開いてその表情に焦りが映る。

ヒカリは右手拳を強く握り、その中心に力を込めた。

「ゼロ距離もらった！ 迅符『マツハ・ストレイト』！」

「んの……ッ!？」

力いっぱい伸ばした右ストレートが直撃。

霊夢は遙か彼方に吹き飛び、その姿がみるみるうちに小さくなって

いく。

ちなみに、何の能力も持たない相手にこの術符を使うと、もれなく空を煌めく星の一員になれるのだが、

「……チッ。いちいち速くてウザいわね。ちょっと本気を出そうかしら」

霊夢はぺつと血を吐きだしながら空中で静止していた。そして複数枚の術符を握りしめ、四方八方にばら撒いた。

「広範囲攻撃？ 何でここの人ってみんなそんな術符持ってるんだか」

「バーカ。これは攻撃じゃないわ。結界よ」

「結界……？」

ばら撒いた術符が博麗神社を囲い、それぞれが光り輝きだす。

「神技『八方鬼縛陣』」

地面に不可思議な紋様が光り、境内を包みこむ。範囲攻撃を警戒して身構えていたが、激しい閃光に包まれただけで特に何も起こらなかった。

「……何？ 今の、結界って」

「その能力、封じさせてもらったわ。もう素早い動きは不可能なはずよ」

「……そんなはず」

姿勢を低くして、地面を蹴る。そして光速を越える瞬間の強い衝撃がヒカリに、

「ッ、わわッ!？」

衝撃がその身に襲いかかることはなく、ヒカリは思わずつまずいてビターン! と前のめりに倒れてしまった。起き上がると、鼻の頭がヒリヒリしている。

「う、嘘? な、何で……?」

「言ったでしょう。アンタの能力を封じさせてもらったって。これでもう速く動けないでしょ」

霊夢は指先で握った術符を前に構え発動。

針のように鋭い弾丸は雨のようにヒカリの頭上から一斉に降り注いだ。

「ヒカリちゃん……ッ!」

「きゃああああッ!」

弾幕が止み、やがて白煙が包み込む。

霊夢は一度着地してからフン、と軽く息をついた。

「これのどこが素敵な来訪者なのか、是非とも教えてもらいたいものね……ん? 紫、フランは」

「あそこ」

紫が指差したのは白煙が立ち込めている場所。

風が吹き白煙を散らすと、その奥に二つの人影がうかがえた。

「……ひ、ヒカリちゃん、大丈夫?」

「フラン……ッ!」

ヒカリが顔を上げると、フランが両手を広げて立っていた。そしてその背に突き刺さる弾丸を見てヒカリは絶句した。

「嘘……！？ フラン、針が貫通して……！」

「え、えへへ。私は、吸血鬼だから、すぐに治るよ。だから大丈夫」
「フラン……」

傷だらけの体で微笑むフラン。

衣服に滲みだした鮮血が、その傷の深さを物語っている。

「あ、あれ……」

やがてフランの体がゆっくりと崩れ、ヒカリに覆いかぶさるようにして倒れた。

肌に直接伝わる生温かい血の感触。

「ち、ちょっとだけ、ちょっとだけ疲れちゃった。はは……は」
「フラン！？ い、いや……、いやあ！？」

ヒカリの腕の中で、ゆっくりと、まるで眠るように瞳を閉じるフラン。

このままでは、死んでしまう。

フランが死んでしまう。

私の、私のせいでフランが死んでしまう。

「そんなの……」

そんなのは、嫌だ。

「……ッ!」

急に紫と霊夢の表情に緊張が走り、二人同時にヒカリを見据える。

「な、何よ……コレ!？」

突如として地が、空が、世界が、何かに共鳴して地鳴りのような音を響かせたかと思うと、直後、二人の視界が金に染まる。

「アイツ……髪が!？」

霊夢が驚き声をあげる。

白金色だった少女の長い髪が、今まさに黄金に輝いていた。

それは装飾に使われるような陳腐なものではなく、まさしく太陽の輝きにも似た神々しさと温かさを放っていた。

そしてヒカリはフランを抱えたまま、ただじっと、黙って瞳を閉じていた。

ただ、一心に願っていた。

願え。

願え。

願え。

この身には、その力がある。

だから、願え。

正直に。

純粹に。

真摯に。

ただ、ひたすらに。

私は、私は

ヒカリの体からいつそう眩い閃光が迸り博麗神社一帯を包み込む。
霊夢と紫はあまりの激しさに思わず目が眩み膝をもついた。

「まぶッ……し……！」

「でも、あの子の光は何なの……！」

その瞳すら貫くような閃光。

しかし何故か、それは春の日差しのような、とても暖かな光でもあった。

それは草花が陽を浴び芽吹くように。

それは冬を往く獣が目覚ますように。

そして閃光は、一日の役目を終え落ちる夕日のようにゆっくりと、
少しずつ消えていった。

「……う、うん」

フランが目覚ました。

その身を貫いていた弾丸は消え去り、同時に傷も全て塞がっていた。
全身の異常が無いことに驚きつつ、フランは先刻起こった出来事を
思い出そうとしていた。

「あ、あつれ？ 私、胡散臭い奴と戦って、それからヒカリちゃん
を……それ……で？」

フランはヒカリに訊ねた。

「ねえ、ヒカリちゃん。私、それからどうなったの？ ……ヒカリちゃん？」

頬に落ちる雫。

微かな塩の味。

それがヒカリの涙だとわかるのにさして時間はかからなかった。

「ヒカリちゃん、どうして泣いて……？」

「な、泣いてないよ！ ち、ちよつと目にゴミが……う、ん……」
「ヒカリちゃん！？」

ゆさゆさとその体を揺するが、ヒカリは力尽きたかのように何の反応も見せない。

フ란の顔が、みるみるうちに青ざめていく。

「し、死んじやった！？ 死んじやったの！？ ヒカリちゃん！ 起きて起きて！」

「……さて、私は帰りましょうか」
「ちよつと待て」

自分の“すき間”に逃げ込もうとする紫の肩を、霊夢は逃がすまいとがっしと堅く掴んだ。

「痛いじゃない霊夢。そんなリングを片手で割るような握力で握られたら肩の骨が折れちゃうわ」

「だ、ま、れ！ こんな状況で逃げるとかどうかしてるわよ！ アンタにも責任あるんだから最後まで付き合いなさい！」

簡単な応急処置の後、霊夢の案内でフ란はヒカリを抱えて社の中

へと向かった。

第十三話 彼の願い、夜闇を切り裂いて（後書き）

美「ひ、ヒカリさんはスー　ーサイ　人だったんですか!？」

夜「……………（痛い子を見るような半眼）」

パ「……………（呆れて何も言えない瞳）」

咲「……………（ダメだコイツ、早く始末しないと……………的な視線）」

決してそんなものじゃありません。

今作、戦闘シーンがやけに多い気がする。

そして何故、ヒカリと紫で戦闘させなかったのか謎なお話……………；

第十四話 幻想郷を愛する者

どこからか聞こえる声と、吹き抜ける微風。
そしてうつすらと霞む視界。

「う……………ん……………」

「……………あ。ヒカリちゃん、起きた？」

目を覚ますと、ヒカリの目の前にはフ란の笑顔。

ゆっくりと体を起こして周囲を見回すと、ヒカリは全く見覚えのない場所で寝かされていた。

畳張りの部屋に敷布団。

紅魔館とは趣が正反対だった。

和風。しかもかなり年季の入った和風。

「ここ、どこ？」

「神社の中だよ」

「神社……………あ」

先刻の記憶が頭に蘇る。

巫女と戦闘中、能力が使えなくなつて、それから、フ란が私をかばつて……………！

「そついえば……………ふ、フ란！？ 大丈夫なの！？」

「何が？」

フ란は何事も無かつたかのようにあつけらかと答える。

そんなわけがないとヒカリはあたふた狼狽^{うろた}えながらさらに訊ねた。

「な、何がって、さっきあの巫女さんの攻撃がフランの体を貫通して」

「何ともなかった」

「う、嘘だよね？」

するとフランは頬を膨らませその表情をムツと歪めて言った。

「本当だもん！　むしろ、こっちが訊きたいの！　ヒカリちゃん、私に何をしたの？」

「はえ……？　私が、フランに何かした……って？」

うんうん頷くフラン。

しかし、ヒカリにそんな覚えは毛頭無かった。

ヒカリが覚えているのは、能力を封じられて派手にずっこけたことと、血まみれのフランの姿だけだ。

フランは身を乗り出し、やや興奮気味に言った。

「何かね、ヒカリちゃんがパーツで光って、そしたら私の怪我が治ってたんだよ」

「私が、光った？」

「うん！」

冗談を言っている目ではなかったし、そもそもフランが嘘をつくわけがない。

しかし、自分が光ったといわれても全然ピンとこなかった。ヒカリにそんな能力はない。

刹那を瞬く能力にもそんな効果や術符もない。

本当であつたとしても、何故そんなことが……？

「……あら、気がついたのね」

先刻戦っていた巫女、博麗霊夢が現れ、どこか不機嫌そうに腕を組みながら立っていた。

「あ、あなた！」

「さつきは悪かったわね。つい本気を出し過ぎて危うく殺すところだったわ」

「……あの、全然悪びれてるように見えないんですけど」

「そんなことより、体は大丈夫なの？」

あっさりと流されてしまったため、ヒカリはそれ以上言及するのを止めた。

たぶん、言っても適当にあしらわれて終わる気がする。

一応体を動かしてみても、それから頷く。

「……はい。大丈夫です」

「そう。それはよかったわ。巫女が人殺しなんて噂が広まったら、少ないお賽銭がさらに少なくなるもの」

「お賽銭……」

ふと、自分の目的を思い出し腕のセンサーを確かめる。

反応は一つ。

ということは、彼女のものだろうか。

「それで、アンタの目的は何なの？」

不機嫌そうな声で霊夢が訊ねる。

待ってましたと、ヒカリは少し身なりを整えてから答えた。

「あの、私ヒカリって言います。実は、私幻想郷に生きる人の願い

を聞くつていうお仕事で……」

「願いを、聞く？　またずいぶんとめんどくさい仕事ねえ……それで？」

「さつき願っていたのは、霊夢さんですか？」

「さつき……？　私じゃないわよソレ」

「へ？」

予想外の言葉にヒカリは驚いた。

てつきり彼女が、幻想郷の平和でも願っていたのかと……

「平和ねえ……。確かに平和に越したことはないだろうけど、私は星に願うほど暇じゃないわ」

「え、ええ！？　あの、霊夢さん巫女ですよね？」

「そうだけど？」

「巫女つてもつとこう、清楚で、清らかで、もつとこう……何と言いますか、真面目な」

「清楚で清らか……まさに私のことね」

何処にそんな自信があるのかさっぱり分からない素敵な笑顔で霊夢が答えた。

ということは、あの願いは霊夢のものではなくてもう一人の……？　しかし、辺りを見回してもその少女の姿はなかった。

「あの、もう一人の方は……？」

「ん？　紫なら外にいるわよ。興醒めしたから酒を飲むって。一体誰のせいでこんなことになったと思ってるのかしら」

半分はあなたです。

なんて、ヒカリの口から言えるわけもなく。

「あの、少し失礼します」

ヒカリは立ち上がり、縁側から外に出て紫を探した。

紫は反対側の丘の上でのんびりと酒を飲んでいた。

・

・

「こんばんわ。素敵な来訪者さん」

「……あの、反省と言っ言葉を知ってますか？」

「さあ？ 何のことかしら」

優雅な物腰。艶やかな横顔。

少女と称するにはあまりにも妖艶な姿容で紫は微笑んでいた。

「それで、私に何か御用？」

杯に清酒を注ぎながら紫が言った。

「あの、私今この幻想郷に生きる人の願いを訊ねて回っているんです」

「続けて？」

「それで、ここで反応があったんですけど、さっき星に願っていたのは、あなたですか？」

「……さあ、どうかしら」

空の杯に再び注ぎ、そして一口でまた空にする。

微かに頬が紅いのは酔いが回ってきたということだろうか。

「この幻想郷が、永久に美しく平和であってほしい」
「……………」

紫は答えず、杯を傾げた。

「素敵な願い事ですね」
「……そりゃあ、私はこの幻想郷を愛しているもの」

そのまま紫は丘の上から望む夜の幻想郷を見つめながら言った。

「この世界は、何もかもが美しい。生きる人間も、豊かな自然も、妖しき存在ですら愛おしい、とても素晴らしい世界」

うつとりと、悦に浸るような紫の言葉。
とうに空になった杯を捨て、紫はしばし丘の上からその美しい世界を眺めていた。

「……私は、これでも幻想郷の賢者。けれど、それ以前に同じくこの世界の住人。だからこそ私はこの世界を愛している。もちろん、誰よりも」

ヒカリのポシエットから柔らかな光が溢れる。
この反応は輝望石のものだ。

「……あなたの願い、きっと届きます。いえ、届かせます」
「ふふふ。まるで貴女は、目の前に落ちてきた流れ星みたいね。今すぐにでも、貴女が願いを叶えてくれそう」
「そ、そんな力、私にはありませんよ」

輝望石にまた一つ、願いが満ちた。

今日はこれまでにしてそろそろ帰ろう。

早く紅魔館に戻らないと、フランのことがバレてしまうかもしれない。

「あの……その、夜分失礼しました」

「いいのよ。今回はかりは私も戯れが過ぎたから。お詫びに、途中で送って差し上げましょうか？」

「あ、でしたら大丈夫です。すぐに帰れますんで」

「そう。わかったわ。道中気をつけてね」

「はい。では、失礼します」

紫に丁寧に頭を下げ、ヒカリは社の方へと走って行った。

早くフランと一緒に紅魔館に帰らないと。

「あ、ヒカリちゃん」

「フラン。時間がないからすぐに帰るよ」

「え？ わ、ヒカリちゃ ツ！！」

「ずいぶん可愛い子だったけど、いったい何処の子なのかしら……」

紫は静かに立ち上がり、しばし思案を巡らせた後、自分の“すき間”へと帰っていった。

第十四話 幻想郷を愛する者（後書き）

お気に入り登録件数20件、評価ポイントなど、ありがとうございます。
ます。

最近茶番ばっかで全然御礼言ってなかったorz

感想、評価、ご意見や苦情等、いつでもご自由にどうぞ。

第十五話 まだ見ぬ幻想郷

ヒカリの一日は日の出と共に始まる。

それは、たとえ前日に遅く寝ても、である。

「……………ん……………お？」

朝、胸に妙な重苦しさを感じヒカリは目を覚ました。

何かが、ヒカリの胸の上に乗っかっている。

ぼやける視界をごしごしこすってみると、ヒカリの上にフランがぐっすりと眠っていた。

純真無垢な寝顔。

シートによだれがべったりついてるのはともかく、何故フランがヒカリの部屋に？

「……………あ、思い出した」

昨日神社で仕事を済ませた後、急いで帰るために能力を使って紅魔館に帰ったのだ。

そして門を過ぎたところで着地したのだが、フランはその速さと衝撃に耐えきれず、その場で目をぐるぐる回しながら倒れてしまった。それで、仕方なく自室に運んだのだが、ヒカリも疲れて眠ってしまった。

「フラン。起きろー、朝だぞー」

「……………むにゅむ……………ううん……………」

フランは寝ぼけ眼でゆっくりとヒカリを見上げる。
それから少しボケーツとして、またばたりと倒れる。

再び心地よさそうな寝息が聞こえてきた。

「ううん、しょうがない。先に食堂に行こうか」

「……………む」

ヒカリがドアノブに手をかけたその瞬間、フランがむくつと起き上がった。

「……………あ！ ヒカリちゃん、おはよッ！」

「おはよ。昨日はごめんね。体大丈夫？」

「うん。大丈夫。ねえ、一緒に食堂行こッ」

「もちろん。ほら、ちゃんと髪梳かさなきゃ」

ヒカリがぼさぼさの金髪を指差すと、フランはめんどくさそうに唇を尖らせ言った。

「いいよー。咲夜がやってくれるもん」

「ダメ。こういうことぐらい自分でやらないと、ね？」

「むう……………」

鏡台に座らせ、ヒカリはポシエットから三日月形の櫛を取り出してフランの髪を梳かしてあげた。

「フランの髪、綺麗だよね」

「えへへ。そうかな……………」

それはまるで、仲の良い姉妹のような微笑ましいシーン。

鏡に映るフランの笑顔はとても嬉しそうだ。

絹糸のように滑らかな髪を梳かし終わると、フランの寝癖はきれいさっぱりなくなった。

「よし、これでいっかな」

「ありがと、ヒカリちゃん！」

「どういたしまして。じゃ、行こうか」

二人は部屋を出て食堂へ向かう。

途中、フランと手を繋ぎながら階段を下りた。

・

・

食後、ヒカリはパチュリーのいる図書館へとやってきた。

つい先日の派手な戦闘で出来た大穴も、魔理沙が空けたという大穴も無くなっていた。

換気が出来たせいか、埃っぽさが少し失せている。

「私に頼みって何かしら」

パチュリーは自分のテーブルで大きな本を眺めながらヒカリに言った。

「私、このことよく知らないから何か勉強したいなって思ったんです。あの、何か資料とかないですか？」

「ふむ、勉強熱心なのはいいことよ。じゃあ、ちょっとだけお手伝いしてあげましょうか。小悪魔、いるかしら？」

パチュリーの呼びかけに小悪魔が姿を見せる。

一言二言何か伝えると、彼女はパタパタと走りいくつかの本を持ってきてくれた。

どれもこれも年季の入ったような古い羊皮紙の表紙のものばかりで、中には巻物のようなものであった。

「大雑把にだけど、幻想郷に関する資料を持ってきたわ。あまり詳しくは書かれていないけど、どんな場所なのかって程度くらいはわかると思う」

まず、と最初にパチュリーが手にした本は死後の世界についての本だった。

「例えば……この冥界。簡単に言えば死者の魂が彷徨う場所ね。幻想郷には冥界へ通じる何らかの門があるそうよ」

「死後の世界……て。あの、私まだ死にたくないんですけど」

「死なないかぎりは大丈夫でしょ。それに冥界は本当に霊が彷徨うだけでほとんど無害だそうよ。私は、行ったことがないから分からないけど」

「願いの反応があったら、行くしかないか……」

本当に死ななきゃいいけど。

次に手にしたのは妖怪の山についての本のようだ。

「見たことはあるわよね？ この幻想郷で山といたら、ほとんどがこの『妖怪の山』を指すわ。覚えておきなさい。ここは、天狗によって管理されている場所なの。迂闊に入ったら恐らく命はないわ」

「う……。き、気をつけます」

「徹底した警備で内部は安全のようだけど、とても排他的らしいから行くなら注意なさい。他は……そうね、こんなのはどうかしら」

本の表紙には『天上に住まう人』と書かれていた。

天上、ということは雲の上だろうか。

「別名は桃源郷……だったかしら。私も話や伝承でしか聞いたことはないけれど、空の上にはそんな世界があるそうよ。天上の人は不老不死で常に優雅に暮らしているんだとか」

「……何だか御伽噺の世界ですね」

「これに関しては、私も眉つばモノね。魔理沙や霊夢は天人に会ったとか言ってたような気もするけど、証拠もないし」

「……あの二人、そんなに凄い人なんだ」

「あら、霊夢にも会ったの？ 彼女は何だかんだ言いながらも幻想郷で起きる怪異を解決しているの。力も相当なモノよ」

「そ、そうです……か」

それはもう身をもつて体験している。
どうりで強いわけだ。

「そついえばお仕事、上手くいったのかしら？」

「あ、ハイ。ちゃんと願い事も集まっています」

「そつ、それはよかったわね。さて、お勉強の続きはお茶でも飲んでからにしましょうか。ご馳走するわ」

「わぁ！ ありがとうございます！」

ヒカリの屈託ない笑顔につられて、パチュリーも少し微笑んだ。

偶^{たま}になら、賑やかな図書室も悪くないかも、と。

第十五話 まだ見ぬ幻想郷（後書き）

短いですが、二章終了です。

それと、今日は遅れちゃって申し訳ないです；

第十六話 白金と、妹と、スクープと

その夜、つまりヒカリの仕事二日目。

全員が寝静まったのを確認すると、ヒカリは玄関からそつと抜け出し腕のセンサーの示す方向へと歩いていった。

反応はとても小さく、画面の光点も消えかけの豆電球みたいに微かな反応だった。

「これ、すごく遠いってことかな。この直線状には……あ」

月明かりだけが世界を照らす中、闇から浮き出たかのようにそびえる巨大な山。

この幻想郷で森と言えば『魔法の森』。

そして、山と言えば『妖怪の山』。

ついさっきパチュリーから勉強した知識が早速役に立つ。

今夜の目的地が決まったが、ヒカリは浮かない顔をして呟いた。

「うう。天狗がどうのこうのって言うてたんだよねあ……。勝手に入ったら絶対怒られるよねあ」

それでも、恐らく捕まることはないだろうけど。

ヒカリはポシエットに手を伸ばし、輝望石を月明かりにかざした。

淡いミルク色の光を放つ輝望石。

今はちょうど、ムードランプ程度の光だった。

「……悩んでてもしょうがない。私はやるんだもん。うん、やるぞ

ー！」

「やるぞー！」

・ ・ ・ ?

「……お、おー！」

「おー！」

何故背後から声がするのだろうか。

答えは簡単。ヒカリの後ろに誰かがいるから。
しかも、この声は……言うまでもなく。

「……ふ、フラン!?」

「そうだよヒカリ、ちゃんツ！」

「わわわツ!?」

腋から両手が飛びだし腰の辺りからガバツと抱きとめられ、ヒカリは前のめりにつんのめった。

振り返ると、金の髪と宝石のような翼がひよこひよこ揺れていた。フランは顔を上げると、ムツと顔をしかめてから言った。

「私も一緒に行くって言ったじゃんか。どうして置いてくの?」

「え? いや、だってそれは昨日だけかと思って……」

「違うよー! ヒカリちゃんのお仕事が終わるまでずっと! だよ」
「ず、ずっと!? って、そうじゃなくて、どうしてここにいるの?

「さつきフラン部屋で寝てたでしょ?」

「パチュリーのお人形借りてベッドに入れておいたの!」

「……こいつは一本取られた」

「それでね、今日はヒカリちゃんのベッドの下に……」

「怖ッ!」

「えへへ」

何故か否定も肯定もしないフラン。

……とりあえず、ヒカリはため息をついた。

「はぁ……。咲夜さんとかにバレてなければいいけど。しょうがないか」

「やった！ で、今日は何処行くの？」

「妖怪の山。あそこで微かな反応があるの」

「山！ わぁ、楽しみ！」

「お、お願いだから騒いだりしないでよ……？」

「わかった！」

非常に大きな声で元気よくお返事。

それはまるで入学したての小学生の返事みたいだ。
とどのつまり、元気と勢いだけ。

「じゃ、飛んで行こ！」

「ちょ、まだ準備できてな」

紅魔館から飛びだす二つの影。

瀟洒なメイドは影を追いながら、こつそり微笑んだ。

・

・

仕事上、ヒカリが夜を往くというのは仕方のないことである。

太陽が照らす木々は、命の光に溢れ見る者を癒したり和ませたりしてくれるだろう。

しかし月明かり、もしくは夜闇に浮かぶ木々というものは、昼間の時とは打って変わってその表情を一変させる。

陽が照らせば美しく、陰が落ちれば恐ろしく。

「……うわ、流石に雰囲気あるなあ」

「真っ黒だね！」

「正しくは真っ暗。だけど……」

フランの言うとおり、月明かりは巨大な枝葉に遮られほとんど地上に届いていない。

ポシエットの中の輝望石だけはぼんやりと輝いているが、明かりにするには心もとなさ過ぎた。

しかし、なるべく目立たないよう歩くにはちょうどいいのかもしれない。

ヒカリはポシエットをぶら下げ足元だけを照らしながら歩きだした。腕のセンサーの反応が微かに強くなる。

この先で誰かが何かを願っているようだ。

進行方向から水の音が聞こえてきた。

「……わ。これは、すごい……」

やがて開けた場所に出ると、目の前に轟々と流れ落ちる巨大な滝が広がっていた。

水面に叩き付けられた飛沫が夜風に運ばれ頬に当たる。

マイナスイオンたっぷりの風はとても気持ち良かった。

「滝だ！　滝だよヒカリちゃん！」

「す、すごい……本当にすごいなあ……」

流れ落ちる水の音は非常に大きく、フランの声もヒカリの眩きもかき消してしまう。

岩山からそのまま落ちてきたかのような巨大な石に飛び乗り滝の麓へ立つ。

飛沫はその勢いを増しながらヒカリの体に吹きつける。

「気持ちいいな。紫さんやパチュリーさんが言ってた通り、幻想郷は自然が豊かなんだ……おっとと」

と、呆けて自分の使命を忘れるところだった。

ヒカリの使命は、幻想郷に生きる者の願いを集めること。

ここで大自然に癒されている暇はないのだ。

岩場を降り、フランの元へ戻る。

パシャッ

「……？」

その途中、何か機械的な小さな音が聞こえヒカリは振り向いた。もちろんこの場にヒカリとフラン以外は誰もいない。

今の音、シャッター音だろうか。

気配を探し、周囲を見回していると、滝の上の木陰で何かが煌めいた。

目を凝らしてみると、それは丸いガラスのレンズ。

しかし細長い筒のような形状のそれは、遠距離を撮影する時に用いられる望遠レンズ。

つまり、そこから誰かがこちらを撮影しているということ……

「はぁッ！」

右手で矢を作り出し放つ。

レンズを捉え貫いたかと思った瞬間、木陰から何かが飛びだし矢は難なく回避されてしまった。

「いやいや、不思議な客人を見つけたので撮影してみれば、思わぬビッグスクープってヤツですね」

漆黒の翼をはためかせ現れたのは一人の少女。

ポケットのいくつかついた真つ白なシャツに、黒のスカート。

手には望遠レンズのついたカメラと、カメラ用であろう予備のフィルムを握りしめていた。

好奇心に満ちた笑みを浮かべながら二人を撮影し続け少女。
フラッシュが眩しい。

「な、何ですかあなたは」

「おっと、これはこれは申し遅れました。私は射命丸文。しゃめいまるあや 清く正しい射命丸と覚えてくださいませ」

「清く正しい……ですか」

清く正しい者が果たして隠し撮りとはどういう了見か。

いや、それよりも問題なのは……

文がニヤニヤしながら手帳をめくった。

「『封印されていたフランドール嬢、不良と化し夜の幻想郷を駆け巡る！?』これで明日の号外の見出しが決まりましたね」

「ほえ?」

「ど、どうしてフランドールのことを!?」

何か手帳に書き込みながら、文はヒカリの問いに答えた。

「私の情報網を甘く見ないでください。幻想郷の怪異から奥様方へそくりの隠し場所まで。私はどんな情報でも網羅しますから」

清く正しいのにへそくりの隠し場所まで知っているのか。

ツツコミどころ満載の新聞記者は、フンフンと鼻歌交じりに手帳を閉じた。

「さて、劇的なスクープも手に入ったわけですし、早速帰って編集作業に明け暮れますか。では　！」

「ま、待って！」

しかしヒカリの声も届かず、文は空へ飛び上がり瞬く間に山の闇の中へと消えてしまった。
まずい。

早く後を追ってあの写真を取り戻さないと大変なことになる。

「フラン、ちょっと我慢しててよ！」

「ふえ？　あの、ヒカリちゃんもしかし　」

返事を待つのも惜しい。

ヒカリは全力で地面を蹴りその新聞記者を追いかけるため森の中を駆け抜けた。

第十六話 白金と、妹と、スクープと（後書き）

美「私、気づいちゃったんです」

夜「気づいたって、何を？」

美「ヒカリさんって、星の子ですよね」

夜「そうだけど？」

美「白金で、すっごく速いんですよ」

夜「……続けて？」

美「これってつまり、ヒカリさんの元ネタってジジの」
夜「オラオラオラオラオラオラアッ!!」

俺自身ビクリしてるぐらいです；

そうなんだよ。星の白金って書くとあら不思議……w
分かる人だけで、結構です。

ご意見と評価ポイント、ありがとうございました。

他にも意見等あれば、じゃんじゃんバリ言ってください。

作品に対するリクエストとか、俺自身への質問等でも、フリーダムにどうぞ。

第十七話 黒天白夜

「ふふん。これは面白いスクープが手に入りました。紅魔館で幽閉されているといわれていたあのフランドール・スカーレットがこの妖怪の山に、謎の人物と二人で……？」

ふと足を止め思案を巡らせる。

……フランドール嬢と一緒にいたあの少女は誰だ？

幻想郷中を駆け巡る文はほとんどの住人を覚えてはいるが、あんな少女は見たこともない。

誰か外来人が来たという話も噂も聞いていない。彼女はいつたい何者なのか。

いやむしろ、これはひょっとすると二大スクープになるんじゃない……

「ふ、ふふふふ……！」

笑みを浮かべながら体をくるりと回れ右。

今日は本当に運が良い。

紅魔館の秘密たる少女、そして謎の美少女。

前代未聞の二大スクープの予感に文は身震いし、手帳とカメラを取り出した。

「これは、正しく天命！ 天が！ 地が！ スクープが！ この私に書けと囁いている！ 早速引き返してあの少女の調査を」

「待

てえええええッ！！」

刹那、文の正面を暴風と声とが横切り、周囲の木々が次々となぎ倒されていった。

突然の出来事に呆然と立ち尽くし、今自分の目の前で起こった状況

を理解するのに数秒かった。

「……な、ななな何ですか今の風は!？」

目の前に広がる惨状。

何十年、いや、何千年とこの妖怪の山で生きてきた古の樹木たちは
いとも容易く破壊され、まるで森林伐採直後のような有様。

そして、その中心で大きく地面を抉っている一人の少女。

白金色の髪をはためかせながら振り向いた、滝の麓で見たあの少女。
夜の闇の中でもハッキリと見えるその金の瞳に文の姿が映る。

「あの、すみません!」

「は、はい……?」

少女は文のカメラを指差し、草木も眠る深夜というのに遠慮なく大
声で叫んだ。

「そのカメラ、というか写真! 新聞で使うのはやめてください!」

「……はあ? どうしてまたそんなことを? というか、フランド

ール嬢は……あ」

少女の手に、ぐったりと頂垂れるもう一人の少女。

フランドール・スカーレットだった。

先刻見せていたような笑みは消え失せ、顔面蒼白でぐったりしてい
た。

「さ、殺人的加速だ……。あう……」

「大丈夫! 私は死んでないしフランは死なないでしょ?」

「気持ち悪う……」

一体何が起きたのだろうか。
いや、そんなことより……

「い、今の風はあなたですか？ 私をも驚かす風を操るだなんて、
ますます興味が湧きますね。何者です？」

「私は緋替ヒカリ。この幻想郷に、願いを聞きにやってきた星の子
です！」

「星の子お……？」

ヒカリの突飛な言葉に思わず文は苦笑した。

「くつくく。何ですかソレ？ 竹の子の親戚か何かですか？」

「し、失礼な！ 星の子は星の子なんですッ！」

「はいはい。それで、願いを聞きに来た、ですか。ふむふむ……く
く」

微かに笑いながら手帳に書きこむ。

どうやら外来人らしい。

そんな種族は幻想郷にいないし、いたとしたら幻想郷中のほとんどの
情報を握る文が知らないわけがない。

「それで？ 私の写真にどんなご用が？」

「その写真、使われたら困るんです！ フランのこと、みんなに知
られたら……！」

「彼女は紅魔館の秘密ですよ？ 興味のある方は少なからずいます
って。それに、私は一度掴んだスクープを逃すような三流の記者じ
やありませんよ」

「だ、だったら勝負しませんか！」

「勝負……？」

眉根を微かに歪め文が答える。

「弹幕勝負！ 私が勝ったらその写真を返してもらいます！」

「返すも何も、これは私の撮った写真なんですけど……まあ、いいでしょう。じゃあ、もし私が勝ったら、どうするんです？」

「そ、それは……えと……」

「では、私が勝ったらあなたも含め記事にさせてもらってよろしいですか？ もちろん徹底的な取材付きで」

「しゅ、取材って……」

ヒカリは躊躇いがちに視線を反らし、やがて文に向き直る。

金の瞳はゆるぎなく文を見据えていた。

「わ、わかりました。何でもお答えします！」

文は口の端をつり上げて笑んだ。

「それじゃ、お相手してあげますよ。改めて、私は射命丸文。『風を操る能力』を持つ、幻想郷最速の称号を欲しいがままにする風神少女！」

「幻想郷、最速……」

ごくり、と唾を飲むヒカリ。

その体が微かに震えた。

「ふふ。あなたの風も相当な強さみたいですけど、私の速さの前には手も足も出ないでしょう。では　　と」

木々がなぎ倒され広がった荒野に着地すると、文は鳥の羽根が集まったような団扇をヒカリに向けて構えた。

「いざ、尋常に……って、さっきから何をそんなに震えているんですか？ 怖気づいたとか、無しですからね」

「わ、わかってますよ。でも、ちよつとドキドキしちゃって」

「……？ もしかしてあなた、『オ、わくわくすつぞ』的な人なんでしょうか？」

「だ、誰だか分かんないけど……」

ヒカリは顔を上げ、自信に満ち溢れた笑顔で答えた。

「あなたを越えたら、幻想郷最速の称号貰えるのかなって思ったらドキドキしてきたんです」

「……あら。ずいぶんと舐められてるみたいですね。じゃ、最初っから容赦も手加減も無しでいきましょうか」

手にした団扇を軽く一振り。

突如、文の中心から凄まじい光弾の竜巻が巻き起こりヒカリの前に立ちはだかる。

「風の弾幕……！ 範囲広そうだけど、一直線に貫けば……」

そこに無防備に微笑む文がいる。

ただそれを、この速さで貫けば勝てる。

手にした矢に力を加え、矢から槍へと形を作る。

狙いを竜巻の中心、その先の文に定めると、ヒカリは手にした閃光纏う槍を大きく振りかぶった。

今日が初陣となる、ヒカリのオリジナル術符。スベルカード

「私の意地が全てを貫く！ 喰らえ、『ランス・オブ・ブリューナク』！」

漆黒の闇を切り裂く白銀の槍が裂帛の勢いと共に放たれる。

銀の閃光は空気を切り裂き竜巻を貫くと、無防備な文に向かって突進していく。

切っ先が文の体を捉えたかと思った瞬間、その姿が夜闇に霞んで消えた。

「ッ！」

その場から素早く跳躍すると、白銀の槍は巨大な大木に突き刺さり真っ二つにしてしまった。

「おっとと。私の術符を破るとはなかなかの高威力のようですね。驚きました」

「あ、当たってれば勝ったのに！
「そんな簡単に負けるとでも思ってたんですか？ 私を見くびらないでくださいな」

「こ、こうなったらアタシの脚でッ ぶッ！？」

いつものように地面を蹴り文に突進。

しかし、文の姿はいつの間にか空中へと浮かび上がっており、ヒカリはそのまますすぐ木の表面に思いつきり体をぶつけてしまった。

「アッハハハ！ な、何してるんですかヒカリさん？ 私はこっちですよ？」

「う、うおお……鼻がぺっちゃんこにい……」

「さて、私も遊んでいる暇はありませんので、このまま一気に決着を」

文が別の術符を取り出し構えたところで、背後から声が聞こえてき

た。

「せ、先輩！ いったいこれは何事ですか！」

「お、いいところで椈の登場ね」

「ったあ……ん？ あれ、誰だ……？」

ヒリヒリする鼻の頭をさすりながら、ヒカリは大木のとっぺんに立つ人影を見上げた。

月明かりに照らされた白いショートヘアと三角の耳。

道着のような出で立ちに、腰には大型の太刀を帯剣している。

「いいタイミングね椈。ちょっと手伝ってくれない？」

「侵入者の排除ですよ。わかってます」

「まあ、理由は何でもいいか。あの子と戦ってる最中なの。二人でやればすぐに終わるわ」

「了解しました」

「う、うそ……！ 援軍！？」

月を背後に笑う文と、寡黙にたたずむ椈と呼ばれた少女。

圧倒的不利な状況、ヒカリは齒噛みしながら二人を見上げた。

第十七話 黒天白夜（後書き）

また遅れたあ！？

ち、茶番劇はお休みで！

第十八話 コンビネーション・アサルト

「はあああッ!!」

「そらッ! そらそらあッ!」

「うわわッ! やっぱり、ふ、二人分の攻撃は厳しいッ!」

迫りくる斬撃、そして止むことのない光弾の嵐。

ヒカリは二人の意外なコンビネーションの良さに舌を巻いていた。文の激しい弾幕。

掻い潜った先では椀の鋭い太刀が振り下ろされ往く手を阻む。

「あわわ……ッく!」

どうにか回避しながら反撃のチャンスを待つ。

……が、そもそも能力的に少し相性が悪い。

「せめて、空中でもこの速さをコントロール出来ればいいんだけど……」

未だヒカリは地面を走りながら攻撃を躲けている。

空を飛んでもいいのだが、そうした場合この能力をコントロール出来る自信がない。

「椀、そろそろ決めますよ!」

「分かりました!」

羽根のついた団扇を高く掲げる文と、その背後で太刀を握り直す椀。何か仕掛けてくる。

ヒカリは二人を見上げたまま姿勢を低く構えいつでも跳べるように

して待つ。

「疾風『風神少女』」

手にした団扇を薙ぐと、文を中心に凄まじい烈風が巻き起こり、光弾が風に乗って雨のように襲いかかる。

攻撃範囲はかなり広い。

この荒野一帯を埋めつくさんばかりの弾幕と烈風にヒカリは呻いた。

「この風じゃ、踏ん張るので精一杯で……！」

「そこだッ！」

次の瞬間、桜が弾幕をすり抜けヒカリの目の前に躍り出た桜。

その手に握られた太刀は背後の風で加速し一気に振り下ろされる。

「ぶ、ブリューナクッ！」

咄嗟に作り上げた白銀の槍で何とか太刀を受け止める。

しかし、少女の一撃とは思えないような重い一撃にヒカリは顔をしかめた。

「ッ……！ こ、これじゃ、もたない……！」

「このまま、押しますッ！」

少女の体重の乗った太刀に押し込まれ思わず膝を折る。

このままじゃ、やられる……！

「ヒカリちゃんに、何するんだああ……！」

「むッ、新手？ うわああ……！」

ヒカリの横を凄まじいエネルギーの何かが横切り、椀が思わず飛び退く。

目を覚ましたフランが、レーヴァティンを片手にヒカリの元へ駆け寄ってきた。

「大丈夫!？」

「な、何とか。助かったよフラン」

「えへへ」

「むう……。フランドール嬢の加勢。これはちと厳しいか」

「な、何なんですかあの人!? それに今の攻撃は……。ど、どうしますか先輩?」

「任せてください。策はちゃんと考えてあります」

「本当ですか?」

椀の表情が明るくなる。

文の作戦はこうだ。

「まず、私があのヒカリさんという人と戦います」

「はい」

「そして、あなたはフランドール嬢と戦い、あとはそちらでどうにかしてください」

「……………一瞬でも期待した私がバカでした」

「私の考えた作戦に何か問題でも?」

「問題しかありませんよ!？」

二人の上空で椀の叫びが虚しく響く。

「では逆にしますか。椀がヒカリさん、私がフランドール嬢を」

「……………了解です」

太刀を構えヒカリを見据える椋。
ヒカリもキツと見返した。

「……じゃあフラン。そっちも頑張つてね」
「もちろん。あつという間に終わらせてヒカリちゃんを助けに行くよ」

「私の方が早く終わるよ。だから、私がフランを助けに行く」
「じゃあ、競争ね」
「ん。わかった」

フランは空に、ヒカリはまっすぐに同時に飛び出す。

「では、お相手願いましょうか」
「すぐに倒しちゃうんだから」
「それはそれは、楽しみですね」

そして二人の姿が霞む。
と同時に激しい弾幕の内愛が勃発した。

「フラン……、いいなあ。私も能力を使って上手く飛べたらいいのに」
「他所見している暇、あるんですか？」
「そうだった……わ！」

慌てて身をよじり太刀を躲す。
もう少し反応が遅れていたら真つ二つになっていたかもしれない。

「そういえば、あなたの名前は？」
いぬばしりもみじ
「犬走椋。この妖怪の山を警戒する者です」
「紹介……？ 観光案内ってこと？」

「そ、そっちの紹介じゃないです。警戒して、見張りを行う方です」
「ああ、そっちか。ごめんごめん」
「……では、いきます！」

ヒカリも槍を握り直し、椀の太刀を受ける。

今度は一対一。負けるわけにはいかない。

かなりの速さで襲いかかる太刀を見切り、避けながらヒカリも槍を激しく突き立てる。

とはいえ、慣れない武器なので動きは素人並みだ。

「この！ こん……のッ！」

「武術に長けてるわけでは、ない、みたいですね……せいッ！」
「あうわッ！？」

椀が身を屈ませ鋭く足払い。

予期せぬ攻撃に対応できず、ヒカリは思い切りお尻を打ちつけてしまった。

「こ、これで戦うのは今日が初めてなの！ わわッ！」

太刀が頬をかすめ、ヒカリは飛び退いて椀との距離を取る。
危なかった。

もう少し反応が遅れてたら、首と胴体が離婚していたかもしれない。

「……笑えないぞ、それ」

「何を一人でぶつぶつ言ってるんですか……？」

「こ、こうなったらこっちで！ 瞬符『光陰矢の如し』！」

白銀の槍を矢に変え投げつける。

光速をも越える矢は光の軌跡を描きまっすぐに椀へ向かうと太刀を

後方に弾き飛ばした。

「……ッ！？ 今の、速過ぎて見えない……！？」

「次は、刹符『プラチナラピッドファイア』！」

「く、このままじゃ　！」

ヒカリの手から迸る機関銃のような光弾の一斉掃射。

闇を切り裂く光弾はあつという間に椀を貫き後方の大木に叩きつけた。

「あう……」

「勝った！ フランは……！？」

空を見上げると、高速で飛び交う二つの影。

フランは肩を上下させながらレーヴァティンを一心不乱に振り回し続けていた。

「このッ！ 当たれ、当たれえ！」

「当たれと言われて当たるバカはこの幻想郷にませ……、いや、いるかもしれませんが。少なくとも私は当たりませんよ」

「当たれば、勝てるのにい！」

「ハハハ！ 当たらなければどうということはない！」

フランの速度だって一般常識から考えれば容易く超越するほどに速い。

それでも文はその上をいき、余裕すら見せている。

「は、速いな……あの。幻想郷最速つてのは冗談でも何でもないんだ……。っと、ボケツとしてちゃダメだ。フランを助けにいかないと」

軽く地面を蹴って空に浮かび上がる。

フランのすぐ傍に寄り添うと、フランが横目でヒカリを見つめた。

「ヒカリちゃん、早かったね」

「あやや。足止めにもなりませんでしたか桜は。そんな程度では出世の道は遠過ぎて霞んじゃいますよ」

「……ひ、ひどい扱いだ………がく」

桜の声が聞こえたかはさておき、ヒカリとフランは目の前で微笑う文を見据えた。

どうすれば、この人を捉えられる。

どうすれば、この人に追いつける。

「ヒカリちゃんの速さが私にもあれば、追いつけるのにな」

「せめて、私の飛ぶ道を途中で変えられれば……」

ふと、湾曲するフランの剣とその姿が目映る。

「………フラン。ちょっとだけ、やってほしいことがあるんだけど」

そしてその突然思いついたあまりにも突飛過ぎる発想を、フランの耳元で伝えた。

「……え、ええ！？　そ、そんなことホントに出来るの！？」

フランの大声に文の眉根が微かに揺れる。

向こうは何かを企んでいるらしい。

「早くしてくれると嬉しいんですけどねえ。早く現像して、記事を書いて印刷して……くふふ」

文の頭の中ではすでに、この大スクープを称賛され、絶賛され、一躍幻想郷のアイドルになる自分の姿が浮かび上がっていた。

「ど、どうなつてもいいよ？」

「ゴメンね。変なこと頼んで。でも、これなら何とかなるかもしれないんだ」

「じゃあ、やるよ？」

ヒカリは頷くと、何故かそのまま着地してしまった。

そしてフランは術符を発動させレーヴァティンに力を込めている。

「……一体何が始まるんです？」

とか言いながらも文は顔がニヤついている。
完全に余裕の表情だ。

「いくよ、フラン」

適当な木の根元に立ち、ヒカリは上空のフランに目配せする。
フランは微かに困惑の表情を浮かべながらも、頷いた。

「禁忌『レーヴァティン』」

術符が起動し、その湾曲した剣に爆発的な力が集まる。
触れれば全てのものを破壊する力。

それをどうにかコントロールし、そして両手で握りしめて構える。

その姿はどこか、野球の打者のような格好だった。

「今だ！ フラン！」

「ど、どうなっても知らないよ！」

フランが叫び、手にしたレーヴァティンを大きく薙ぐ。

同時にヒカリは地面を蹴って飛び上がると、目の前の木の表面を踏みしめた。

ミシミシと軋み根元から亀裂が走る。

そしてもう一度大木を蹴ると、まっすぐに飛び出した。

目標は、フラン。

いや、フランのレーヴァティン。

「ッ、おおおおおおお！！」

フランがレーヴァティンを薙ぐ瞬間、その一瞬を狙ってヒカリが突進していく。

そしてヒカリの脚が、今まさに振り払わんとするレーヴァティンの腹に触れた。

「あッ……く！」

その衝撃と重さに顔をしかめるフラン。

「そのまま、薙ぎ払って！」

「っく、ああああああッ！！」

ヒカリの乗ったレーヴァティンを力いっぱい振り回し、フランはがむしゃらに振り下ろした。

レーヴァティンと、ヒカリの能力が合わさり、その速度が尋常じゃ

ないほどに加速する。

「シューティング、スター」

「へ？」

「キイイイイイクー！」

あまりにも速過ぎて反応すら許さない跳び蹴りを直撃し、文の姿が霞んだかと思うと、一瞬で地べたに叩き付けられた。

その勢いで、妖怪の山に巨大なクレーターが一つ出来上がるほど。そして、周囲一帯の木々を全て破砕してしまうほどに。

ヒカリはくると回転しながら見事に着地。

手には蹴る瞬間にこぼれ落ちた文のカメラが握られていた。

「ハア、ハア……！ ど、どうだ！ 私の光速の蹴りは！？」

「っ、疲れ……たあ……」

ヒカリの傍にフランが着地。

しかし二人はほとんどヘトヘトで、その場にぺたりと座り込んでしまった。

「む、無茶苦茶……ハア、すぎるよ。野球じゃないんだから、レーヴァテインでヒカリちゃんを打つなんて……もう」

「け、結果オーライ……アッハハ。でも、ホントにもう疲れちゃって……ん？」

見渡すと、何故か周囲が明るい。

しかもよく見るとそれは星や月の明かりの類ではなく、木々の合間から提灯のような人工的な光源が見えてきた。

「……………あ」

そして、ヒカリは今しがた自分の作ったクレーターを思い出し、戦慄した。

今は真夜中。

周囲の木々をありったけなぎ倒し、クレーターまで作るような大騒ぎをすれば、当然天狗がこちらに気づく。
排他的な種族の天狗は侵入者を許さない。

このままここにいて天狗に捕まれば、どんなに可愛く見積もっても死刑確定。

ガバツ！ と立ち上がりフ란の手を掴む。

フ란は顔面蒼白でヒカリの顔を見上げた。

「あ、あの……さ」

「ゴメン、フ란」

そしてヒカリは残る力全てを振り絞って地面を蹴った。

一瞬何かフ란が叫んでいたような気もしたが……、とりあえず後で聞けばいい。

今はとにかく、ここから逃げ出さなければならぬ。

「あれ？ 輝望石に願いが溜まってる……？」

・

・

「お、おい！ 射命丸、大丈夫か！？」

クレーターのど真ん中、そこでのびていた文の表情は、何故か幸せ

そうだった。

「ね、念願の……二大、すくー……ぶ……」

「お、おい！？ 死ぬな、死ぬんじゃない！？ え、衛生班！ 直ちに処置をお！？」

その後しばらく、妖怪の山の警戒レベルが通常の五倍に膨れ上がったそう。

第十八話 コンビネーション・アサルト（後書き）

レ「ずいぶんと無茶苦茶な描写じゃない。しかもこんな拙い文章で、読者にちゃんと場面を理解してもらえるかしら」

夜「……ちよっと自信ないです」

レ「それと彼女の、ブリーユナクだっけ？ 私のグングニルとどちらが上かしら。個人的に少し興味があるわ」

夜「あの……だったらどうして殺気の向きがこちらなんでしょうか」
レ「何となくよ、何となく。フフフ……」

桜「ところであの、シリーズ皆勤賞の私について何かコメントはないんですか……？」

そして二章終了のお知らせ。

妖怪の山にはしばらく入れそうにもありません。

お気に入り登録、評価ポイント等、ありがとうございます。
それと、タグを少し追加しました。

き、キャラが安定しねえ……；

第十九話 目玉焼き論争（前書き）

今回、ギャグ要素強めです。

キャラの崩壊が著しいので注意をば。

第十九話 目玉焼き論争

窓から差し込む光を浴び、今日もヒカリは目を覚ます。
仕事が終わりに眠りについて、時間が時間なのであつという間に朝が来る。

「……習慣って、時々怖い」

むくつと半眼のまま起きて、それから鏡の前で髪を梳かす。
身支度を整え食堂に向かうと、既にレミリアが席についていて新聞を片手に紅茶を飲んでいた。

『新たなる異変！？ 妖怪の山に巨大なクレーター！』

紙面を飾っているのは、昨日ヒカリがあ新聞記者を叩き付け出来上がったクレーター！

レミリアはヒカリに気づき、深紅の瞳を細めて挨拶をした。

「おはよう。仕事は順調なのかしら？」

「お、おはようございます。仕事は、万事順調ですよ？」

乾いた笑いを浮かべながら席につくと、咲夜が早速紅茶を出してくれた。

もちろん、大量の角砂糖とミルクも添えられている。

「し、新聞、見せてもらってもいい？」

「ええ。私はもう読み終えたから。はい」

恐る恐る文章に視線を落とし黙読。

犯人等は未だ不明、となっているのにヒカリはホッと胸をなでおろした。

「珍しいわよね。号外なのに、あの天狗が編集した新聞じゃないのよソレ」

「あの方がこんな大二ニュースを掴んだら、ほっとかないでしょうに」

犯人が不明となっている理由が判明した。

あの人、大丈夫だろうか。

ミルクの入れ過ぎで真っ白な、もはや紅茶という名前が当てはまらなくなった飲み物をヒカリは少し複雑な気持ちですすった。

「おはよう」

「あ、パチュリーさん。おはようございます」

パチュリーは席につくとヒカリと同じように新聞の紙面に視線を落とす。

「…………お、おはよう」

一番最後にフランが現れ、ぼんやりとした足取りで席についた。

まだ完全に起きていないらしく、寝ぼけ眼のまま体がぐらぐら揺れ動いている。

そんなだらしのないフランを見てか、レミリアはため息混じりに言った。

「フラン、ここ最近だらしないわよ。夜更かしでもしてるの?」

「……………ほえ?」

かなり間を開けた返事にレミリアの眉間にしわが寄る。

やがてメイドたちの給仕が始まり朝食が並べられる。

今日の朝食は食パンと目玉焼きとソーセージ。それとコーンポタージュに、デザートはカットフルーツの盛り合わせ。

「いただきます」

「いたふぁ……います」

「まだ寝てるのフラン？ いい加減目を覚まさない」

「今日は目玉焼きかぁ。じゃあ、私は」

目の前に並んだ調味料を順に目で追う。

醤油、ソース、マヨネーズ、ケチャップ……………？ ば、馬鹿な！？

「砂糖が……ない！？」

「いったい何にかける気ですか！？」

それでも一応砂糖を持ってきてくれる咲夜さん。

答えはもちろん決まっているが。

「え？ 目玉焼きには砂糖が常識……」

そんなヒカリの言葉を聞いて、パチュリーが額に手を当てながら心配そうに言った。

「……甘党もそこまでいくと病気よ？ そんな食生活じゃ毎日が糖尿病よ」

「なんて恐ろしい毎日……」

咲夜さんの顔が引きつっている。

私は至って健康なだけだな。

そこで言葉を挟んだのは、今まさに調味料に手を伸ばしていたレミ

リアだった。

「何やってるの。目玉焼きにかけるものなんて全世界共通でしょう？」

「まあ、そうね」

「はい、お嬢様。目玉焼きにかけるのはもちろん」

「醤油でしょ」 「ソースよ」 「マヨネーズですね」

・
・
・
・
・

食堂の空気が止まった。

それから何故か背景が燃え上がり三人の少女が椅子を吹っ飛ばして立ち上がる。

「一応訊くけど、目玉焼きには醤油が常識ルールよねえ？」

「そんなルールはございませんよ、お嬢様」

「……まさかこんなところで世界の歪みを見るとは思わなかったわ」

世界の歪みって。

「何を言ってるのパチエ。目玉焼きというのは和食よ。和食なら和食らしく醤油をかけるのがベストでしょ」

「違うわレミイ。目玉焼きは洋食。故にソースをかけるべき。いいえ、ソース以外あってはならないわ」

「パチュリー様、ソースでは卵本来の風味を損ねてしまう恐れがあります。ここは調味料も原料として用いられるマヨネーズを」

「咲夜、それじゃ卵に卵をかけているのと同じだわ！」

……というか、朝っぱらから妙なテンションで目玉焼きを囲み熱戦

を繰り広げられても。
レミリアがテーブルを叩く。

「咲夜！ 私の命令には絶対でしょう！？ いいから醤油をかけなさい！」

「いいえ。お嬢様の命といえど、これだけは引き下がれません。卵焼きにはマヨネーズです」

「二人とも歪んでいるわ！ ソースこそが至高！ 神なのよ！？」

目玉焼きだけなのにそこまで盛り上がりながらも。

と、もの凄く口を挟みたいのだが、殺気めいた三人の表情を見ていと怖くて言えないし、言ったら恐らく死んでる気がする。

一触即発。

妖精メイドは全員して青ざめていて、ヒカリは苦笑い、フランはフォークとナイフを持つ手がひっくり返っていた。

目の前のソーセージをフォークで切ってナイフで刺すという何とも器用な動作で食べている。

「これじゃ、埒が明かないわね……」

「私に名案があるわ。……ヒカリ」

「は、はい。……なんでしょうか？」

呼ばれて振り返ると、三人分の視線と殺気が一斉に突き刺さった。

「貴女に問うわ。目玉焼きにはもちろん、醤油よねえ？」

深紅の瞳が野獣のようにぎらついている。

一言で言えば、危ない。

「いいえ。ソースよね。ソース以外、何をかけるのかしら？」

傍から見たら愛らしくて素敵な笑顔なのに、何故だろう。
背筋が氷河期だ。

「マヨネーズ、ですよね？」

全身にナイフが突きつけられたかのような緊張感。

……というか既に突きつけられているような気がするのは絶対に気のせいじゃないはず。

「さあ、答えなさい？ 目玉焼きにかけるべきは」

『醤油』 『ソース』 『マヨネーズ』

『『『さあ、選びなさい！』』』

「あ、あうあう……」

脅迫の三重奏。

どれを選んでも恐らくヤヴァイ。

ガチ泣きしそうなのをこらえながら、慎重に、目の前に並んだ調味料を見据える。

伸ばす手が、震える。

不意に、ヒカリにある妙案が浮かび上がった。

これならこの状況を打開し、皆と平和的に食卓を囲めるのではないか？

紅魔館の和気あいあいとした食卓を取り戻すため、ヒカリは手を揺るぎなく広げ、そして掴んだ。

「う、ごめんなさああああい!？」

選んだ調味料を全てぶちまけ、ヒカリの目玉焼きに降り注ぐ。
醤油と、ソースと、マヨネーズと。

「……………」

「……………」

「……………」

おかしい。

三人の視線が凍りついている。
どれか一つに絞るのなら、いっそ全部かけてしまえば結果は同じはず。

この画期的な妙案にスキなどない。
それなのに、何だこの怖気は。

「ヒカリ……。貴女には失望したわ」

「へ…………？」

レミリアの右手で深紅の魔槍が禍々しい光を放つ。
その切っ先がまっすぐヒカリの首筋に突きつけられる。

「何か、言い残すことは？」

「あ、あうあう……………」

「そう。それが最期の言葉ね」

ニツコリと笑うレミリア。

次の瞬間、ヒカリの姿が霞んで消えた。

「ぎにゃあああああああ!？」

グングニルが唸りがあげてヒカリを遙か彼方に吹き飛ばすと、紅魔館の屋根に再び大穴が出来あがった。

第十九話 目玉焼き論争（後書き）

美「目玉焼きには何もかけないのが一番ですよ」

夜「目玉焼きに限らず、俺は何でもかんでも醤油をつけるけどねえ」

美「え？　じゃあコロッケとかは？」

夜「醤油」

美「トーストには？」

夜「醤油」

美「……ところで、私の朝食は？」

夜「さあて！　ヒカリの次の目的地はどこだろうな！」

美「豪華な朝ご飯、羨ましい……しくしく」

夜（……流石に可哀想になってきたな）

今回は息抜きのなお話です。

第二十話 目指せ満漢全席？

「あう……。結局朝ご飯食べれなかったなあ」

空腹で嘆きの声をあげるお腹をさすりながら、ヒカリは人里の中を歩いていた。

太陽がちやうど中天に昇り現在十二時ちよつと過ぎ。

人々は昼食を求めてそれぞれの家々に帰ったり、店屋で何か注文したりしていた。

「せめて、パンの一かけらでも食べればよかったんだけどなあ……」

「ヒカリさん、大丈夫ですか？」

ふと、後ろから声をかけられヒカリは振り向く。

動きやすそうな、たしかチャイナドレスという服だっただろうか。

そんな姿で赤茶のおさげ髪を揺らす少女と目が合った。

紅魔館の門番を務める、紅美鈴。ほんめいりん

実は、ヒカリと美鈴は咲夜のお使いを頼まれている最中だった。

「お気遣いどうも、美鈴さん。大丈夫ですよ。星の子は丈夫です」

ぐぎゅ、ぎゅぎゅぎゅッ、ぎゅうう……

お腹の中の虫が派手な交響曲を奏で始めた。

ホントはそろそろ限界なのかもしれないが、ヒカリはとりあえず笑って誤魔化した。

「……全然大丈夫そうに見えないですよ。そうだ、私が何か御馳走

しましうか」

「え？ いいんですか？」

美鈴は優しく笑ってくれた。

その柔和な顔立ちで微笑まれると何だか胸の奥がホツとする。

例えるなら、近所の優しいお姉さんと言ったところだろうか。

彼女がパン屋のお姉さんだったら、毎日通う大学生が大量生産されそうだ。

……この文章、どっかで見覚えがあるな。

「あの……、ヒカリさん？ 顔が緩んでますよ？」

「な、何でもないです！ じゃ、私冷やし中華食べたいな」

「ええ。それじゃお店に行きましょうか」

美鈴とヒカリは当初の目的を忘れ里の食堂へと向かう。

そして注文した冷やし中華はあつという間にヒカリの前に出された。割り箸を口で割り、調味料に手を伸ばす。

もちろんヒカリのお目当ての調味料は無い。

「今度からマイ砂糖とか持った方がいいのかな」

「あの、普通冷やし中華ってお砂糖かけませんよね……？」

「美味しいんだけどなあ。誰も理解してくれやしない」

「あ、あはは……」

とか文句言いながらもヒカリは喉越しのいい中華麺を一気にすすった。

「なあ、聞いたかよ？」

「あ？ 何だ藪から棒に」

ふと、近くの席の会話が聞こえてきた。
麦茶を飲みながら聞き耳を立てると、里の男二名が何やら話をして
いるようだった。

「新聞の端っこに書いてあったんだがよ、冥界にはお姫様がいてっ
て話じゃねえか」

「ああ、噂はよく聞くよな。俺らとは比べ物にならないほど優雅で
豪奢な生活をしてるってんだろ？」

「そうそう。きっと下々の俺らには理解できないような、とてつも
ない珍味とか毎日食ってんだろうなあ……」

「おいおい。いくらお姫様でも冥界のお姫様だろ？ もう死んでる
だろうに豪華な食事も何もないだろう」

「夢のないヤツだな。もしもの話だよ。きっと毎日満漢全席なんだ
ろうなあ……」

「へッ。俺は普通に酒が飲みりや十分だったの」

「……今の聞いた、美鈴さん？」

「はあ。冥界のお姫様のことですか？ 私はあまり紅魔館外に出る
ことはないで、ほとんど知りませんけど」

「毎日が満漢全席……」

「……いやあの、そんな話してませんでしたよね？」

「毎日が満漢全席……ッ！」

大事なことなの気がしたで二回呟いた。
しかしなんて羨ましい毎日だろうか。

ありとあらゆる料理に砂糖かけ放題じゃないか。

「冥界かあ。誰か願い事してないかな」

「しかし、一度死んだ者が何を願うというのでしょうか……？」

「そう……だね。というか、輝望石も反応するんだかわからないし……あれ？」

ポシェットの奥が温かいので取り出してみると、何故か輝望石が強い反応を示していた。

この近くで誰か何かを願っているらしい。

ヒカリは一足先に店を出て走る。

やがてたどり着いたのは、前に咲夜にご馳走してもらった小さな茶屋だった。

「あ……」

すると店の軒先に飾られた葉竹に子供たちが集まっていて、我先にと短冊を掲げせめぎ合っていた。

「おや、あんたはこの間の」

「こ、こんにちは」

「無邪気なもんだろ。夜でもないのに、ましてやまだ七夕当日でもないのにはしゃいじゃってさ。急いだって意味ないのに」

女将はくくつと笑いながら子供たちを見つめていた。

男の子、女の子混ざって色とりどりの短冊を吊るしていく。

ふと、ヒカリは子供たちの吊るした短冊に手を伸ばしてみた。

【むてきになりたい】

【おひめさまになれますように！】

「うわー、さすが子供だなあ……はは」

誰がかいたのか一目でわかる。

一番図体の大きなあの子と、ちょっと我儘そんなあの子だろう。

【お母さんを、守れるようになれるように】

「……………ふふ」

ほんのりと、胸の奥底がくすぐったいようなこの気持ち。

すると、気弱そうな少年が上目づかいにヒカリを見つめていた。

ヒカリは笑って返した。

「素敵な願い事だね。君の願い事、きつと叶うよ」

「え、えへへ……。ありがと、お姉ちゃん」

「えー？ 無理だよコイツじゃ。かけっこでいつもビリじゃんか」

「そ、それは……あ、うう、……ぐすッ」

「しかも泣き虫だもん。そんなの叶うもんか」

「さあ？ それはどうかかな？」

ヒカリの言葉に、子供たちが一同に振り返る。

「そついうのは気持ちが一番大事なの。ずっとそうやって願い続けてれば、きつといつか強い自分になれるよ、ウン」

「ええ……？」

「ほらほら。短冊飾り終わったらさっさと遊んでおいで。川に行く約束なんだから？」

「あ！ そうだった！ じゃあおばさん、お姉ちゃん、バイバイ！」

「うん。行ってらっしゃいな」

蜘蛛の子散らすように散り散りになっていく子供たちを見送ると、あの気弱そうな男の子が一番後ろでぺこりと頭を下げた。

「ははは、あんな律儀な性格しちゃってさ。一体誰に似たんだか」
「へえ……。女将さんの息子さんなんだ。立派な願い事してるじゃん」

「ま、その優しい気持ちだけ受け取っておくさ」

「いつかこのお店を継いでたりしてね」

「そんな遠い話のことはわからんね。そうだ、よかったら何か食べてくかい？」

「でも、今お金ないし」

「いいよ。今日だけサービスしてあげる」

「ホント？　じゃあとびきり甘いヤツがいいな」

はいよ、と軽い返事をして女将は店の奥へ戻っていった。

その瞳が微かに潤んでいたのを見て、ヒカリは少し嬉しくなった。同時に、ちよっぴりホームシックな気持ちになった。

「…………お母さん、か」

真昼の青空を見上げ、見えないとわかっているのに星を探す。

「おーい！　出来たよ」

女将の声にヒカリは我に帰り、慌てて席について皿を受け取った。

皿に盛られていたのは蜜たっぷりのみたらし団子。

ほんの少し塩っぱかったけど、それがかえって蜜の甘さを引き立てていてとても美味しかった。

第二十話 目指せ満漢全席？（後書き）

パ「あら、今日は美鈴いないの」

夜「台本渡したら凄い勢いで出ていったよ」

パ「ふうん……？（ニヤニヤ）」

咲「ところで、夜斗さんは短冊に何か願い事をしたことあるんですか？」

夜「昔、龍神丸が欲しいって書いたのは覚えてる」

パ「いくらなんでも、もう少し現実的なのにしなさいよ」

夜「じゃあゾイドが欲しい。ケーニツヒウルフ、もしくは妥協してライガーゼロイエーガーでもいい」

咲「子供ですねえ……」

第二十一話 霧の向こうへ

その夜、ヒカリは紅魔館の屋根の上でぼんやりと空を眺めていた。風の音すら聞こえない、蒸し暑い熱帯夜。

食堂でもらったラムネを流し込みながら、ヒカリは夜の闇に目を向けていた。

「……今日は反応、ないのかな」

いつもより少し早めに外へ出ているのだが、輝望石はほんのり明滅するだけで特にこれといった反応を見せることはなかった。今日は誰も、願い事を願っていないのだろうか。それはちよつと寂しい。

「あら、今日は早くに準備してるのね」

いつの間にか、ヒカリの背後にレミリアが立っていた。

レミリアはヒカリの隣に腰かけると、夜空を見上ながら言った。

「あなた、願いを集めているのよね」

「そうだけど……？」

「今、この場で願ったらダメかしら？」

「え……？」

その時のレミリアの横顔は、少しうつむき気味で、何だか寂しそうな表情をしていた。

何かを、躊躇しているようにも見える。

ヒカリはそつと輝望石に手を伸ばす。

ほんのりとした温もりが伝わるが、誰かの願いに呼応している様子

はなかった。

やがて、レミリアが首を振って立ち上がる。

「いえ、何でもないわ。仕事、頑張りなさいよ」

「は、はい……」

それだけ言うと、レミリアは翼をはためかせ庭へと降りていった。何か、願いことでもあるのだろうか。

……もしかして、フ란のことだろうか。

「……ん？」

不意に、輝望石からポツと小さな火が灯るような温かさが伝わってきた。

誰かが何処かで星に願いを込めている。

だが、距離がもの凄く遠いらしい。

一瞬だけ温かくなったかと思ったら、一気に温もりが失せてしまっていた。

輝望石を掲げ方角を調べる。

反応はあるがやはり微弱なものだった。

「これは、飛びながら探すしかないか。……よし、支度しよう」と

屋根を飛びおりテラスに着地。

そのまま自室へ向かうと、途中で咲夜と出くわした。

「あ、咲夜さん」

「お仕事ですか？」

「うん。だけど、今回はどうも遠いみたいで……」

「遠い、ですか。でしたら、お弁当でも作って差し上げましょうか？」

「え？ ホント？ それは助かります！」

腹が減っては戦が出来ぬ。

いや、別に戦はしない（と、思う）が咲夜の申し出はともありがたいものだった。

「それじゃ、何人分作りましょうか？」

「へ？ やだなあ咲夜さん。私は一人でお仕事に……ッ！」

一瞬、ヒカリは言葉を詰まらせた。

この返答は明らかにおかしい。

それはまるで、ヒカリが誰かと一緒に行くことを知っているかのようで……

「二人分で、よろしいですか？」

「え、あ、いやその……」

ずばり人数まで当てられている。

もしかして見られてたのだろうか。

すると咲夜は笑顔で、声を潜めながら小さく答えた。

「ふふふ。ご心配なさらずに。事情は既に存じ上げてますわ。……

フランお嬢様と、一緒に行ってるんでしょう？」

「う……。い、いつから知ってたの？」

「最初から、です。本来、こういうお仕事は門番がするものですけどねえ……」

「あ、あはは……」

今日のお使いのことをすっかり忘れ、さらにはそのお使いのお金で食事をしていたことがバレて、美鈴はあの後厳しく叱られていた。ヒカリは部外者だということでお咎めなし。

叱られている美鈴を見ていてヒカリは小さな罪悪感を抱いたが、美鈴はお気になさらずと笑っていた。

余計、ヒカリの罪悪感は膨れたが。

「レミリアお嬢様には秘密にしておきます。ですが、くれぐれもお気をつけてください。フランお嬢様は今でこそ落ち着いていますが、情緒不安定な面もありますので」

「き、気をつけます……」

それからヒカリは自室で身支度し、部屋を出ようとしたところでフランとぶつかった。

「あ、フラン」

「今日も行くからね！」

「わ、わかったよ。だけど、そんな大声出しちゃレミリアに気づかれちゃうよ？」

「あ……」

慌てて口を塞ぐフランの姿が何だか微笑ましくて、思わずくすくす笑ってしまった。

「あ、ねえねえヒカリちゃん」

「何？ フラン」

「髪、梳かしてほしいな」

「また？ ……しょうがないなあ」

「えへへ」

鏡台の前にフランが帽子を外してちょこんと座る。

……そういえば、吸血鬼って鏡に映らないんじゃないかなかったつけ、と訊ねたら、

「そんな吸血鬼不便だよお」

と笑われた。

まあ、正論だ。

ブラシをかけ終え帽子をかぶせると、フランがヒカリに飛びついた。

「とおッ！」

「わ！ ど、どうしたの急に？」

「何だか、ヒカリちゃんといえるの楽しいんだもん。ねえ、私とヒカリちゃんは、お友達？」

「友達……か。ふふ」

ヒカリは迷うことなく頷いた。

「もちろん。フランは私の友達だよ」

「ホント？ へへ、嬉しいなあ……」

赤面したのが恥ずかしいのか、フランはヒカリの胸に顔を埋めてしまった。

……ちよつとくすぐりたい。

「じゃ、また皆が寝たら行こうか。今日は遠いよ？ 大丈夫？」

「へいき、へっちゃら！」

皆が寝るまでの間、二人は部屋でのんびり談笑して過ごしていた。

それから更に夜も更け皆が寝静まった頃、ヒカリとフランは紅魔館からまっすぐ西に向かって飛んでいた。

輝望石の反応が少しずつ強くなる。

やがて目の前で霧が立ち込めてきたので二人は仕方なく着地して陸路に行くこととなった。

「何だかここ……寒いな」

「そう？ ひんやりしてて気持ちいいよ」

ヒカリは体の震えが止まらず、両腕で抱きとめながらゆっくりと前に進んだ。

霧のせいで視界は最悪。

元来た道すら判別できない。

不安が胸を過ぎる中、目の前に何かを見つけフランが指をさした。

「あ。あれ何かな？」

「あれ……って？」

立ち込める霧がヒカリの視界を邪魔するが、不意に風が吹いて霧を吹き飛ばした。

そして現れたのは巨大な門だった。

「これ……門？ だけど、こんな大きくする必要あるのかなあ？」

ヒカリの言うとおりこの門はかなり大きい、いや大き過ぎた。

たとえ巨人が来ても軽く身をかめたら易々入れるであろうその門

は、何か得体のしれない生き物の巨大な顎門あぎとにも見えた。
門の向こうも、同様に霧に包まれ何も見えない。

「……だけど、この先に反応がある。行くしかないみたいだ」
「えへへ。何だかドキドキするね」

ヒカリは正直不安だったのだが、フランの天真爛漫な笑顔を見ていたらいくらか気分が晴れた。

「よし、奥へ行こうか」
「うん」

揃って門をくぐり歩きだす。

霧はさらに濃くなり、肌を感じている寒さもより厳しくなってきた。
ヒカリの歯がカチカチ鳴りはじめる。

「寒い？」
「だ、大丈夫……」

真夏のはずなのに、この底冷えするような寒さは何なのだろうか。
例えるなら、冷蔵庫の中に突然放り込まれたような全身を駆け巡る冷気。

そのまましばらくずっと、ずっと歩き続けた。
どれくらい歩いただろうか。

やがて霧の向こうに石段が見え始めた。
見上げると、その先も相変わらず霧だらけで、霧と石段以外ほとんど何も見えなかった。

「こ、ここ上るのか……」
「飛んでいけばいいじゃん。あっという間に着くよ？」

「ううん……」

たしかにフランの言うとおり飛んでいけばあつという間だろう。だが、目の前が何も見えない状況で空を飛んで大丈夫だろうか。それを考えると素直に頷けない。

用心して歩いて上るのが無難だろう。

ヒカリは石段を踏みしめた。

「いや。ここは慎重に行こう。何かあつたら大変だし」

「ええ〜？ もう、めんどくさいなあ……」

それでもフランも渋々ついてきて、石段を上りはじめた。

一段一段上るたびに、身を貫くような寒さがヒカリに襲いかかる。

「おつかしいなあ……。このロープ、どんな寒さも暑さも平気なはずなのに」

見上げる視線の先に、石段の終わりが見えない。

一体いつまで上り続けるのだろうか。

……もしかして、終わりがないとでも言うのだろうか。

「……あ。ヒカリちゃん、また何か見えたよ？」

「え〜？ 見えるも何も霧以外何も……」

と、言葉を切って目の前の光景に自分の目を疑った。

いつの間にか石段を上り切り、そして霧の合間から巨大な屋敷が姿を見せていた。

「うわ……！ 何だ、このお屋敷……」

「すごい！ 紅魔館より広くて大きい！」

念のため輝望石をかざす。

反応は強く、この屋敷の奥を示していた。

ということは、ここで誰かが何かを願っているのか。

「じゃ、早速入ろ」

ばふッ

「きやうッ」

「あらら、ごめんなさい？」

門の奥へ入ろうとした矢先、フランが何か柔らかいものにぶつかって思わず尻もち。

「だ、大丈夫？」

「ねえ、大丈夫？」

ヒカリが駆け寄ると同時に、目の前に桃色の髪の少女が顔を覗かせた。

「う、わ！？」

思わずフランを抱えて後方へ飛び退いてしまった。

すると、桃色の髪の少女は首を傾げ、それからくすくすと微笑浮かべた。

「やあねえ。そんな、オバケでも見たような顔しちゃって。……あ、ぶつかってごめんなさい。その子、大丈夫？」

「私は大丈夫だよヒカリちゃん」

「ホント？ …… よかった。あの、すみません。急に飛び出しちゃって」

「ご、ごめんなさい」

ヒカリに習ってフランも頭を下げる。

すると少女はいいのよ、と言って手を振った。

「こちらこそ、ごめんなさいね。食後のお散歩にでも行こうと思ってただけ、屋敷の中は見飽きちゃって……」

「屋敷ってことは、あなたがここの主ってことですか？」

少女はニコリと微笑み頷いた。

「主ってほど大袈裟なものじゃないわ。私、西行寺幽々子（さいぎんじゆうけいこ）っていうの。貴女たちは？」

「私は、緋替ヒカリって言います。で、こっちが」

「フランドール・スカーレット。フランでいいよ」

「ヒカリちゃんに、フランちゃんね。よろしく。……あら？ スカーレットって何処かで聞き覚えがあるような？」

ギクッ！

思わず普通に名乗ってしまったが、名字を出すのはまずかった。

ヒカリはどうかか誤魔化そうと思案を巡らせていたが、それはやがて別の声によって阻まれた。

「幽々子様ーッ！ どちらですかあッ！？」

「むむ。このままじゃ見つかったちゃうわね……」

「へ？ 見つかったちゃうって……？」

「そうだ。ちよっと貴女、付き合ってくださいさらない？」

「付き合うつて……わ、ちよつと？」

すると幽々子がヒカリの手を取り、一目散に飛び出した。
少女にしてはやけに強い力で引つ張られ、ヒカリはほとんど成すが
ままだった。

「ふ、フランも行くよー！」

慌ててその後を追いかけるフラン。
幽々子を含めた三人は、再び霧の奥へ包み込まれていった。

「はあ、はあ……。どうしよう。お屋敷の中で見つからないってこ
とは……。ま、まさか、誘拐！？ い、今行きますよ幽々子様あッ！
！」

さらにその後を、別の少女が裂帛の勢いで駆け出した。

第二十一話 霧の向こうへ（後書き）

パ「突然だけど、東方キャラソートの時間です」

夜「な、何だ突然」

パ「早苗or椋」

咲「や、夜斗さんが窓ガラスに頭ぶつけまくってます!」

パ「どこのドーよ……というか、そこまで悩むものかしら?」

夜「死活問題だズエアッ!」

パ「じゃあ、私と咲夜なら?」

夜「……おかしいな。どっちを選んでも死ぬんだけど」

東方キャラソート……恐ろしい子!

というか、また幽々子登場。

そこまで好きなキャラじゃないんだが……

ちなみに俺の中では、

1位 東風谷早苗

2位 犬走椋

3位 風見幽香 だったりします。

第二十二話 勘違いの辻斬り少女（前書き）

今回、ギャグ要素強め。

第二十二話 勘違いの辻斬り少女

「はふう……。走ったのなんて久々だから、ちょっと疲れちゃったわ」

幽々子は手近な岩に腰をかけると、桜をあしらった優雅な扇子でばたばたと扇いでいた。

「あの、どうして走る必要があったんですか？ それに今の声は……」

「あの子は私の友達よ。だけど、真面目すぎるのが玉にキズなんだけどねえ」

くすくす笑う幽々子。

何というか、ほんわかという表現がピッタリな人だった。

ゆったりとした袖口をした藍色の着物におっとりとした愛らしい瞳。物腰ものんびりとしていて、いいトコ育ちのお嬢様、みたいな雰囲気がある。

屋敷の主なんだから当然か。

「そういえば、ヒカリちゃんとフランちゃんだっけ？ 二人ともこんなところに何しに来たの？」

息を整えた幽々子が横のヒカリに訊ねた。

「私、幻想郷を生きる人の願いを集めるのが仕事なんです。だから、願いを探しにここまで」

「へえ、願い事……。何だか、ロマンチックなお仕事ね。ふふ」

「それで、幽々子さん。この辺りで何か願い事をしているような人

「見ませんでしたか？」

「ううん……、そうね。もしかしたら」

「幽々子様ぁッ……！」

再び声を遮られ振り返ると、そこには銀の髪少女がぜいぜいと肩で息しながら立っていた。

背と腰には、少女には不釣り合いな刀を帯剣している。

……今、幽々子様と呼んでいたような。

「あらら。あつさり見つかったやつた」

幽々子はやりわりと笑っていたのだが、何故か銀の髪少女はヒカリを見つけるや否や、全身から溢れんばかりの殺気を放った。

「貴様が……」

「へ……？ ああ、どうしてそんな怖い顔して……」

「ジャキーン！」

甲高い音共に背と腰の二刀が抜刀され切っ先がヒカリに向けられる。鬼気迫るような表情で睨み据えられ、ヒカリはまるで蛇にガン飛ばしされた小動物みたいに縮こまることしか出来なかった。

「貴様が幽々子様をかどわかし、あまつさえこのような辺鄙な場所まで連れ去ったのだな！ 許さんッ！ 絶対に、許さんッ！」

「ち、ちちち違ふよぉ！？ 私は幽々子さんに引っ張られてここまです……。ゆ、幽々子さんからも何か言って って、うぉわぁッ！？」

間一髪のところを刃を回避し飛び退く。

しかし銀の髪の少女は刃を繰り出しヒカリに襲いかかってくる。

「はぁッ！ せえいッ！」

「だから、うわわッ！ 話を！ 聞いて、つつてるの、にい！？」

聞く耳持たず、少女は猪突猛進に斬り込んでくる。

神速かとも思える、それは普通の人間が繰り出すような速度の斬撃とは思えなかった。

二刀から繰り出されるコンビネーションに舌を巻きつつ、ヒカリはどうにか攻撃を回避していた。

「だけど、このままじゃ、やられ……、ひッ！？」

「避けてばかり、いないで！ 正々堂々、戦いなさい！」

「もう！ なんで、こうッ、なるのッ！？」

能力を使って逃げ出したいが、少女の剣閃がそれすらも阻んでくる。少しでも気を抜けば一瞬でばっさり斬られる。

「……そうだ。距離を取れば」

後方に大きく退くと同時に踏み込めば、少しは能力を使う時間があるかもしれない。

とにかく、一瞬でも不意をつければいい。

少女の不意について術符を使って身動きを封じる。

それさえできれば勝機はある。

「よおし……！」

少女の斬撃が大振りになるのを待つ。

大振りになったところを見計らって後方に飛び出し能力を使って踏

み込む。

そして、時が来た。

「はぁぁあッ！！」

二刀を振り上げ斬りかかる、その瞬間にヒカリは地面を蹴って飛び退いた。

距離は十二分に空いた。

この一瞬の時間を逃したりはしない。

「ここから一気に加速して」

ヒカリが姿勢を低く構えたその瞬間、驚くことに目の前にはすでに少女が踏み込んでいた。

「な……！！？」

「そこおッ！」

「ひいいいッ！？ ど、どうなってるのお！？」

身を屈めて回避……したはずなのだが、髪の毛が数本斬られたような気がした。

そしてヒカリに再び斬撃のラッシュが襲いかかる。

「この！ いい加減に斬られなさい！」

「無茶苦茶なあ！？ 斬られたら死んじゃいますよあ！？」

「是非とも死んでください！」

「ぎにゃぁぁぁあ！？ ど、どどどどうしよっ、うわぁ！？」

止むことのない斬撃の嵐。

ヒカリも槍で反撃しようにも、これでは出す暇もない。

そうだ。フランからレーヴァティン借りれないだろうか。

「ふ、フラン！？」

ちらと視線を動かすと、フランと幽々子は向かいあいながら座って何かやり取りをしていた。

「むゝ！ お姉さん、あっち向いてホイ強いなあ。もっかい！」

「いいわよ。じゃんけんぽん。あっち向いて……ホイ」

「むむむ……。また負けた」

「何やってんのぉ！？ うあ、わわわ！？」

白刃がヒカリをかすめる。

赤い雫が頬を伝わって口に入ると、鉄臭い嫌な味がした。

「逃げているだけでは、私には勝てませんよ！」

「くそう……！ 何だか、私はこの人と相性が最悪な気がする……！」

恐らく彼女は剣の達人。

しかもとんでもないレベルの達人。

免許皆伝の人が免許皆伝するような……、いや、これは何だか妙な例えだが。

とにかく、彼女はとんでもなく強い。

ヒカリは何となくだが少女の太刀筋を覚えた。

今しがた見せたあの剣術は恐らく居合抜き。

刀に全身全霊の力を込めながら刹那を見切り、その一瞬に込めた力を一点に集中させ放つ神速の剣。

たぶんヒカリが能力を使って飛んだとしても、その刹那ですら見切

られてしまつかもしれない。

一瞬、それは本当に短い時間の世界。

そんな世界を垣間見れる二人だからこそその戦い。
圧倒的にヒカリが不利……なのだが。

「ぐぐぐ……」

手も足も出ない。

いやもう本当に。迂闊に出せば斬られそうだ。

「さあ！ 観念してお縄につきなさい！」

「私は無実だあ！？ フラン、助けてえ！？」

「じゃあ……こつちかしら」

「残念、またババだよお！ お姉さんババ抜くの上手だねえ」

「ううん……。どうしてかしら……？」

「じ、自力で何とかするしかない！」

援護や助力は諦めた。

というか何処から出てきたトランプ。

しかも二人でババ抜きとか寂しくないのか。

「せいやあッ！」

「あうわッ！ もう、こつちは、疲れて、きて……ッあ！？」

気がつくと、ヒカリは崖の端まで追いつめられていた。

崖の下まで霧が深く立ち込めていて、その奥をうかがい知ることは
出来ない。

落ちたら……たぶん。

「隙ありッ！」

「え？ ちょ、あ……ッ」

トン、と自分の足が地を蹴る感触。

そして同時に重力がヒカリの全身に襲いかかり、今自分の身に何が起きているのか、混乱して何もわからなくなった。

「ひ、うわ……ッうあああ！？」

その力に逆らえず、抗えず、ヒカリはそのまま奈落の底へと真逆さまに落ちていった……

第二十二話 勘違いの辻斬り少女（後書き）

あ「ねえ？ ボクの出番ないの？」

夜「うお！？ な、なんでここにあってなが？」

あ「だって退屈なんだもん。前に言ってたオリキャラだけのお話やらないの？」

夜「考え中だ。鋭意考え中」

今日、ちよつとお祭り行つて少し遅れちゃいました；
申し訳ないです。

P S

鈴村さん、真綾さん、ご結婚おめでとございます！
末永くお幸せに！

第二十三話 冥界から地獄

揺れる……

それはまるで波間に揉まれて揺れるように、ぐらり、ぐらりと穏やかなリズムで体が上下している。

目を開けると、薄靄のかかったような空と、何か大きな棒のようなものを持った人影が映った。

人影がこちらに気づくと手を差し伸べてきた。

「……う、うん？」

「おお、やっと気づいたか」

やがて視界がハッキリすると、手を差し伸べてきたのが少女だとわかった。

たつぷりとした着物と、長身に映える鮮やかな紅い髪。

そして思わず目を見張るような自己主張の激しい北半球。

「……………」

あ、あと五年もすれば私だってあれくらい……

「いやいや。いきなり船の上に落っこちてきたから驚いたよ。……

って、おいアンタ大丈夫か？ ボケーツとしちまって」

「……あわ」

少女に手を振られやっ和我に帰ったヒカリは、すぐさま周囲を見回した。

向こうに見える岸には、誰が何のために作ったのかわからない小石の塔。

その先にはがらんと置いて何もない殺風景な光景が延々と広がっている。

しかも、今ヒカリは川面を往く船の上にいた。

何故自分がここにいいのか状況がさっぱりわからず、ヒカリは少女に訊ねた。

「あの、ここはどこですか……？」

「ん、ここかい？　ここは三途の川だよ」

「三途の川……？」

それって、たしか死んだ人が行く場所ではなかっただろうか。

ヒカリが頭に疑問符を浮かべていると、少女は怪訝そうな表情を浮かべた。

「……おかしいな。死人のはずのアンタがどうして言葉を話すんだ？　おかしいじゃないか」

「へ？　いやあの、そんなこと言われてもそもそも私は死んでないし……？」

「ああ？　こりゃあ妙なモン拾っちゃったのかねえ……」

少女は何か困った様子で頬をかきながら呟いた。

「ちよいと、失礼するよ」

「ふえ？」

少女がヒカリと視線を合わせ、その紅色の目に一瞬光が映る。

そのまま目を合わせているうち、少女の顔がみるみるうちに青ざめていった。

わなわなと体を震わせやがて後ずさるが、狭い船の上でそんなことをすれば当然終わりは近いわけで、

「お、おわあ!？」

「だ、大丈夫ですか!？」

少女が川に落ちそうになるのを、ヒカリが腕を掴んで引つ張り上げた。

そして少女が大きく息をついて頬杖つきながら言った。

「ふう。ありがとうよ。しかしこりや一体どういうことだい？ そんな寿命のヤツ初めて見て……っていうか、まだ寿命も終えてないのに何でここにいるのさ？」

「な、何でって言われても……」

ヒカリはとりあえず今までの経緯を覚えているかぎり思い出して話した。

願いを聞くための仕事をしているということ。

それで霧に包まれた世界の奥で西行寺幽々子という人物に出会い、それからその幽々子の友人という人物と成り行きで戦い、結果崖から転落して……

すると少女はお腹を抱えながら大笑いした。

「アッハハハ！ それで冥界から落ちたってか？ ずいぶんどじな話だねえ」

「へえ。あそこ冥界って言うんだ……」

「そ、そんなことも知らなかったのかい？ ってことはアンタこの辺の人間じゃないんだ」

「えと私は星の子で……」

「星の子お？ そんな妖怪初めて聞いたねえ」

「いやあの、妖怪じゃないんですけど……」

「あそうだ。まだ名乗ってなかったね。あたいは死神の小野塚小町。おのづかこまちこの川で死者の魂を運ぶ案内人をやってるのさ」

「わ、私はヒカリっていいいます。へえ、小町さんは死神で死者の魂を運ぶ案内人ですか」

・ ・ ・ ！？

死神。死者の魂の案内人。

その言葉を聞いた途端、ヒカリの顔面が一瞬で蒼白になった。

「し、死神い！？」

「そうだって言っただろ。そして、今まさにアンタを運んでる真っ最中ってわけさ」

「帰る！」

「は？ お、おい！？ バカよせてのに！」

脱兎の如く飛び出そうとしたヒカリの腕を小町が慌てて掴む。

ヒカリがじたばたと暴れるので船体がぐらつき傾く。

「あ、暴れるなって！？ ここは三途の川だ、泳いで行こうたってすぐに沈んじゃうし、対岸まで飛んで行くのなんてのも無理なんだぞ！？」

「いやいやいや！？ まだ死にたくないの〜！」

「だから、落ち着けてのに！ 船が、沈むだろうがッ！」

「それも嫌ああ！？」

小町が無理やり押し込みどうにか冷静さを取り戻すと、ヒカリは涙目になって小町を見上げた。

「……………」

「お願いだから無茶苦茶は言わないでくれよ？ あたいにいくら頼んだって地獄へ向かうことに変わりはないんだからな」

「そ、そんな……」

船の上では身動きもできず、ヒカリはがくんと頂垂れてそれきり何もしゃべらなくなってしまった。

「……まいったねえ」

死者の魂を運ぶのが仕事の小町だが、今回のように魂も実体もあるままで三途の川に落ちてきたのは初めての事例だった。

というか、ここには霊体や魂のみの存在しか入れないはずなのにどうしているのだろうか。

そして、もう一つ気になるのは今見た彼女の寿命。

「ありやどういうことだい……。どんなに力の強い妖怪でもよくて数千年、あるいは一万年とかってのもいるが……」

ヒカリの寿命は本当に桁が違った。

思わず我が目を疑ってひっくり返るほどに。

小町が今まで見てきた死者の寿命を全て足せばその桁にギリギリ届くかもしれない。

ヒカリの寿命はそれほどまでに、永かった。

「……………お叱り覚悟で映姫さまのところに報告に行くしかないか。ああ、ついてないねえ。せっかく真面目に仕事しようとすりゃあれかい」

船の操作をしながら振り向き、小町はヒカリに言った。

「おいヒカリとやら。ちょっと付き合ってもらっけどいいかい？」
「……………」

無言のヒカリに小町はやれやれと溜息した。

「おいおい。そんな世紀末迎えたような顔しなさんな。地獄つても案外悪いところじゃないんだよ？ 小うるさい上司さえいなければ静かで居心地のいい最高の……………」

「……………」

「…………聞いちゃいないね。ま、突然地獄行きなんて決まれば当然か」

精一杯冗句を交えながら努めていったのだが、ヒカリは何も答えなかった。

しかし、この先ヒカリがどなるのか小町にはわからない。

とりあえずやるべきことは、このまま上司のところへ向かって、それこそ白黒ハッキリさせてもらうのだ。

「それまで、のんびり往きますかねえ」

ゆらり、と川面を揺らしながら、小町の操る船は薄靄の向こうへと消えていった。

第二十三話 冥界から地獄（後書き）

パ「ずいぶんオリジナル設定が濃くなってきたわねえ」

夜「俺も書いてて思った……」

パ「そういえば、昨日のあとがきに出てた鈴村さんと真綾さんって誰よ？」

夜「ん？ 最近結婚した声優さんだよ」

パ「あなた声優好きなの？」

夜「下野紘を愛していますが何か？」

パ「俗に言う腐女子ってヤツね」

夜「失礼な。俺は腐ってねえ！」

パ「そこは女子を否定なさい！？」

評価ポイントがちょつと上がったた。

ありがとうございます。

最初に比べたらずいぶんと原作崩壊が目立ちますけど、これからも読んでくれたら嬉しいっす。

第二十四話 地獄の果てで

小町に案内されたどり着いたのは、地獄という物騒な場には不釣り合いな絢爛豪華な建物だった。

柱や壁、天上にまで意匠が施されており、まるで貴族が住んでいそうな宮殿のようにも見えた。

「ここが地獄……ホントに？」

「おいおい。何ボケツとしてんだ。こつちだよこつち」

「あ、はいはい……ッ」

呆けている間に、小町はどんどん奥へ奥へと進んでいく。

その途中、何度か小町と似たような格好の人を見つけた。

やはり彼らも死神なのだろうか。

それにしては……

「……死神って、けっこう普通だなあ」

見た目も特に変わったところはない。

みんな小町同様普通の人間のような姿をしているし普通に言葉も通じる。

（死神ってこう、カッコイイ着物姿で武器は刀でオサレな戦いをするイメージがあるんだけど……）

「あの、小町さん」

「んん？ なんだい？」

「小町さんに信条ってありますか？」

「信条だつて？ そんなもん考えたこともないよ。って、いきなり

どうしたんだい？」

「いえ、何でも……」

ヒカリの知っている死神ならここで、逃げも隠れもするが嘘はつかない、とか言ってくれるんだが。

どうもこの世界の死神というのは、ヒカリのイメージとはかけ離れているようだ。

……少し残念だった。

「ほい、到着つと。さてさて……こほん」

まっすぐ進んで突き当たった場所には他同様に装飾の施された一つの扉があった。

小町は何故か咳払いをしてからドアノブに手を伸ば、さないで軽く握りこぶしを作ってノックした。

「……同じ轍を踏むあたいたいじゃないよ」

「???」

「入りなさい」

やがて、ドア越しからでもよく聞こえる澄んだ声が聞こえてきた。小町が一言告げてから入ると、真正面に座する少女と目が合った。

「何用ですか小町。それに、彼女は？」

「あたいの仕事に冥界から降ってきたヒカリっていうヤツです。それで、ちよいと映姫さまに相談に来たというか、何といたしますか

……」

「……用件は手短に。貴女ほど私は暇じゃないんですから」

「ハッハハ。映姫さまったら冗談キツイですよ。あたいほど善良で

勤勉な死神は滅多にいないじゃないですか」

映姫と呼ばれている少女の眉が、小町の善良、それから勤勉という言葉の辺りでぴくりと反応する。

「先日の報告書、まだですか？　もう期限を一月はとうに過ぎていますよ」

「う……」

「それと、前回の魂を運ぶ際に一人三途の川に落としたのを忘れて戻ってきたそうじゃないですか」

「ぐう……」

「始末書。それから反省文を原稿用紙百枚と指示したはずですが、それを忘れながらも貴女は善良で勤勉な死神だと。そう言いたいのですね」

「そ、それはその……えっと……」

映姫の静かな殺気のせいかな、長身のはずの小町がどんどん小さくなって見える。

バン！　と机を叩く小気味いい音と小町の「きゃん！」という案外可愛い悲鳴が重なった。

「結局貴女はいつもいつも仕事をないがし蔑ろにして　　！」

「わー、わー！？　そ、そんなことよりコイツのことです、こいつの！？」

映姫はふうとため息つくと、頬杖付きながらヒカリの方に視線を動かした。

ダークグリーンのショートヘア。

何やら不思議な紋様の描かれた衣服に、変わった形の帽子。

手には、何に使うのかよくわからない棒のようなものを握っている。

「……して、ヒカリさん、でしたか。彼女がどうかしたのですか？」
「見ての通りですよ。冥界から直接落ちたからなのか、魂も実体もくっ付いたまんまなんですよ」

「魂も実体も……ふむ。これまたずいぶん特殊なお方ようですね」

「……？」

すると映姫は座していた椅子から下りてヒカリの元へと歩いてきた。そしてポケットから小さな札を取り出すと、それを直接手渡した。

「あの……これは？」

「本来、この地獄に来た魂は外界に出ることは禁じられています。いや、厳密に禁じてはいませんか」

「……??」

「こほん。今回は特例中の特例。貴女をここから出ることを許可します。これはその許可状です」

「はあ！？　じ、冗談ですよ映姫さま？　そんなこと前代未聞で……っ」

映姫の瞳が細まり小町を見据える。

「特例中の特例、と言ったでしょう。本来なら絶対に私が許可しません。それに、私の役目は死者を裁くこと。死んでもいない者を裁くことは出来ません」

「じゃあ、私……外に戻るんですね？」

ヒカリの言葉に映姫は口の端を少しだけ上げて頷いた。

「貴女にはまだ、やることがあるのでしょう？　それに、ずいぶん

と珍しい物をお持ちのようで」

「珍しい……？」

映姫はヒカリのポシエットを指差しながら言った。

この中に入ってるもので珍しい物なんてあっただろうか。

「死者の魂が跋扈するこの地獄には眩し過ぎる光。それは、人の願いの光でしょうか」

「輝望石のこと……？」

ポシエットから取り出すと、輝望石は淡いミルク色の小さな光を放っていた。

小町が身を乗り出して物珍しそうに輝望石を見つめる。

「ほえ……？　なんだいこりや？」

「えと、輝望石って言って、人の願いを集める性質をもつ石なんです」

「人の願いを集める……？　ってことはあれかい？　この石に願えば何か願いが叶うのかい？」

「え？　う、ううん……」

そういえば、輝望石に直接願われたらどうなるのだろうか。ちゃんと願い事として吸収するのだろうか。

「試してみてもいいかい？」

「へ？　あ、いいですけど……」

小町は輝望石をひったくりどつかとその場に腰掛ける。それから、あれこれ思索しながらぶつぶつと呟き始めた。

「ありがとよ。っへへ、さあて何を願おうか。有休千年とかどうだい？ もしくはあたいの船の新調なんてのも捨てがたいねえ。……そうだ。いっそ上司の性格を変えてもらおうか。口うるさい上司ってのはやっぱ苦手で……」

「それを、上司の前で言うとはいいい度胸してますね……」
「……あ」

映姫の背後に阿修羅神像が浮かび上がり、その素敵な笑顔からは想像もできないような殺気が溢れだす。

・

・

「度々すみません」

「いえ、あの……、小町さんは、大丈夫なんですか？」

部屋の隅で痙攣してる小町を指差しながらヒカリが訊ねる。
映姫は返り血を拭ってから首を振った。

「さ。ここに長居は無用でしょう。外へ戻る門へと案内させますので、そちらに向かってください」

「はい。あの、ありがとうございます」

「今回だけ、ですので。次また落ちてきたら容赦なく地獄へ落としますから」

「……き、気をつけます」

ヒカリは部屋を出ようとして、ふと足を止めて振り返る。

「あの、映姫さまは何かお願い事とかありますか？」
「願い事ですか。……そうですね、強いて言えば」

奥で痙攣してる小町を指差しながら、映姫は言った。

「彼女がもう少し真面目に働いてくれるようになること、ですかね」
「じゃあ、今度星に願ってください。私はその願い、きっと届けてあげますから。じゃあ！」

そう言い残して、ヒカリは映姫の部屋から飛び出して行った。

「星に願う、ですか。そんなロマンチックなこと、すっかり忘れていましたよ。今度機会があれば、外に出て流星でも探してみましようか」

それにしても。

映姫はヒカリの姿を、いや、魂を見ていてふとあるものと似ていると思った。

「……小町、貴女は彼女を見てどう思いましたか？」

「……………」

「気絶してるフリをしても無駄ですから。早く答えないと給料120%カットしますよ」

「そりゃあんまりだあ!？」

「……で、小町は何か気づきませんでしたか？」

「えっと……何が？」

どうやら何も気づいていないらしい。

まあ、これに関しては小町が知らないだけかもしれないが。

「……いえ。気づいていないのなら結構です。さ、貴女は早く始末書と反省文を書いてください」

「ひいゝ！」

映姫の遠い記憶の中でたった一度だけの出来事。

本当に一度だけ、映姫は天上人の魂というものを見たことがあった。それは一切の淀みない、まっさらで穢れというものを知らない魂。

ヒカリの魂は、まさにそれと似ていた。

純粹で透明な魂。

「……まあ、ただの勘違いかもしれませんが」

そもそも、今言った天上人が天界から地上、ましてや冥界や地獄に降りてくるわけがないのだ。

だからこの考えはくだらない妄想に過ぎない。

映姫は涙目の小町を横目にため息をつき、そして机に向かって止めていた事務処理を再開した。

第二十四話 地獄の果てで（後書き）

美「いつもあなたのお話だと、小町さんは四季さまではなく、映姫さまって言いますよね。何ですか？」

夜「いや、特に理由はないけど……特に固定ってわけでもないし、こっちにしてるだけ」

美「ふうん……」

パ「で、ヒカリの正体って何？」

夜「ここって言えるわけないだろ！？」

小ネタで文字数を稼ぎ始めた。

汚い、さすが夜斗は汚い。

コメント、感想、お待ちしております。

第二十五話 小さな一歩

「うう……、疲れたなあ……」

地獄から帰還したヒカリは、幽々子のお屋敷である白玉楼の一室でひっくり返っていた。

その後、何とか冥界に辿り着き、フランと合流してこの白玉楼で休んでいったらいいと幽々子から誘われヒカリはお言葉に甘えていた。ヒカリを誘拐犯と勘違いした妖夢は、それはもうひたすらに謝罪し続けて、終いには死んで詫びるだとか喚いてから幽々子に窘められどうにか落ち着いた。

「もう。妖夢は半人半霊なんだからもう半分死んでるじゃないの」

「ですから、もう半分死んでお詫びして　！」

「そ、そこまでしなくて結構です……」

地獄からの帰り道。それから妖夢の説得等、色々なことをいっぺんに体験したせいかヒカリはひどく疲れていた。

「ヒカリちゃん……大丈夫？」

「だ、大丈夫……」

フランが心配そうに覗きこんできたので、ヒカリは軽く笑って返事した。

疲れのせいで引きつった笑みしか返せなかったが。

「元気がない時は、ご飯を食べればいいのよ」

「あ、幽々子さん」

すると、部屋にニコニコ顔の幽々子がやってきた。

「迷惑かけちゃったし、お詫びと言っちゃあんだけどご飯ご馳走してあげるわ。それで許してちょうだいね？」

「いや、迷惑だなんてとんでもな……」

ふと、ヒカリは自分がいる場所を思い出し言葉を止める。

そして脳内で蘇るあの食堂で聞いた村人Aと村人Bの会話。

（きつと毎日が満漢全席なんだろうなあ……）

毎日が満漢全席。

毎日が満漢全席。

大事なので復唱する。

「ここは白玉楼っていうお屋敷。そして冥界のお姫様っていうのは恐らく幽々子さんのこと。そして食事……と来ればッ！」

「ひ、ヒカリちゃんがぶつぶつ独り言言ってる……」

「どうする？ ご飯食べて」

「もちろんですー!!」

・

・

そして食堂へと通されると、一人一つの食膳が用意されていた。

それは、いわゆる日本旅館とかでみるような光景だった。

この上に、今から見たこともないような豪華な食事が乗るのかと思

うと涎が止まらない。

「ヒカリちゃんの口から滝が！」

「ち、ちちち違っよフラン！ こ、ここに、これは汗だよ！？」

「無理しかないですよその言い逃れ……」

いつの間にか現れていた妖夢に横からツツコミを入れられた。

よく見ると、彼女の手の盆には溢れんばかりの料理が乗っていた。

「う、うわぁ……！」

それは巨大な魚とエビのような生き物のお造り。

次いで屋敷の侍女が大名行列のように幾度と現れ様々な料理を運んできた。

高級そうで巨大な何かの肉のステーキ。

あまりに美し過ぎて本当に食べ物なのか怪しいゼリーののようなもの。
例を上げるとキリがなくて、一言で言えばまさしく満漢全席。

……満漢全席って、何のことか知らないけど。

一通りの食事を運び終わると幽々子がパン、と手を合わせた。

「じゃあ、いただきますしうか」

「はい。じゃあ」

『いただきます！』

神速をも超える速度で箸に手を伸ばし、目の前にそびえるありとあらゆる食事に向かうヒカリ。

「うおおおおおおお！」

「は、速い！ ヒカリさんの腕に残像が……！？」

「ヒカリちゃんすごい！」

「……お食事くらい、静かにしましょうね」

とか何とか言いながらも、幽々子は十杯目の茶碗を侍女に渡していた。

・

・

食後のデザートの桃を突つついてみると、不意に幽々子はこんなことを言いだした。

「あ、そうそう。ヒカリちゃんって願いを集めてるって言ってたわよね？」

「はい。この近くで反応があったからここまで来たんです。もしかして、何か知ってるんですか？」

「言いそびれちゃってたんだけどそれ、もしかしたら私かなって思ってた」

「へ？」

「いくら妖夢に頼んでもダメだったから、さっきお星様にお祈りしてたの。天界の桃が食べたいなって」

「天界の桃？」

すると妖夢はハアとため息をついてから、少しめんどくさそうな顔をして言った。

「ですから幽々子様、それは天界にしか存在しないもので手に入らないと説明したじゃないですか」

「だって、食べたいんですもの。天界の桃よ？ きつとこんな小さ

な桃よりも甘美で、とっても美味しいんでしょうねえ……」

楊枝に差した桃をうつとりと見つめながら、幽々子はそつと口に運んだ。

……かれこれ六個目なのだが、いったいあの体の何処に入るのだろうか。

さつきからヒカリは気になってしょうがない。

「天界の桃……か」

「あら。もしかしてヒカリちゃん、私のお願い叶えてくれるのかしら？」

「え、いや、その……ううん。どうなんだろう。天界なんて何処にあるのかわからないし……」

「うふふ。別に本気にしなくてもいいのよ。これは私の我儘な願いですもの。誰かが叶えてくれなくてもいいのよ」

「でも……」

何だか申し訳ない気持ちになってヒカリはしゅんと俯いてしまった。私は、本当に願いを集めることしか出来ないのか。集めるだけ、なのか。

誰か一人ぐらい、その願いを叶えることは出来ないものだろうか。例えば、今日の前で笑ってくれている幽々子とか……

「……ヒカリちゃん？」

ヒカリはすつと立ち上がり、幽々子をまっすぐ見据えて言った。

「あの、天界の行き方とか、わかりますか？」

「ひ、ヒカリさん！？ まさかあなた行く気ですか？」

「本当にいいのよ？ 戯言だと思ってくれれば」

「これは私のお仕事ですから、私が決めます。天界の行き方、教えてくださいませんか？」

願いを集めるだけじゃ、ダメな気がした。

このまま願いを集めて、ただお母さんやお父さんに褒められるだけではいけない気がした。

願いを集める、その先を見たいと思った。

だから、自分で行動したい。

「……本当に行くの？」

「はい。突然だけど決めました」

「幽々子様……」

「……じゃあ、教えてあげるわ。天界は、文字通り天の世界。もちろん地べたを走り回ったって見つからないわ。だから、空を探すのよ」

「空……」

「この幻想郷で一番高いところを目指しなさい。そこに、天界へ続く門があるわ」

「幻想郷で一番高い場所……」

「ヒカリちゃん、妖怪の山だよ！」

フランの言葉で思い出すあの遙かにそびえる広大な山。

山の頂上へ行けば、天界へと続く門が見つかるかもしれない。

「そうか……うん！ あの、幽々子さん、ありがとうございます！

あなたの願い、私がきつと叶えてみせます！ 行こ、フラン！」

「うん！ それじゃお姉さん、オバケのお姉ちゃん、バイバイ！」

立ち上がり駆け出した二人は、あっという間に白玉楼の門をくぐって行ってしまった。

幽々子がひらひらと手を振りながら見送ると、堪えていた微笑を漏らした。

「ふふふ。まさか本当に行ってくれと思わなかったわ」

「いいのですか？ 例え天界に辿り着いたとしても手に入るわけが……」

残った桃の欠片を頬張りながら、桃色の唇がそつと開く。

「大丈夫よ。私に降りてきた流れ星ですもの。きっと叶えてくれるわ」

「流れ星……ですか？ 普通の女の子のようでしたけど……」

「ふふふ。たまには妖夢も、お星様に何かお願いしてみたら？」

主の言葉に、妖夢はただただ首を傾げるだけだった。

第二十五話 小さな一歩（後書き）

夜「幻想万華鏡を見て感動した……！」

美「でも声は入ってなかったですよ？」

夜「みゆきちの声など、脳内再生は容易いッ！ 他のキャストも夢想夏郷のキャストで脳内再生すれば問題なしッ！」

美「……私はそれ声当てられてなかったです」

幽々子さまと妖夢の声って、やるとしたら誰なんだろう……？

個人的に、幽々子さま 能登真美子さん

妖夢 渡辺久美子さん ……だとちょっと嬉しい。

でも、どっちもDDDディスクは別の声が当てられてるんだよねあ

……

第二十六話 天を目指して（前書き）

今回、やや短めですみませぬ；

第二十六話 天を目指して

「あら、おはようございます。ヒカリさ……ッ!？」

朝食用の皿を並べていた咲夜はヒカリの顔を見た瞬間、思わず抱えていた皿を落としそうになった。

「……お、おはよう、ございま……す」

目元には真っ黒なクマが出来ており髪はぼさぼさに乱れ、その声にも覇気がない。

三日三晩寝ずに過ごしたらこうなるのだろうか。

と、咲夜が思わず心配になるほどの凄まじい形相をしていた。

「あの、ヒカリさん……ですよね？」

「そ、そうです……」

「いったい何をしたらそうなるんですか……?」

「全然、寝れなくて……」

疲れ果てたまま紅魔館に帰ったのはいいが、あまりに冥界に長居し過ぎたため、ベッドについた時にはもう朝日が昇り始めていた。

結局、ヒカリは一睡もしてない。

「べ、別にきつちり起きなくてもいいんですよ？ 寝坊したって誰も咎めませんし……」

「そうしたいのは山々なんですけど、習慣のせいで体が、ほとんど勝手に起きちゃって……はわ……あう」

ヒカリが大欠伸をしていると、レミリアが寝間着姿のまま現れた。

そしてヒカリの姿を見つけると、とても不快そうに顔をしかめながらややきつめの口調で言った。

「ちょっと……朝からだらしい恰好でウロウロしないでちょうだいよ」

「す、すみませふわああ……あう」

「……そうだ咲夜、ヒカリにコーヒーでも淹れてあげなさいよ。砂糖抜きで」

「ですが、それだとヒカリさんは……。はい、わかりました」

そして淹れたてのコーヒーがヒカリの元へと運ばれると、ヒカリはいつも通り咲夜に礼を言ってからカップに口をつけた。口をつけた瞬間、ヒカリの顔が戦慄の色に変わった。

「……！！！？ ぶ、ぶわあッ！？ ゲホ、ゲッホゲッホ……！な、何これ苦あいッ！？ まっずッ？！ こ、こんにゃのあらひのコーヒーじゃ、うえ、けほッ、ごっほ……」

「普通コーヒーは苦いものよ。これで少しは目が覚めたかしら？」

絡みつくような苦みに悶絶するヒカリを見下しながら、レミリアは悪戯っぽく微笑むと自分のカップに口をつけた。

・

「ああ、もう……今朝は死にそうだったよ……」

「たかがコーヒーくらいで大袈裟ねえ」

未だに苦みでヒリヒリする舌を手であおぎながら、ヒカリはパチュ

リーの図書室で本を開いていた。
もちろん、幽々子から聞いた天界への門を調べるためだ。

「妖怪の山に天界に続く門があるだなんてねえ……。初めて聞いたわ」

「ここの図書室の本でも詳しい情報とかわからないのかな……」

読書用の眼鏡を外しながらパチユリーが言った。

「ううん。そういうのは妖怪の山の神社の方が詳しく知ってそうね」
「妖怪の山の神社……？」

前に一度妖怪の山に行ったが、そんなもの山頂にあっただろうか。
とはいえ、あの時は文たちとの戦闘に夢中でほとんど何も覚えていなかったが。

「山頂の方に守矢神社っていう神社があるのよ。そこには二柱の神とそれを祀る巫女がいてね。仲良く暮らしてるんだそうよ」

「二人の神に、巫女さん一人……」

「もしかしたら地元の彼らの方が詳しいんじゃないかしら。試しに訊いてみるのはどう？」

「ううん……でも、今の妖怪の山はもの凄く警備が厳重で猫の子一匹入るような隙はないですよ。真夜中じやもつと警備は厳重になるだろうし……」

「そつえばそんなこと新聞に書いてあったわね。あれ、あなたの仕業だったの」

「ふ、不可抗力というか、何というか……」

あの時は戦わざるを得なかった。
でないと、フランのことが幻想郷中に知れ渡ってしまつて大変なこ

とになっていたのだ。

「まあ、私はほとんどあの山に行くことなんてないからいいけど。でも、貴女なら別に何の問題もないでしょう？」

「え？」

「え？　じゃないわよ。その能力を使えば、誰の目にも止まらずに移動できるじゃない」

「そ、それはそうなんですけど……」

移動するのはヒカリだけではない。

必ずフランと一緒に行動しなければならないのだ。

……しかし単独で潜入するのなら、能力を使って逃げながら山頂を目指せば事足りるかもしれない。

「妖怪の山の山頂……か」

一人で、行ってみようか。

ヒカリは図書室を出て部屋に戻ると、簡単な身支度を整えて妖怪の山へと向かった。

第二十六話 天を目指して（後書き）

美「これが書き終わったら、次はどんなお話を書くんですか？」

夜「ん？ い、一応また東方のお話のつもりだけど……」

美「つ、ついに私がメインヒロインに！？」

夜「そんなコトは一言も言っていないが」

美「でも、主人公さんはもう決まってるみたいですね。ふむふむ……」

夜「だから勝手に見るなッての！」

一応、能力も決まってますしヒロインたちもちゃんと決まっています。

PS アニメ版のテガミバチを見たら一瞬でハマったッ！

キャストにみゆきちに藤村さん、潤ちゃんに岸尾だとおツ！？

何という俺得キャストなんだッ！

ずいぶん長いことジャンプ読んでないけど、まだ連載してるのかな？
俺が最後にジャンプ読んだのって、ワンピでエースが死んだところ
なんだよな……w

第二十七話 眠れる獅子……じゃなくて蛙

「……つと。さて、ここまで来れたけど」

紅魔館を出てまっすぐ北へ向かい、現在ヒカリは妖怪の山の木の上で身を潜めていた。

理由は単純。

目の前を黒い翼の天狗たちが数人の部隊を組んで巡回しているからだ。

「き、厳しいなあ……」

この場合は木々の間に隠れてやり過ごせたが、果たしてこのまま見つからずに進めるだろうか。

今日ヒカリが目指すのは妖怪の山、山頂。

そこにあるという守矢神社を訪ねるため、こうして厳重警戒の山へと向かったのだが……

「A班、異常無し」

「同じく、こちらG班、異常は無し」

「……見つかったら絶対死ぬよね、私」

ぶるつと身を震わせ唾を飲む。

この森林地帯に入る時も何度かやり過ごしたが、全身に走る緊張で嫌な汗ばかり額を滴る。

まあ、能力を使ってしまえば逃げるのは容易い。しかし……

「こう、緊張するとどうも足がすくんじゃうんだよな……はあ。…

…よし、今なら」

地面に降りて構え、思い切り蹴り上げる。

天狗たちの厳重な警備を掻い潜りながら、ヒカリは山の頂上を目指し斜面を駆け上って行った。

「ッ、と」

目の前に気配を感じ足を止める。

……巡回する天狗の小隊がまたしてもその往く手を阻む。

「本当に、こんな山の奥に神社なんてあるのかなあ。ちょっと心配になってきたぞ」

天狗が移動したのを見計らって再び蹴る。

それを幾度も幾度も繰り返しながら斜面を登って行くと、やがてヒカリの目の前に大きな石段が見え始めた。

入り口には灰色の鳥居、おそらくこの先がパチュリーが言っていた守矢神社なのだろう。

……それにしても、

「幻想郷の石段って、みんな長いよね……」

しかも目の前の石段は長過ぎて雲に隠れるほどだ。

こんな長過ぎる石段、一体誰が昇るというのだろうか。

いつそエスカレーターみたいに勝手に動いてくれればどれだけ楽か。

「……ま、動くわけないけどさ」

グツと足を屈伸させ思い切り蹴って飛び上がる。

石段がぐんぐん眼下に霞み消えていき、やがて石段の先にぼんやりと影が浮かび上がった。

「あれは……」

そこには、巨大な社がそびえたっていた。

博麗神社の倍ほどもありそうな境内に、手前と奥に大小二つの本殿が見える。

境内の入り口には同じく大きな鳥居がそびえており、そこからまっすぐ滑らかな一本道が伸びている。

ピン、と静かに張りつめたような空気が、ヒカ리를微かに緊張させる。

神社というものが、改めて神聖な場所なのだと思い知らされたような気持ちになった。

「博麗神社とは大違いだな……。ここに、巫女さんと神様が二人いるって言うってたよね」

鳥居をくぐり前へ前へと進んでいく。

本殿の正面に立つと、その見た目よりも大きく感じる社の様にヒカリは少し怯んでしまった。

流石は、二人の神を崇めている神社と言ったところか。

「う、ごめんください……」

ヒカリの声は張りつめた空気を虚しく震わせただけだった。

返事は……ない。留守なのだろうか。

「……うう、さっきから凄く緊張するなあ。ホント、博麗神社と大違いだ」

あっちはもつとこう、緩い空気だ。

誰でも気軽に入っていけそうな、隔たりとかが無いような気がする。だが、この守矢神社というのは少し、いやかなり違っていた。

「そ、そうだ。お賽銭入れなきや。神社に来たらお賽銭を入れるのが常識だもんね」

張りつめた緊張を振り払おうと、少し意気込みながらヒカリは賽銭箱を指し歩きだして、止めた。
理由は至極単純。

「お賽銭箱……どこ？」

目の前の本殿正面には何も置いていないし、近くにそれらしきものも見当たらない。

普通、目立つ場所にあるようなものだが……

ヒカリは境内を歩きながら賽銭箱を探すため歩きだした。
玉砂利を踏みしめる音が境内に響き渡る。

しばらく探したのだが、結局賽銭箱は見つからなかった。

「はあ。ちよつと休憩つと」

足を休ませるため、ヒカリは社の縁側で腰を落ち着かせた。

それほど長く歩いていたわけではないのだが、妖怪の山で能力を使ったり、石段を無視して飛んだせいか少しし疲れていた。

思わず欠伸が出てしまい涙が浮かぶ。

「……う……すう」

「……？ 何か、聞こえる？」

それは子供の寝息のようだった。

ヒカリが振り返ってみると、畳の上に猫みたいに丸くなった一人の少女がいた。

昼寝中らしく、気持ちのよさそうな寝息をたてている。

どうやら彼女の寝息のようだ。

ヒカリよりも小さなその少女は、少女の頭よりやや大きめな、目のついた不思議な帽子を被りながら眠っていた。

少女が瞳を閉じているのと同じく、何故か帽子まで瞳を閉じている。

「……もしかして、この子が巫女さんかな」

どんなに臙脣目に見ても、流石に彼女が神だとは到底思えなかった。神と言ったら、恐らくもつと威厳に満ち溢れたものだろう。

今の彼女には、威厳どころか何も感じない。

昼寝中の子猫のような無防備な横顔には、涎がべっとりついていた。

「こんな小さいのに巫女さんなんてやってるんだ。偉いなあ……」

何となく、ヒカリは悪戯したくなって彼女の傍に近づいた。

相変わらず可愛い寝息を立てている少女の頬を、人さし指で、

ぷにっ

「あ、あう……」

少女は小さく呻き、口元をぐによぐによさせながら反対方向に寝がえりをうった。

「ち、ちよつと可愛いかも……」

面白くなったヒカリは同じく反対方向に回り込んで指を少女の頬に、

ぷにっ

すると少女はまたしても反対方向に寝返りをうつ。

そして再びヒカリが回り込んで、

ぷにっ

またまた寝返りする少女。

三度回り込むヒカリが、

ぷにっ

……以下略。

「く、くふふ……ッ。この子、面白いなあ。どっかの巫女さんもこれぐらい可愛げがあればいいのにな〜へへへ」

ぷにっ

ぱち

「……………いッ？」

ヒカリの指を頬に当てたその瞬間、何故か帽子と目が合った。

ぎよろり、と丸い目玉に見据えられ、思わずヒカリは体を硬直させ身構える。

「な、ななな何だ何だ!？」

「……………私の昼寝中に、よくもまあ好き放題やってくれたね……………」

むくりと少女の体が起き上がると、畳の跡がついたままの顔でヒカリを睨みつけてきた。

「……………や、これは、その……………」

おかしい。

声は確かに見た目通りの子供のようなやんちゃで高めの声なのに、その小さな体からは今まで経験したことが無いような殺気をひしひしと感ずる。

少女は口の端をニッと不気味に吊り上げた。

「ふ、ふふふ……………土着神の頂点に立つこの私に悪戯だなんて、随分と勇気があるじゃない。……………いいわ。ちゃんとお返ししてあげる」

「こ、これはその、出来心というか何と云うか……………って、ヒイツ!？」

言いかけるヒカリの頬を何かが鋭くかすめ、赤い雫が零れる。いつの間にか少女の手には、丸い形をした刃を握りしめていた。

「ち……………チャクラム!？」

「覚悟はいいかしら。無礼な参拝者サン?」

少女は笑顔なのにその目には殺る気満々で、笑みなんてこれっぽっちも映っていないかった。

第二十七話 眠れる獅子……じゃなくて蛙（後書き）

夜「“萌え”が足りないッ！」

パ「ついに貴方もキチガイになったのね」

夜「よくもこんなキチガイレコードをつて違うわッ！　このお話に足りないモノは“萌え”だと気づいたんだッ！」

パ「……で？」

夜「つまり、次回作はもっとそういう要素を強めていくッ！」

パ「あざといわねえ……」

次の主人公は番台です。

……この字であってたっけ？

第二十八話 壮絶な神遊び

境内に激しい爆音と金属音が同時に鳴り響く。

突如勃発した弾幕ごっこにより、一変して守矢神社は戦場へと化した。

「ほらほらぁッ！」

少女の投げつけるチャクラムを回避しながら、ヒカリは半分泣きべそをかいていた。

「うう……。どうしてこうなるのさ。ちよつとした悪戯だったのに！」

「神様に悪戯するなんていい度胸してるよホント。そおらッ！」

「か、神様だなんて知らなかったんだよぉ！」

鋭く弧を描いて襲いかかるチャクラムと、広範囲に及ぶ光弾よる波状攻撃。

いくらヒカリが速く動けても、反撃に転じることが出来なければただ防戦一方なだけだ。

「だから、話を聞いてくださいよ！ 私は緋誓ヒカリって言って、天界に行ける門を探しにここまで」

「そっいえば私も名乗ってなかったね。私は洩矢諏訪子って言っんだ。さ、名乗り終えたことだし神遊びを続けようか！」

「だぁ〜もうッ！ 結局みんな聞いてくれないんだから〜！」

境内を走り回りながら、ヒカリは諏訪子と名乗った少女を横目で観察していた。

無尽蔵に放たれる光弾、チャクラムを巧みに操りヒカリの隙を突く鋭い一撃。

しかし、あの小さな体のどこにそんな力があるのだろうか。神通力というやつだろうか。

だとしたら、このまま逃げ続けていても埒が明かないかもしれない。

「せえ……んのッ！」

振り返って低く構え一気に加速。

諏訪子の目の前まで迫ると、その表情に微かな動揺が見られた。

「うわ！ な、いきなり突っ込んできた！？」

「こうなったら速攻かけて倒すッ。瞬符『光陰矢の如し』！」

至近距離で放たれる神速の矢は諏訪子の体を捉え、そのまま真っすぐ社の壁に叩きつけられる。

「くッ！ 速過ぎて、避けれなかった……？」

「このままッ、迅符『マツハ・ストレイト』！」

動きを封じた諏訪子に渾身の右ストレートを見舞う。

しかし、ヒカリが拳を突き出した瞬間、既に諏訪子の姿が消えていた。

そのまま壁を貫き派手な大穴を開けてしまった。

「……な」

「速いねえ。けど、ちょっと威力が弱過ぎるかな」

いつの間にか諏訪子は屋根の上に飛び移っており、不敵な笑顔を浮かべながらヒカリを見降ろしていた。

「今のが決まれば勝ちだったのに……！」

「そんな簡単に神様を倒せるとでも思ってたの？ ふふふ。見くびつてもらっちゃ困るなあ」

「やつぱ、神様は強いな……。さて、どうしようか」

「まだ勝てる気にいるみたいだね。じゃあ、ちよつとだけ本気を見せてあげようかな」

諏訪子の手に光る一枚の符。

それが術符と気づくのにはさほどの時間は有さなかった。

「鉄輪『ミシカルリング』」

諏訪子の両手に集まる光弾は、彼女の武器であるチャクラムのように丸い形を作り、その手の上でくるくうると回転し始める。そして諏訪子はそれをヒカリに目掛けて、投げた。

「ッ！」

地を這いながら襲いかかる輪の形をした光弾を、ヒカリはすんでのところで躲す。

光弾はそのまますすぐ走り抜け、神社の鳥居を跡形もなく破壊してしまった。

「あ……」

諏訪子は思わずやつちまった！ という表情を浮かべていたが、ヒカリはそのあまりの威力に蒼白した。

「……当たったら、本当に死んじゃうな」

「うわあ、どうしょ。神奈子や早苗に怒られちゃ……あうう」
「こ、こうなったら……」

ヒカリはそつとポシエットに手を伸ばし、長らく使わなかった一枚の白い術符を取り出した。

いや、使わなかった、という言い方は正しくないかもしれない。

この術符は、ヒカリが物心ついた時から持っていたものののだが、何故か未だに使いこなせずにいる一枚だ。

制御できない術符。

それはほとんど、暴走といってもいい。

でも、威力だけならどの術符よりも格段に上。

使うしか……

「ない……よね」

「まあた何かやろうとしてるな。その前に終わらせてやるんだから」

諏訪子がまた別の術符を握りしめながら猛進。

ヒカリはグツと力を込めて地面を蹴っ飛ばすと、斜め後方に飛び上がり白い術符を発動させる。

太陽にも似た閃光がヒカリを包みこむとその両手の先に一気に集束させる。

あまりの熱さに、ヒカリは顔を苦悶に歪めた。

「瞬光『せつなさみだれうち』」

そしてヒカリの両手から放たれる、暴風雨にも似た光弾の嵐。

今まで使っていた光弾の倍の威力の弾幕が一瞬のうちに諏訪子目がけて降り注ぐ。

「へへ。そんな速いだけの弾幕なら避け」

着弾した弾幕が起こした爆風に、諏訪子の姿と声が一瞬で消え失せる。

白煙と光弾は止むことなく諏訪子に襲いかかり、やがてそれは神社の境内全体に放射状に広がっていく。

「ッ、威力が強過ぎてコントロールできない……！」

両手の中で暴れまわる力を自身の精神力と気合だけでどうにか抑えてはいるが、どうしても上手く操れない。

ヒカリの弾幕は止まることを知らず、ただ無差別に広がり神社を破壊させていく。

やがて、ヒカリの手の平の力が消え弾幕が収まった。

ヒカリは境内に着地して、その惨状に頬をかきながらため息をついた。

「……………死刑、決定かな」

山積みになった瓦礫。

崩壊する境内。

そして目の前でひっくり返る諏訪子の姿。

どう見ても、ヒカリが守矢神社を襲撃したようにしか見えない。

ガサ……バキッ……

不意に瓦礫の山がもぞもぞと動き出したかと思うと、諏訪子の顔が飛び出した。

「ぶはぁ！ いやぁ、強いじゃないの君。私気に入っちゃったよ」

「ハハハ」

「ぐ、ぐ、ぐごめんなさい！ あ、えと、この術符は制御できなくて、だけど最終兵器というか何というか……」

狼狽えるヒカリに、何故か諏訪子は上機嫌な様子でうんうんと頷き、そのまま機嫌よくヒカリの肩をバツバツと叩いて笑った。

「ハハハ。いいのよ。これは“神遊び”なんだから。気軽なお遊びなの。だから君が気にすることはないぞ、ハツハツハ」

「そ、そうですか。は、ハハハ……、ッおう！？」

ぐい、と首を引つ張られ諏訪子に前屈みにさせられると、何故か諏訪子は神妙な面持ちでこそそこそつと耳打ちしてきた。

「その……これは“神遊び”。遊びだからね。遊びつてのは無邪気なものだよ。だから、その、神社の鳥居を壊したり、社が崩壊してるのも、事故ってことでいいよね……？」

「へ？ いや、だけどこれはほとんど私がやって………はうッ」

ぎゅうッ！

思い切り首を絞められ、そこから先の言葉が出ない。

「くれぐれも、他の二人が帰ってきて事情を聞かれても、答えないでね。絶対に。いいね？」

「ひゃ、ひゃい……。く、苦ひい……。でしゅよ」

パツと手を放され、ヒカリはどうにか息を落ち着かせる。

目の前を歩く諏訪子はとても楽しそうで、ニパツと笑いながら、

「いやあ、それにしても派手にやつちやったねえ。神奈子に知られたら大変だよ。留守を任されたつてのに神社がこの様じゃ顔向けが出来ないったらありやしない」

「そ、そうですね……………ッッ!!」

その瞬間、ヒカリの顔が凍りついたのを不審に思った諏訪子が首を傾げた。

「あれ？ どうしたのさ」

「……………（かくかく、ふるふる）」

小刻みに震えるヒカリを見て諏訪子はますます首を傾げる。その表情は、何かに怯えているような顔をしていた。

さながら彼女の目の前に、鬼神か悪魔でもいるかのような。

「そんな顔してどうしたのさ。ここにそんな凶暴な妖怪はいないよ？ いるとしたらおっかない蛇みたいなおばさんが……………」

「おっかない蛇みたいなおばさんか。それは是非ともお目にかかりたいものだなあ諏訪子」

「……………」

かくかくと、油の切れた機械のようなぎこちない動作で諏訪子が振り向く。

頭から角は生やしてはいなかったが、そこにはたしかに鬼がいた。

いや、彼女は神なのだから…………

「ぎ、ぎにゃあああああああ!？」

鬼神、が正しいか。

第二十八話 壮絶な神遊び（後書き）

パ「一つ、いいかしら」

夜「何？」

パ「彼女の『せつなさみだれうち』って、どう区切るの？」

美「『せつな・さみだれうち』？ それとも『せつなさ・みだれうち』？」

夜「ん？ それは……元ネタわかる人だけニヤニヤしてくださいな」

わかる人にはわかるネタです。

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

第二十九話 天界への階

「……諏訪子が迷惑かけたようですまない。怪我はないか？」

守矢神社に残った小さな社の中。

そうヒカリに優しく声をかけたのは、先刻諏訪子の背後に立っていた鬼神……ではなく、少女。

しかし少女は、胸に大きな鏡が輝いていたり、背には背丈と同じかそれ以上の大きさの注連縄を背負っているという、ひどく変わった格好をしていた。

微かに細める瞳と、凜と響くその声。

そして少女に漂う不思議な威圧感と存在感。

「えと……あ、あなたが、このもう一人の神様ですか？」

少女はこく、と頷いた。

「八坂神奈子^{やさかなこ}だ。好きに呼んでくれてかまわないよ。君も、少し緊張を解いてはどうかね」

「は、はい……」

神奈子に促され足を崩す。

すると、別室から白と青の巫女服姿の少女が戸口から顔を覗かせてきた。

「神奈子様、お茶のご用意が」

「ありがとう、早苗」

早苗と呼ばれた少女は、おずおずといった感じで部屋に入り、神奈

子とヒカリに給仕してから部屋を静かに退室していった。

神社という和風な場に似合わないガラスのコップには冷茶が注がれていて、白く透き通った氷がゆらゆらと揺れている。

「い、いただき、ます」

「そんな緊張しなくてもいいというのに。律儀な子だな」

神奈子はそう言って笑って見せたが、正直今のヒカリにそんな余裕はなかった。

成り行きとはいえ神社を半壊させ、あまつさえ奉る神と対峙し倒してしまったのだ。

流石にヒカリはそんな無神経な性格ではない。

震える手でコップを掴み、ちびちびと冷茶を飲む。

「さて……。ヒカリと言ったね。君は天界へ続く門を探している。そう言ったね」

神奈子の瞳にヒカリが映る。

口に残っていた冷茶を飲みこんでからヒカリは答えた。

「は、はい。妖怪の山の頂上に、天界へと続く門があると聞いてここまでやってきたんです」

「ふむ……。そういえば、神社の裏手の奥の方にそんなものがあったような気がするが……」

「ほ、ホントですか!？」

思わず身を乗り出したヒカリに、神奈子の瞳がスツと細まる。

「何用得天界に？ 其処は観光や何かで行くところじゃないぞ」

「願いを、叶えるためです」

「……………願い？」

瞳が再び細められる。

その瞳に映る色は奇異か好奇心なのか、それとも両方なのか。そんな神奈子の目をまっすぐ見据えながら、ヒカリは言った。

「私、幻想郷で願いを集めるお仕事をしてます。だけど、やっていくうちに、ただ願いを集めてるだけじゃいけない気がして……………」

神奈子の眉が微かに上がる。

「ただ願いを集めて、そのまま帰るだけじゃいけない気がしたんです。どうしてか、わからないけど……………。その、だから、自分で叶えられる願いなら、自分の手で叶えてあげたいと思って、それで……………」

その時、神奈子は驚き目を見開いた。

ヒカリの髪が、服が、身体が、うつすらと何かに呼応するかのよう
に黄金色に輝きだしたのだ。

夜空を瞬くような、神々しい小さな輝き。

神奈子はフツと笑みを浮かべて背もたれに背中を預けた。

「ふふ。不思議な参拝客だ。諏訪子が本気を出してしまったのも頷ける」

「ふえ？」

間拔けな声と共に全身を包んでいた儚い光が消える。
どうやら自覚もないようだ。

「わかった。天界の門への場所を教えてあげよう。地図を書いたらいいのかな？」

「い、いいんですか？　ありがとうございます！」

ヒカリは地に伏せて頭を垂れて謝辞を述べたが、神奈子には思いつきり笑われた。

「よしてくれ。私はそんな堅苦しい存在ではないんだから」

「で、でも神様ですよ？　神様って言ったらもつとこ……」

「もつと気軽に接してくれた方が私は楽だがね。親しみやすければ、信仰も得やすいだろう？」

「そんなもんなのかなあ……？」

「八百万も神はいるんだ。親しみやすい神だっているのさ」

「ふうん……」

神にも十人十色ということらしい。

妙な納得をしたヒカリは、ふと気になったことを神奈子に訊ねた。

「あの、諏訪子さまは？」

「社の修繕をさせているよ。何、君が負い目を感じることはないのだから気にするな」

「いや、でも……」

そんなことを言われても、神社を半壊させたのはほとんど私なのだが。

……少し、手伝ってから帰ろう。

・
・

「それで、天界への門の道はわかったわけね」

紅魔館、パチュリーの図書室。

守矢神社から帰ったヒカリは夕食後、パチュリーに事の顛末を報告していた。

「うん。だから、今日早速天界へ行ってみます」

「土産話、期待しているわ。私じゃ行けそうにないもの」

「そんなことないですよ。調子のいい時にまた行けばいいんです」

「ありがと。じゃ、今日も頑張って」

「はい」

自室に戻って支度。

ふと、フ란のことが頭を過ぎった。

「……天界に連れて行って大丈夫なのかな」

天界とは、天人と呼ばれる者が住むとされる桃源郷。

あらゆる修行や苦行を乗り越えた者だけが相応しい神聖な世界。

人々は毎日平穩に暮らし、日夜酒を飲み交わしたり、歌って踊ったりしているんだとか。

当然危険のない、絶対の安全が約束されている場所。

……そんな中に、フ란を連れて行って大丈夫なのだろうか。

また何か騒動が起きてしまったら、今度こそお終いだ。

「ヒカリちゃん！」

「うおお!？」

背中からフ란に抱きつかれ、前のめりにつんのめる。

フランはヒカリの横っ腹に頬をすりすり寄せながら上目づかいに見上げてきた。

「今日は何処行くの？」

「んと、今日は天界に……」

「天界？ それって何処？」

「前に幽々子さんと話をしてたでしょ。空の上にある世界だって」
「お空の上……」

フランの顔が好奇心に輝き、その瞳がいつにも増して煌めいていた。

「行く！ 私も絶対行く！」

「う、ううん……。だけど、今回はどうし……」

「行くの！ 絶対絶対行くんだから！」

「わ、わかったわかった」

まあ、問題さえ起こさなければ大丈夫だろう。

抱きつくフランの頭を撫でながら、ヒカリは軽いため息をついた。

・
・

守矢神社裏手、妖怪の山の奥に出来た小さな盆地。

そこに、冥界へ入る時に見た門とそっくりの巨大な門があった。
冥界の門と違って、こちらには温かな光が差し込んでいる。

その先に、白い階段のようなものが高く高く伸びていた。

「……じゃあ、行こうか。フラン」

「うん！ 空の上ってどんな風になってるだろ？ 楽しみッ」

「うん、そうだね。……あれ」

ポシェットの奥の輝望石が反応している。

何故か輝望石は、天界の門の奥を示していた。

「天界の人？ ……何を願っているんだろう？」

「ヒカリちゃん、早く行こッ」

「わ、わかった」

フ란の引つ張られながら、ヒカリは先の見えない階段を上り始めた。

第二十九話 天界への階（後書き）

特に今日は無し。

次回もお楽しみに。

第三十話 雲の中の雷

長い、長い階段だった。

大理石のように硬く滑らかな、しかしそれでいて踏みしめると跳ね返るふわりとした何とも不思議な感触の階段。

「……何だか、おかしい感じがした」

階段の下はもちろん妖怪の山。

高度は……高過ぎて考えたくもないが、あれだけ大きくそびえていた妖怪の山が豆粒のようだから高さは相当なはず。

「たっかいねヒカリちゃん！ 落ちたらどうなっちゃうのかな？」

無邪気なフランの笑い声。

しかし、そんな高い場所にいるというのに恐怖を全く感じないのは何故なのだろうか。

いくら星の子と言えどこの高さを生身で落ちれば即死だろうに。

「それにしても、なっがい階段だなあ……。どれくらい上ったんだろう」

行けども行けども終わりの見えないその階段。

最初の内はそれでも楽しかったのだが、こつと長いと流石に飽きる。延々と同じ色の階段を上るだけ。

景色も、あまりに高過ぎて変わっているんだか変わっていないんだかよくわからない。

上りつかれたヒカリは、フランの手を離してぺたりと階段に腰掛けた。

「はあう……。ちよつと休憩」

「うん。わかったよ」

フランもヒカリの傍にちゃんと腰をかける。

くつついたフランの体温が、ほんのりと伝わってきてちよつと心地よい。

「この階段長過ぎ……。どこまで続いて」

ぐぐぐぎゅう……

ヒカリのお腹が小さな音を立てた。

突然の腹の虫に驚き、フランはケラケラと笑いだしヒカリは赤面しながら乾いた笑いを浮かべた。

「は、ハハハ……。なんか、お腹空いちやったな」

「じゃあじゃあ、フランがいいものあげる」

「いいもの……?」

そう言つてフランは自分のポケットに手をつ突っ込んで、小さな包み紙を取り出す。

中にはビスケットがちょうど三枚入っていた。

「今日のおやつを、ちよつとだけ持ってきたの。はい、ヒカリちゃん」

「え、いいの?」

「いいよ!」

「……えへへ。ありがとう」

ずい、と差し出されたビスケットを受け取り一口かじる。

サクッと軽い食感と、甘いバターの香りが口いっぱいに広がっている。

フランのくれたビスケットは、ヒカリの空腹をほんの少しだが優しく満たしてくれた。

フランも何処となく嬉しそうな顔をしていた。

「じゃあ、私も何かお返ししないかね。ううん、何かあったかな……」

ポシェットの奥をぐそぐそ探っていると指先に何かがコツンと当たった。

取り出してみるとそれは小さな小瓶で中には乾燥した果物のようなものが入っていた。

「……気の利かないポシェットだなあ」

「何これ？ 赤い……しなびたイチゴ？」

「か、乾燥してるだけ。ドライフルーツって言えば多少聞こえはいんだけど……」

栓を抜いて中から取り出す。

……正直ヒカリはこれが苦手だ。

幻想郷へ出かけるときに入れた覚えはないし、恐らく母親の仕業だろう。

「日持ちは半永久的……。日持ちは、だけど」

「食べれるの？」

「一応……」

「じゃあいただきます！」

「わ、ちよっと待ったフラ」

乾燥したイチゴ(?)を口に放り込んで数秒後、フ란の瞳に涙が滲み始めると口元がきゅっと結ばれた。

「し、しゅっぱッ!」

「うん……。何でか知らないけど、コレ滅茶苦茶酸っぱいんだよねえ……」

「お、お水とかない?」

「あ、それぐらいなら……」

ヒカリが水筒を差し出すと一気に飲み干してしまった。

「ご、ごめんね。大したものが無くて」

「いいよ! えと、うん。美味しかった!」

「無理しなくてもいいのに……」

ぐ、くうう……

今度はフ란の方から聞こえた。

フ란は恥ずかしそうに頬を赤らめながらヒカリの方を見て言った。

「……あはは。食べたらず計にお腹空いちゃった……かも」

「ならフ란、ここにビスケットあるから食べなよ」

「うん。……あ」

フ란がもう一枚ビスケットを食べようと手を伸ばし、止めた。
残るビスケットは一枚。

フ란はヒカリの顔をうかがうように小さく上目づかいに見上げてきて、

「さ、最後の一個どうする？」

「ん。私はもういいから、フランが食べなよ」

そう笑って答えた。

しかし、何故かフランは不満そうな顔をしてビスケットとヒカリを交互に見比べた。

「……うん」

すると、フランはビスケットをちょうど半分になるよう真ん中でパキッと割ってしまった。

そして割れた破片をよく見比べ、大きい方をヒカリに差し出す。

「はい、半分こ！」

「いや、でも私はもういいから」

「半分こ！」

「……うん、じゃあ貰うね」

半分に割れたビスケットしばらく見つめてから、ヒカリはフランと一緒にビスケットを頬張った。

ビスケットを食べ終え元気も回復し二人は再び歩き出す。

相変わらず景色はほとんど一緒だったが、少しずつだが変化も見え始めた。

「風が……出てきたね」

階段の周囲から吹き付ける強い風。

風はやがて雲をかき集め、ヒカリたちの視界を奪う。

集まった雲はやがてごろごろと不穏な音を立て黒く染まっていく。

二人は足を止めて背中合わせに身構えた。

「……誰か、いるよね」
「……………」

微かに感じる水の匂い、そして誰かに見られているような視線。雲に隠れてよくは分らないが、この奥に何かが存在しているのは確かだった。

いつの間にかフランはレーヴァティンを握っていて、ヒカリもそれに合わせてブリーナクを取り出した。

「総領娘様に言われて様子を見に来たら、こういうことでしたか」

雲の向こうから、鈴の音のような綺麗な声が響く。

そして雷鳴が轟き暗雲が引き裂かれると、そこに一人の少女が空中を浮遊していた。

天女のような羽衣に身を包んだ少女が、ヒカリとフランを見据える。

「では、少しお相手願えますか？ こちらもそう命じられているもので」

「命じられてるって……？ あなた、何者なの！」

「これは失礼しました。永江衣玖ながえいくと申します。此度は、総領娘様からの命により馳せ参じたという次第です」

「総領娘……？」

「お前、邪魔！ どっか行っちゃえ！」

フランが敵意を剥き出しにして衣玖と名乗った少女に吠える。すると衣玖は、困ったような表情を浮かべて頬に手を当てた。

「すみません。総領娘様の命なので私も簡単には引き下がれないんです。では、お相手願いましょうか」

衣玖の手に小さな雷球が集うと、周りの雲も呼応して雷鳴を起こす。次の瞬間、ヒカリたちのいた場所に蒼白い雷が降り注ぐ。

「……ふむ。避けられましたか」

が、ヒカリとフランは瞬時に左右に展開し雷撃を回避していた。

「もしかして、侵入者を排除する門番かなあの人」

「……許さない」

「フラン……ッ！」

フランの全身に漂う、鮮血のように紅いオーラ。

その姿を見た瞬間、ヒカリの背筋にゾツと悪寒が走った。

「ふ、フラン……ッ！」

その眼は紅く光り、その貌には激昂に歪んでいた。

レーヴァティンを握る手が、カチカチと音を立てながら震えている。次の瞬間、フランの姿が消えた。

それは刹那を往くヒカリの動体視力でさえ追いつけない、想像を絶するような速度。

「あああああああッ！！」

「ッ！！」

衣玖の真横をかすめる紅の一撃。

間一髪身をよじって躲したものの、衣玖の表情は戦慄に凍りついていた。

「い、今のは何！？ 速過ぎて、何も判らなかつた！？」

「私より速かつた……！？ だ、ダメだよフラン！？」

「……ッ！！」

衣玖の背後を舞う深紅の姿。

レーヴァテインをまつすぐ振り上げ、フランが雄叫びをあげながら猪突猛進に襲いかかる。

衣玖はすんでのところまで羽衣を高速回転させレーヴァテインを弾く。ガシンン！ と金属と金属とが激しくぶつかり合うような音がして、衣玖とフランは互いに反対方向に吹き飛ばされた。

「このままじゃあの人……、フランッ！ フラ……ッ！」

ヒカリの声が届かないのか、フランは全く反応を見せず衣玖の上空から見下ろしている。

陰になって見えないフランの顔が、ニィッと愉しそうに歪んだ。

「禁忌『フォーオブカインド』」

フランの術符が発動し、その効果で四人に分身すると一斉にレーヴァテインを振り下ろす。

激しい剣圧と光弾が、衣玖目がけてまつすぐ注ぐ。

「……ッ！？」

光弾が爆ぜ周囲を白煙が包む。

衣玖の姿は、跡形もなく消え失せていた。

「……クスッ、クスクス………」

「フラン！ 私の声、聞こえてないの！？」

怪我をした衣玖を抱えたまま、ヒカリが叫ぶ。

フランの弾幕が襲いかかるその刹那、ヒカリは能力を使って強引に衣玖を捕まえ離脱していた。

衣玖は光速移動とフランの攻撃のせいで気を失っていた。

階段の端に衣玖を静かに横たわせると、ヒカリはフランの正面に飛んだ。

「フラン！ やり過ぎだよ！ 一歩間違えてたら、あの人死んでた

！」

「……………」

紅い双眸が、ちらとヒカリを映す。

白金の髪、純白のローブに小さなポシェット。

狂気に駆られたフランの脳裏に過ぎる、大切な何か。

何か。

……………何か？

……………それは、何だ？

「……………」

虚ろな紅い眼が揺らぐ。

震える。

手にしていたレーヴァテインが消え、フランの瞳にいつもの、無垢な光が戻る。

そして、閉じた。

「あ……………」

「フラン！」

そのまま真つ逆さまに落ちるフランに手を伸ばし、抱き寄せる。
フランはヒカリの腕の中で、気を失っていた。

「何、何なの？ フラン、どうしちゃって……」

「なかなか凄いお客さんじゃない。ビックリしたわ」

「ッ！？ だ、誰！」

ヒカリが振り返ると、そこには倒れていたはずの衣玖と、その横で
仁王立ちする少女の姿があった。

長い蒼の髪が、風に乗ってふわりと揺れる。

上品なその出で立ち、恐らく彼女が衣玖の言っていた総領娘に違
ない。

「いい暇潰しが出来そうで嬉しいわ。さ、そんなところでボサツとし
てないでこっちに来なさいよ。手当ぐらいしてあげるからさ」

「ひ、暇潰しってあなた誰！」

「ひなないてんし比那名居天子。そんなこといいからさっさと来なさいよ。この私
が手当てしてあげるって言ってんだから」

「手当も何も、ここはただの階段で」

「まだ気づかないの？」

「え……？」

天子はやれやれと言った具合でため息をつくと、雲の向こうにツカ
ツカと進んでいってしまった。

強い風が雲を吹き飛ばし、天子の進んだ先には大きな門扉がそびえ
ていた。

「歓迎するつもりはないけど、ようこそ天界へ。わかったらさっさ

と歩きなさいよ」

音も立てずに大きな門が開く。

その先には、ヒカリも見ることが無いような雅で煌びやかな建物が所狭しと立ち並んでいた。

第三十話 雲の中の雷（後書き）

パ「……何か言うことは？」

夜「どうしてこうなった」

弾幕ごっこが本格化したら、こんな感じになるということで、

ひでえなこりや……

原作壊してるとか嫌疑をかけられても文句は言えん。

だから閲覧者数にムラがあるのだろうか？

ううむ……

P S

三ツ矢サイダー塩、すごく微妙ですよねえ……？

そんな俺が最近飲みまくってるのはセブンアップクリアドライ（だっけ？）

ほぼ毎日一本飲んでる気がする……w

シユタゲの影響もあってか、ドクペもよく飲みますよんb

第三十一話 微かな面影

窓の外に広がる、絢爛豪華な世界。

煌びやかな装飾の施された建物は、太陽の光りを浴びてその輝きをいつそう強く増していた。

ヒカリが今いるのは、天子に案内され連れて来られたとある一室。内装も外同様に豪奢で、思わず目がくらむほどに金や銀といった色で包まれていた。

窓から視線を反らし後ろを振り向く。

部屋の中央、天蓋が備え付けられたベッドの上でフランは静かに眠っていた。

「……………」

そっと、白い頬を撫ぜる。

手に伝わる生気を失ったような冷たさ。

ヒカリの視界が、滲んでぼやける。

「死んで、ないよね？ 吸血鬼だもの、死ぬわけないよね？」

「大丈夫ですよ。気を失っているだけですから」

「……あ、うわ！」

部屋の戸口に、いつの間にか衣玖が立っていてヒカリの方を見ていた。

涙ぐんでいたのが恥ずかしくて顔をそむける。

顔を拭ってから振り向くと、優しく微笑む衣玖の笑顔が見えた。

「彼女のことは私にお任せください。総領様からもそう託っていますし」

「いや、でも……」

「ご心配なく。別に取って喰ったりはしませんから。……まあ、その実ほとんど手当も必要ないでしょうけど」

「……………」

「そうだ、ヒカリさんはしばらく外を散策してみてはどうですか？
多少の気分転換にはなるかと」

「……はい。じゃあ、少しだけ」

ここにいっても邪魔になるだけだろう。

ヒカリは最低限の荷物だけ持って部屋を出ようとした。

「……………」

ふと、衣玖の姿を見てヒカリは首を傾げた。

「あの、衣玖さん、さっきの攻撃で服が……………」

「ふふ。こちらの天衣は特別製で、多少の傷なら直っちゃうんですよ」

「へえ……………すごいなあ」

「出口は突き当たりを左です。何かあればこちらからご連絡いたしますので」

「わかりました」

そういえば、私の服もそうだったっけ。

天界の技術は凄いのかもしれない。

・

・

しばらく歩いて見つけたのは、妙なセンスの造形物付きの大きな噴水広場だった。

ベンチで語らう男女や、遊び回る子供たちの姿。

それは地上で見る光景とほとんど同じで、強いて言うならその姿は一般の市民とは比べ物にならないほどに優雅な格好だった。

衣玖の着ていたような羽衣姿のものもあれば、黄金の衣に身を包んだもの、ほとんどの人がやたら派手で豪華な衣装を着ていた。

一切の苦しみを乗り越えると、このような豪華な衣装を身にしたいくなるのだろうか。

ヒカリは少し疑問に思った。

噴水の縁に腰をかけてぼんやり空を見上げる。

雲の上の世界なので雲一つないのは当たり前で、空は通常より青みの強い青空が広がっている。

「……ってことは、ここはソラに近いってことか」

伸ばせば届きそうなヒカリのいた世界。

星と闇の世界が、とても懐かしく思えた。

……ホームシックだろうか。

もうすぐ帰るのだから、これぐらい我慢しないと。

「……あ、いたいた」

ヒカリがボーっとしていると、前の通りから天子が長いドレスを揺らしながら早足で近づいてきた。

「あれ、天子さん」

「さん付けじゃ足りないわ。様を付けなさい、さ・ま・を」

「え、ええ……？」

「冗談よ。そんなことより、ちょっと付き合ってくれない？ せつ

かく叶った暇潰しなんだからさ」

「叶った？ 暇潰しって……。わ、ちょっと!？」

天子の手が強引にヒカリの腕を掴む。

抵抗しようとしたが、恐ろしいまでの力で全く抗えなかった。

「弾幕ごっこやるならここじゃ狭いでしょ。向こうの方にちょうどいい空き地があるから、そっちでやるわよ」

「だ、弾幕ごっこって、まだやるなんて一言もわああッ!？」

周囲の人に奇異の目で見られながら、ヒカリは天子に引きずられ噴水広場を後にした。

・

・

そしてたどり着いた地平線が見えるほど広大な空き地。

空き地と言つには、流石に広過ぎやしないだろうか……？

「あの……。私、今そんな気分じゃないんですけど」

「あなたの気分なんて知ったこっちゃないわ。いいから私に付き合おう。手加減とかそういうのは考えなくていいから。わかった？」

「しょうがないな……」

ポシエットから術符を取り出し三枚だけ握りしめる。

そして前を見据えると、天子はいつの間にか大剣を構えていた。

「…………ツ？」

突如目の前から感じる謎の威圧感に思わず体がすくむ。
全身に重く響くこの感覚は何だ。
出処は……

「緋想の剣。細かい説明してもあんたじゃわからないだろうから省略するわ」

「む……。心無しバカにされたような気がする」

瞬間、切っ先から白い閃光が走りヒカリに猛進。

身をよじって回避、後に能力をいつでも発動できるよう低く構える。

「じゃ、これはどう!?!」

天子が切っ先を地面に突き立てると激しい震動と共に地面が隆起し、そのままヒカリ目がけて襲いかかる。

これぐらいなら、能力を使わなくても大丈夫そう。

低く構えていたのを止め、そのまま右手にステップして攻撃を回避。隆起した地面は激しい力で抉られたかのように、空き地に大きな溝を残した。

「これぐらいの攻撃なら、全然何ともないですよ!」

「……いいわ。次はこれを使いましょうか」

サツと左手を地面にかざすと、地面から注連縄に包まれた大きな石が現れる。

さほど脅威には見えなかったが、ヒカリは一応低く身構えておく。

「要石『カナメファンネル』」

すると石が轟と唸りを上げながら突進。

しかし前と同様それほど速い攻撃ではない。

落ち着いて回避し攻撃に転じようとした瞬間、背後に力の流れを感じヒカリは飛び退く。

案の定、ヒカリのいた場所に光弾が撃ち込まれ激しく地面を抉られた。

「もしかしてこの人……」

大して強くないんじゃないか？

天使は腕組みしたままこちらを見つめているだけで、それ以上何もしてこない。

様子を見ているのか、それとも……

「……よし、こつちも攻撃しよう」

構えて地面を蹴る。

神速を越える速度で天子の正面を捉え、握りしめていた術符を一枚起動させる。

「瞬符『光陰矢の如し』」

零距离で放たれる光の矢が天子の腕を捉える。

そしてもう一度別の術符を発動すればヒカリの勝ち。そう確信していたが、

キンッ！

突如響いた、甲高い謎の音。

それが天子の肌に当たった矢の音だと気づくのに数秒かった。

「……え？」

「ん？ 何かしたのかしら？」

天子の腕には傷一つ無かった。

目の前で起こった出来事が信じられなくて、ヒカリはその場で呆然と立ち尽くしていた。

「そ、そんな……！？」

「ところで、相手の獲物が剣だというのに、この近距離で棒立ちしてていいの？」

「ッー！」

ヒカリが気づいた時既に遅く、腹に緋想の剣の腹が押し当てられていた。

派手に吹き飛ばされ肺から息を吐き出す。

そのままヒカリは立ち上がることが出来ず倒れてしまった。

「なっさけないわね。せっかくいい暇潰しできるのかと思ったのに」

「ゲホ……ッ。うう、弾幕で負けるならまだしも物理で負けるとちよっと凹むなあ……」

「……………」

ヒカリの傍による天子が、何故かじいっとヒカリの顔を見つめていた。

しげしげと、まるで観察しているようだった。

「……あ、あの？」

「一応訊くけど、私たち初対面よね？」

「へ？」

ソラにいたヒカリが、天界の住人と面識などあるわけがない。

ヒカリは当然首を横に振る。

しかし天子は、何か心当たりでもあるのか微かに首を傾げ思案していた。

「……………もしかして、あなた」

「は、はい……………」

半信半疑、といった感じで天子が言った。

「……………あなた、天人だったりしない？」

第三十一話 微かな面影（後書き）

パ「もしも、あなたが何か“能力”を得るとしたら、どんな能力になるのかしらね？」

夜「さあ……？ 想像もつかないや」

美「じゃ、何か能力が手に入るのなら、どんな能力がいいんですか？」

夜「うん……。桜と同じ香りを操る能力がいいかな」

パ「あら。文才の能力にはしないの？」

夜「それは、出来たら自分で掴みたいかな……」

もしも自分に「する能力があつたら……」

東方ファンなら誰しも考えませんか？

何故か、感想が一件減ってる……

間違えて消しちゃったのかな……；

ともあれ、読んでくださる方々、いつもありがとうございます。

第三十二話 両親の正体

「私は天人なんかじゃないですよ。私は星の子ですって」
「しかし総領嬢様、何を根拠にヒカリさんを天人だと？」

天子は指で頭を突いて何か思い出すようにしながら答えた。

「なんか見覚えのある顔なのよねえコイツ。ずいぶん昔に見たような覚えが……」

「ずいぶん昔って、私まだそんなに長生きしてませんよ？」

「見た目だけなら天子様より少し幼いと見受けしますが……」

「ちよつと待ちなさいよ。今思い出すから。ううん……」

ヒカリの姿をチラチラ見ながら天子が唸る。

もちろんのことながらヒカリは天子と面識があるわけがない。

もともとヒカリはこの幻想郷の外にいたのだから面識が無くて当然だ。

それなのに見覚えがあるとはどういう意味なのだろうか。

「……衣玖、ちよつといい？」

「何でしょうか」

「歴史の本、用意できない？」

「歴史……ですか？」

衣玖の眉根が微かに揺れる。

しかしすぐにわかりましたと頷き部屋を出ていくと、やがて古びた書物を持って戻ってきた。

「これでよろしいでしょうか？」

「載つてるといいんだけど……」

幾らかページを捲っていると、不意に天子の手が止まる。そこには新聞記事の切り取りのようなものが記されていた。

「これは？」

「ずっと前に、天人だというのに不可思議な発明ばかりを繰り返す、いわば変人がいたのよ」

記事には『天人らしからぬ奇行』と見出しが出ている。

本文に目を通すと、そこにはこんなことが記されていた。

修行や苦難を乗り越え、自ずと無欲となる天人の中に、二人だけ可笑しな言動や行動を繰り返す変わり者の天人がいた。

そもそも、天界にいる時点でその身に欲がある時点でおかしいのだが、彼らは常日頃から『ソラへ飛びたい』と天界よりもずっと上空、星が瞬く虚空を指差して話をしていたそうだ。

彼らは日夜怪しげな機械をどこからか持ち込み、人知れず何やら実験を繰り返していた。

当時天界を治めていた帝はこの奇怪な二人を危険視し、やがて彼らを彼らが望んでいた天界の果てへと追放した……

「普通天人となった者は欲を捨てここで毎日飲んだり踊ったりすんのよ。それなのに、この二人は訳の分からないことを言いながら怪しげな研究に没頭してたんだそうよ」

「それはわかりましたが、これとヒカリさんに何の関係が？」

「たしかに、私はこの人たちの言ってるソラってところから来た人だけど……」

「次のページを見て御覧なさい」

言われるがまま本のページを一枚めくる。

そこにはその記事で説明されていたとされる例の二人組の肖像画が映っていた。

一人は男性、もう一人は女性。

男性の方は特にこれといった特徴はなく、強いて言えば他の天人と同様に豪華な衣に身を包んでいる。

そして、女性の方は……

「これよこれ。ヒカリってさ、この天人にそっくりだと思わない？」

肖像画に映っていた女性は、ヒカリと同じ白金色の長い髪を揺らし、立っていた。

顔立ちはどこか柔和な顔立ちで、優しそうな人だった。

「そう……ですねえ」

衣玖がヒカリと肖像画の女性とを見比べる。

ヒカリはまだ子供なのでハッキリと似ていると断言はできないが、鼻筋のラインが何処となく似ているような気がしなくもない。

今のヒカリと共通しているのは髪の色と、それから瞳の色だけだ。

「ううん……。何とも言えませんね。ヒカリさんはどうですか？」

こちらの方々、ご両親とそっくりですか？」

「……そ、そっくりも何も」

ヒカリの手が震え肖像画を指でなぞる。

忘れもしない、自分の一番大事な二人の顔。

「私のお父さんとお母さん……。で、でも何で？ 私のお父さんとお母さんは……」

「ふうん。つまり、あんたはこの二人の娘ってわけか。じゃあ、星の子ってのは何なのかしら？」

わからない。

今ので、何もかもが分からなくなった。

私は星の子でも何でもなくて、ただの天人の娘？

元は幻想郷の人間だった？

じゃあ、今まで見てきたものは何？

星の子って何？

自分の中で確かだったものが、一瞬で崩れる音が内から響いてくる。

「ヒカリさん……？」

「……………ッ」

「あ、ちよつと！？」

ヒカリはバツと駆け出し部屋を飛び出す。

「あ、ヒカリちゃ、わッ！」

誰かにぶつかっても振り向かず、ひらすら走る。

衣玖と天子が部屋を出たころには、ヒカリの姿は忽然と消えていた。

「ったく、急に走り出すなんて何考えてるのよ！」

「彼女、何処へ行ったのでしょうか……？ あら、貴女は目が覚めたようですね」

フランの姿を見つけた衣玖が胸をなで下ろす。

フランは、しばし果然とヒカリの走り去っていった方向を見つめて、

「……………お前、ヒカリちゃんに何をした」

怒りと殺気を込めた眼差しを天子に向けた。

「ち、違っわよ！ 私たちのせいじゃないわよ。アイツが勝手に……
……って、ちよっと！？ 何物騒なモン出してぎゃあああああああ
……!?」

徹底的にレーヴァテインで叩いてから、フランは剣を収めてヒカリの方へと走り出した。

「えっと……大丈夫、ですか？」

「アイツら……二人まとめて潰す」

全身あざだらけの天子は何とか立ち上がると、フラン同様ヒカリを
探すために部屋を出て行った。

第三十二話 両親の正体（後書き）

夜「なんだこの……失敗した感ハ」

アクセス数激減……

も、もう少しだけヒカリにお付き合いくださいな；

第三十三話 私は私

「ヒカリちゃん、何処行つたんだろ……？」

フランは屋根の上からヒカリを探していた。

見渡すと広がる雲に包まれた煌びやかな世界。

目を凝らして周囲を見渡したがヒカリの姿は見つからなかった。

豪奢な姿の天人から、白いローブ姿の人間を見つけるなど容易いはずなのに。

「……お」

天界の端、ちょうど崖となっている部分にちゃんと小さな白い人影を見つけた。

もしかしたらヒカリかもしれない。

フランは屋根を思い切り蹴ると崖を目指して一気に飛んだ。

崖の少し手前で着地して走ると、ヒカリが崖っぷちで立ち尽くしているのが見えた。

「ヒカリちゃん！」

「……………あ、フラン？」

ヒカリがフランに振り向く。

その瞳に覇気はなく、金の瞳は何処か虚ろだった。

「どしたのヒカリちゃん？ あの変な人たちが何かしたの？」

ゆつくりと、ヒカリが首を振る。

「ううん、違うよ。ちょっと、いろいろあって」
「……いろいろ?」

フランがヒカリの顔を横から覗きこむ。
ヒカリは、少しだけ顔を反らした。

「一つ、訊いていい?」
「何?」

「……フランの、お母さんとお父さんってどんな人?」
「私のお母さんとお父さん? ううん……」

フランは頬に手を当て遠い、遠い記憶を呼び覚まそうとして……

「………わかんない。全然。覚えてないもの」
「………そっか。吸血鬼の親も、やっぱり吸血鬼なのかな」
「ヒカリちゃん……?」

ヒカリはちよんとしやがみ込んで体育座り。
両腕を抱えながら、目の前の真白な雲海を遠い目で見つめた。

「じゃあ、ヒカリちゃんのお母さんとお父さんってどんな人?」

同じように横にしゃがみ込んでフランが訊ねる。
一瞬ヒカリは目を伏せ、それから寂しそうに答えた。

「お母さんは、ちょっと心配し過ぎな感じ。お父さんはいつも優しいよ」

「ふうん……。それって、どんな感じなの?」
「どんな、って……?」

横目だけフランを一瞥。

依然としてフランは屈託のない笑みを浮かべていた。

「私は、お母さんとかお父さんって、よくわかんないから。家族って言ったら、お姉様とか咲夜とか、パチュリーも……家族みたいなものかな」

フランの言葉に、ヒカリはほんの少しだけ口の端を上げた。

「……ふふ。まあ、そんな感じだよ。いつも一緒に大切な人。お母さんとかお父さんは、それよりちょっと尊敬する人」
「尊敬？」

「うん。ああなりたくなっていう目標みたいな……」

言いかけて、言葉が口の中で霞んで消える。

「……どうしたの？」

「……もしも、大切な人が、自分に嘘をついていたら、フランならどう思う？」

「嘘？」

「例えば、レミリアがフランに嘘をついたら？」

「戦う」

「……どんな理由でも？」

「だって、納得いかないもの。私を閉じ込めてた理由だって、未だに教えてくれないし」

「納得いかない……か」

フランの断言に、ヒカリは苦笑した。

「納得いかないから、戦うの！ でも、今まで一度だって勝てたこ

とないから……」

「勝てたら理由を教えてくれるのかな？」

「教えてくれなかったら、お姉様はホントの嘘つきだよ」

「……そっか」

そう言うフランを見てヒカリが微笑む。

本当は、大好きな姉と仲良くしたいだけなのに。

不器用な妹だな、と。

「ヒカリちゃん、嘘つかれてたの？」

「それとはちよつと違うんだけど……。何だか自信とか無くしちゃつて」

「……？」

フツと笑みを消してヒカリがうつむく。

「私って、何なんだろう。お母さんもお父さんも私は星の子だって言つて、私もそう思つてた。なのにその二人は幻想郷の、天界の住人だった。私は何なんだろう。願いを集める星の子であるべきなのかな。それとも……」

「……えと、私は難しいこと、よく分かんないけど」

フランが言った。

「気になるなら、訊けばいいんじゃないかな。ヒカリちゃんのお母さんとお父さんに。直接訊けば、納得するでしょう？」

「それは……そうなんだけど」

「それにさ。ヒカリちゃんはヒカリちゃんじゃない」

「……え」

顔を上げると、フランはいつの間にか街の方へと足を向けていた。そしてヒカリの方をくるっと振り返って笑ってみせた。

「ヒカリちゃんは私のお友達、でしょ？ 気になることは早くお仕事終わらせて、お母さんとお父さんに訊けばいいんだよ」

「そう……だね。うん」

少しだけ、ヒカリの中の何かが吹っ切れたような気がした。そうだ。

今とはとにかく自分の仕事を果たさなくてはいけない。

冥界で幽々子が待っているのだ。

腕でゴシゴシ目を擦って立ち上がると、バシバシ頬を叩いて気合いを入れ直す。

私は、私だ。

誰だとかそんな些細なことは、後でいくらかでも訊けばいい。

「あれ？　もしかして泣いちゃった？」

フランが少し意地悪く訊ねてきた。

「まさか。落ち込んだって立ち直るのも早いのが私だよ」

「あっはは。じゃ、戻ろうよ」

フランに手を引かれ走りだす。

握りしめた手を見つめながら、ヒカリは心の中でフランに感謝していた。

悩むのが、馬鹿馬鹿しくなった。

お母さんとかお父さんとか、星の子とかはともかく。
私は、私なんだ。

「天子さんに頼んで、桃を貰いに行かないとね」

フランと並んで街を走り抜け、ヒカリたちは最初にいたあの家へと
急いだ。

第三十三話 私は私（後書き）

ず、ずいぶん軽い主人公になっちまったような；

最近、ちよいと執筆作業が遅れ気味だ
新作の妄想でもしてようか……

第三十四話 天の桃

「あら、お帰り。早かったのね」

二人が家に戻ると、天子が卓について楊枝で何やら突いていた。

「あれ？ あなたヒカリちゃんを探してくれたんじゃない？」

「ここに誰かいないと行き違いになっちゃうでしょ。だから私が待つていてあげたのよ」

「そうなんだ……？」

本当は面倒だから衣玖に任せた。

と言つてもよかつたのだが、同じ天人の好^{よしみ}として止めておいた。

「あの、ごめんなさい。勝手に飛び出しちゃって……」

「いいわよ別に。それよりもさ、アンタたち何か用があつてここまで来たんでしょう？ そっちはいいの？」

「そうだよヒカリちゃん！ 桃だよ桃！」

「はあ？ 桃ですって？」

天子が呆れたような声を出すと、二人の視線が微かに上を向く。ちようと天子の頭の上の帽子の辺り。

「こ、これが天界の桃ですか！？」

「んなわけないでしょ馬鹿ッ！ は、離せ手を伸ばすなつてのもお
おおッ！！」

・
・
・

「ヒカリさん、もう戻ってらして……？ そのコブは何ですか？」

衣玖が部屋に戻ってくるなり、二人の頭の派手なタンコブが目に入る。

涙目で振り返る二人は無言で天子を何度も何度も指差した。

「こいつらが、私の帽子の飾りを天界の桃だとか言って取るうとするから本気で殴っただけよ」

「まあ、それお飾りでしたの？」

「衣玖まで何言ってるの！？」

「ふふ。冗談です」

にこやかに衣玖が微笑むとヒカリとフランの頭のタンコブを優しく撫でた。

ほんのり香水の匂いがして、二人は少しドキツとした。

「お二人とも、天界の桃がご入用なのですか？」

「は、はい。とある人に頼まれちゃって」

「地上の人間で天界の桃を食いたいなんて、どんだけ食い意地の張ったヤツなのかしら。ちょっと見てみたいわね」

ふんぞり返った天子が不機嫌そうに眉を寄せる。

たしかに彼女は食い意地張っている気がする。人間じゃないけど。衣玖がにこやかに指を立て提案した。

「じゃあ、果樹園にでもご案内しましょうか？」

「果樹園？ 桃以外にも果物があるの？」

「桃以外ここにはないわよ」

「え？」

「言うなれば桃園ですね。ここにはそれ以外、食べ物はありません」

し」

「えーッ？ 桃以外にないの？ リンゴとか、イチゴとかは？」

「ないわよ」

「ケチ」

「私にケチって言うんじゃないわよ！」

天子とフランがギリギリと火花を散らしながらにらみ合う。

やんちゃな子供二人の慣れ合いとよく似ているような気がしてヒカリはクスツと笑みをこぼした。

二人とも我儘だから、案外相性がいいのかもしれない。

「……はあ。いいんじゃないの別に行っても。私はめんどくさいからパス」

「なら、早速行きましょうか。出てすぐのところですのでお時間はかからないかと」

「ありがとうございます、衣玖さん」

「いえいえ」

天子に犬でも追っ払うような感じでヒラヒラと手を振られながら、ヒカリとフランは衣玖を先頭に部屋を出ていった。

・

・

陽光の差し込む果樹園。

そこでは青々とした桃の木々が見渡すかぎりに広がっていた。

桃の木の下では、天人たちが数人で木を囲みながら飲んだり踊ったりと楽しそうに過ごしていた。

「すごい……。これ全部、天界の桃なんですか？」

「はい。まあ、特にこれといったお世話はしていないんですけど」

「すごいすごい！ わぁーいッ！」

「あ、フラン待ってよ！」

斜面を駆け降りフランが桃の木に飛び移る。

白く透き通るようなピンク色をした果実をもぎ取ると、大きく口を開いてかじりつく。

カ、キンッ！

甲高い音が響いたかと思えばフランが突然その場にしゃがみ込んでしまった。

「フランッ!？」

うずくまるフランにヒカリが駆け寄る。

顔を上げると、フランはとても悔しそうに涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの？ それに今の音は……?」

「か、かひゃくて……」

「え？ フラン、今何て？」

顎を何度か手で確かめてからフランが訴えるようにして答える。

「この桃、硬くて食べれないよ……」

「硬くて食べれない……?」

今しがたフランが手にしていた桃を手に取り観察する。
特にこれといった以上はなく、見た目もほとんど普通の桃だった。

柔らかい皮もぷにぷにしていてふんわりといい匂いがする。

「……普通に柔らかそうだよ？ ほら」

「で、でもお……」

桃を受け取りフランがもう一度大きく口を開けてかぶりつく。

すると不思議なことに、あれだけ柔らかそうな桃だったのにフランの歯では全く傷一つ付かなかった。

顔を真っ赤にしながらしばらく続けていたが、やがて顎が疲れて吐き出してしまった。

「これ偽物だよ。他の、本物は……」

「無駄ですよ。この桃は天人以外のものが食べることを許されていませんので」

いつの間にか衣玖が傍に駆け寄っていて、落ちた桃をそっと拾い上げた。

桃を指で示しながら、まるで教鞭を執る先生のような口調で言った。

「これは天人以外が口をつけても、食べられないものなんです。ですから、地上の人が欲していたとしても、残念ながら食することは出来ないんです」

「じゃあ、衣玖さんは食べられるんですか？」

「私は天人ではありませんのでもちろん食べられません」

落ちた桃を衣の袖で優しく拭くと、衣玖は桃をヒカリにスツと差し出した。

「貴女なら、食べられますよ。よかったですか？」

「私が？ いや、でも私が食べても……」

とはいえ、目の前の桃はとても美味しそうだった。
ほんのり漂う甘酸っぱい香り。

触れれば蕩けてしまいそうな薄皮の、その奥には想像もできないような甘美な果肉が詰まっている。

……ごくり。

「……じ、じゃあ、ちょっとだけ。ちょっとだけ……」
「はい。どうぞ」

ポンと手に乗るふんわりとした重量感。

ヒカリが手を伸ばすと、まるで皮はまるでレースのようにそつと静かに剥けた。

白く透き通って、それでありながら淡い桃色を放つその果肉。

……意を決したヒカリは目を瞑りながら、その果肉に小さく唇をつけた。

「……どう？ ヒカリちゃん？ 美味しい？」
「……………」

味を確かめるため、よく噛んで、舌で転がして、それから……

「……ううん。普通の桃の味なんだけ」
「ひ、ヒカリちゃん!？」

正直に感想を述べようとしたその時フ란の声に遮られる。
フ란の方を見ると、何故か目をしっかりと見開いてわなわなと体を震わせていた。

理由が分からず首を傾げるヒカリ。
隣の衣玖も、何かに驚いた様子でポカンと口を開けて呆然としていた。

「ちょっとちょっと。二人ともどうしたの？ 私の顔、何かついてる？」

「ち、違うよ！ 髪、髪の毛！」

「髪？ 私の髪がどうかし……！」

ちよいとつまんだ毛先を見た瞬間、ヒカリの目がカツとめいっばいに開かれた。

それは、今見ている光景が信じられないといった風に困惑に満ちていた。

「あ……あれ？ な、何で私の髪が……！？」

お気に入りの白金色の髪。

その髪が、何故か桃を食べ始めたその時から何故か金色に光り輝きだしていた。

訳が分からず、ただ金に染まった自分の髪を見つめながらヒカリは立ち尽くした。

「な、何これ……？ どうなっちゃってんの私……！？」

第三十四話 天の桃（後書き）

とにかく、終わりまで止まらず勢いだけで書き終えるッ！
次回作はもっと綿密な準備をしなくては……

色々にご迷惑をかけて申し訳ないです；

第三十五話 意味のない変化……？

「ど、どどどどうしよう！？ 私の髪が金色になっちゃった！？」

鏡の前で何度同じセリフを叫んだことか。

ヒカリは金色に染まってしまった自分の髪を引っ張ったり必死に洗ったりするが何の変化も見られなかった。

鏡の中の自分が、まるで別人のようにヒカリの瞳に映っていた。

「どういうことでしょうか。あの桃にそんな効果ありましたっけ……？」

「もちろんないわよ。食べれば身体能力とかは強化されたりするけど、髪を染めるなんてヘンテコな効果あるわけないじゃないの」

「うう……。どうしょ。絶対お母さんに怒られる……」

「でも、前にもヒカリちゃん金色の髪になってたよ？」

フランが言う。

それは前にもフランから聞いていたのだがヒカリにそんな記憶はなかった。

しかし、今日の前で輝く髪は紛れもなく本物。

「いいじゃん。その方が可愛いよ」

「か、可愛いとかそういう問題じゃなくて」

「他に変化はないのですか？ 例えば能力とか^{ちから}」

「能力は……ううん、ここじゃ狭くて確かめようがないから……」

「じゃあ、さっきの広場にでも行きましょ。その方が動きやすいでしょ」

・
場所は変わって現在ヒカリたちは街から離れた、ちょうど天子と戦った空地へと来ていた。

「じゃあ、試してみるよ」

軽いストレッチをしてからグツと姿勢を低く構え、ヒカリは思い切り地面を蹴り上げる。

ドンッ！ と激しい砂ぼこりを巻き上げヒカリの姿が一瞬で遥か彼方へと飛ぶ。

フランは見慣れたものだったが、天子と衣玖の二人は豆粒サイズにまで小さくなったヒカリを見つめて呆けたように口を開けていた。

「……すご。一瞬であんなとこまで飛べるんだ」

「私を助けたのはあの能力だったんですか。並の人間では追いつくことなんて考えるだけ無駄ですね」

「ヒカリちゃん！ どおー？」

遠くでヒカリが小さく首を傾げ唸る。

特に、これといった変化はない。

いつもと同じで、一瞬を爆発的な加速で駆け抜けるだけだ。

同じ要領でフランたちの元へと戻る。

今度は今度は、とフランが楽しそうに提案してきた。

「弾幕は？ 何か変わってるかも！」

スベルカード

「術符か。オツケ。やってみる」

手の中で光を躍らせ力を集める。

やがてそれはスツと白く槍状に伸びて形を成す。

「……ブリーナクは、普通か」

依然と同じ白く輝く槍。

光の色が変わるとか、長さが変わるとか重さが変わるとか、そういった変化は何も見られない。

投げて手応えは一緒に威力も速さもほとんど同じ。

すると、天子が呆れたような声音で口を挟んできた。

「……あのさ。そういうのって相手がいないと意味ないんじゃないの」

「……………あ」

「馬鹿ねえ……。相手してあげてもいいけど、元の威力が分からないから私らじゃ参考にはならないわよ」

「じゃ、フランが相手するよ!」

トン、とヒカリの前に飛び出しレーヴァティンを握りしめる。

「いつでもいいよ。普通に弾幕ごっこする感じでさ」

「う、うん。じゃあいくよ」

ブリーナクを消して光を別の形に作り直す。

それは光り輝く一本の巨大な矢となった。

「瞬符『光陰矢の如し』」

三步ほど助走をつけまっすぐフランに投げつける。

フランが防御に構えるよりも先に、光の矢はフランを手からレーヴ

アテインが弾く。

「……は、ははは。やっぱ速過ぎて追いつかないや」

「でも、これもいつもと変わらないような……」

他の術符も試してみたが、威力も何も変化なし。

色々試した結果、結局変わっていたのは髪の色だけだった。

「天界の桃食べて髪の色が変わるだけなんてアンタが初めてよ。どうなってるんだか」

「私が知りたいです……」

私は本当に何なのだろうか。

せつなくなるべく気にしないでいようと思っていたのに、ここに来て疑問が再び心の底から浮かび上がってきたような気がした。

「……それで、これからどうするの？」

「と、とりあえず戻ります。ここに長居していても仕方ありませんし」

「そ。じゃあ衣玖、出口まで送ってあげなさいよ」

「はい。承知いたしました」

空き地を引き返し街を抜け、ヒカリたちが元来た場所へと戻る。

「あの、いろいろとご迷惑かけてすいません」

「いいえ。総領娘様も、何だかんだで楽しんでいたみたいですし」

「……あれで？」

とてもそんなそぶりを見せていないような気がするが。

「じゃあ衣玖さん、いろいろありがとうございました」
「ありがとうございますッ」

ヒカリとフランが揃えて礼をする。

衣玖はにこやかに微笑みながら二人の後ろ姿を見送った。

・

それから、しばらくして……

「そういえばヒカリちゃん、お姉さんの欲しがってた桃はどうするの？」

「実は、こっそり持ってきたんだけど……」

白玉楼に辿り着くなり、幽々子は眩いばかりの笑顔で二人を出迎えてくれた。

「おかえりなさい。どうだった？ 天界の桃、手に入ったのかしら？」

「い、一応……」

ポシェットから取り出した小さな桃。

見た目もほとんど普通の桃で、どこが違うのかまるきりわからない。幽々子は桃を受け取ると興味深そうにしげしげと見つめて、やがて、

「はむ」

「あ！ 幽々子さん、その桃は……！」

幽々子の顔が、みるみるうちに渋くなって、やがて瞳に大粒の涙があふれ始める。

「か、硬くて食べられないじゃないコレ……。ねえ、これって本物の天界の桃なの？」

「あの、実は……」

そこから涙目の幽々子を説得するのにもの凄く時間がかかった。具体的に言つと、ちょうど幻想郷に朝日が昇り始めるころまで。

結局残った桃はヒカリ以外食べることが出来ないので仕様が無く食べた。

「……ただの甘い、普通の桃なんだけどなあ」

そんなヒカリの姿を、恨めしげに幽々子が睨んでいたのは言うまでもなく……

第三十五話 意味のない変化……？（後書き）

バイトで遅れました；

すみません；；

そして評価ポイント、ありがとうございます。

明日も遅れる……のかも？；

第三十六話 不穩で多忙な朝

「……ヒカリ。貴女大丈夫なの」

「……………ふえ？」

朝食のトーストにジャムではなくソースをべったり付けるヒカリにレミリアは呆れたように言った。

まだほとんど夢心地なのか、ヒカリは右に左にぐらんぐらん揺れていた。

「ほ……………ほとんど、寝て……………なくて……………え」

「……………咲夜、コーヒーに塩でも入れてあげなさい」

「はあ……………。かしこまりました」

レミリアのリクエスト通り、塩の入ったコーヒーがヒカリの元へと運ばれる。

開いているんだかないんだかわからないような目つきで黒い液体の入ったカップを掴むと、くつと一気に喉に流し込んだ。

「ッ……!」

ヒカリの眼が、カッと見開き脳裏に想像もできない刺激と情報が流れ込む。

ざらつくコーヒーの舌触り。

苦みの中に、全然噛み合わない塩からさと渋さ。

それでいてしつこく口の中で絡みつくように漂う風味。

……有体に言えば、想像以上に不味かった。

「……………あの、ヒカリさんの目から光がなくなっちゃいましたよ？」

「いい気味よ。それに、甘いコーヒーしか飲めないヒカリが悪いわ」
「今お出したものは、もはやコーヒーとは言えないような気がします」

「塩の入ったコーヒーを好んで飲む人を私は知ってるけどね」

「……」

「あ、そういえば思い出した」

自分のカップのコーヒーに口を付けながら、レミリアは何かを思い出したかのように指を立てた。

「ヒカリ、貴女今日時間はあるのかしら？」

机に突っ伏していたヒカリが虚ろな瞳でレミリアを見る。

それからぼうつと視線を反らして思案にふけり、やがて首を振った。

「夜以外は……何もないから、ヒマですけど……」

「そう。実は少し前に霊夢がここに来てね。明日のことで話があるから神社に来てほしいって言ってたのよ」

「……？ 明日？」

明日って、何の日だ。

別に誕生日でもないし、特にこれといった祭日でもなかったような気がするが。

ヒカリが皆目見当がつかずボケツとしていると、レミリアは呆れたようにため息をついた。

「七夕、よ。願いを集めてるってのに、一大イベントを忘れるなんてどうかしてるわよ？」

「……ああ！ そうだそうだ！ 思い出した、七夕か！」

半分死んでいたような意識が一気に覚醒してガバツと勢いよく立ちあがる。

勢いで椅子が吹っ飛んだが気にしない。

明日は幻想郷で願いが集まる絶好の日。

色々なことがあり過ぎてすっかり忘れていたのか。我ながら少し恥ずかしい。

「そういえば、七夕のお祭りがどうか言っていたわ。それで貴女に何か用があるんでしょう。特に用事もないのなら直ぐに行ってあげなさい」

「も、もちろん！ 今すぐにだって行きますよ！」

朝食を高速で流し込み飲みこむと、自室へ駆けあがって支度して玄関を出る。

神社の場所は覚えている。

人里まで降りて行けばすぐ見えてくるのだから嫌でも覚えてしまうのだ。

「行つてきます！」

「うえ！？ あ、はい！ 行つてらっしゃいませ！」

ヒカリの姿は爆音と共に一瞬にして消えてしまった。

……そして、それを見送るレミリアは微かに笑みを浮かべた。

「邪魔者は消えたし、当事者にちよつと訊いてみようかしら」

「お嬢様……？」

食堂の戸が開き、フランが一番最後に現れた。

一応身だしなみは整ってはいたが、目元にはくまがあったり半分寝

ばけ眼だったり、まだしつかりと起きていないのが一目で分かる。

「……おはようフラン。朝からそんな顔をして、昨日はさぞかし楽しい夜更かしだったのかしら？」

「ふぁ……う、うん。えと、本を読んだり遊んだり……」

「そう。ま、たしかにヒカリと一緒になら何でも楽しそうね」

「うん。……えへへ。楽しいよ」

「楽しいのは絵本なのかしら？ トランプやタロット？ それとも……」

深紅の瞳がスツと細まりフランを見つめる。

「外の世界……とか？」

「……………ッ!？」

・
・

「こんにちわ〜！」

神社の正面で意気揚々と大きな声であいさつをしたのだが、返事はなかった。

朝の博麗神社は前より空気が凜と澄んでいて思いの外心地よかった。燦々と注ぐ陽光、朝を告げる鳥の歌。

境内の真ん中で大きく深呼吸すると、体の中が清められるような気がした。

「……………霊夢、遅いな」

一向に返事はなく、ヒカリが来てからすでに数十分経過していた。ふと、背後から気配を感じ振り返ると、赤いリボンと緑色の何かが石段を上りながら揺れているのが見えた。赤いリボンの正体は、もちろん霊夢だった。

「あら、おはよう。ずいぶんと早かったわね」

「朝起きて、ご飯食べてすぐに来ましたから。……その葉竹は？」

霊夢のリボンと共に揺れていたのは、ちょうど葉竹の葉の部分だった。

やや小振りのその葉竹を転がすと、一度大きくウンと背筋を伸ばした。

「紫が飾れってうるさいから持ってきたのよ。明日、七夕のお祭りをやるからってさ」

「それで私を？」

「そ。せっかくだから手伝ってやれってさ。そう言うなら自分でやりやいいものを」

ぶつくさ文句を言いながら竹を境内の端に片づけ社の中へヒカリを招く。

差し出された湯のみは真夏だというのに湯気が立っていた。

「それであの、私に用ってのは？」

「まあ大したことじゃないんだけどさ。お祭り用の竹を取りに行くから付き合ってほしいってだけなのよ」

「え？ 今持ってきた竹を使うんじゃないんですか？」

「紫がお祭り用に特別なヤツを用意してるんですって。ただ、境界いじって何処へなりとも自由に行けるのに『自分の手で持つて行かないとご利益ないじゃない？』とか言って用意した竹を永遠亭に置

いてきたそうよ。全くホントに面倒なんだから」

「永遠亭……？」

聞き覚えのない名前だ。

「そつか。アンタ知らないんだっけね。里から少し出た先の竹林の奥にある、まあ一種の病院よ」

「何でそんな場所に置いてきたんだろう？」

「大方、運ぶのがめんどくさいからでしょ。とはいえ、特別な竹って何なのかしらね」

「ううん……」

頭の中で想像してみる。

特別な竹……か。

「中にお姫様が入ってるとか」

「それ、七夕と全然関係ないじゃないの」

霊夢に鼻で笑われてしまった。

割と一生懸命考えたのだが。

ヒカリが湯のみの中身を飲もうか悩んでいると、不意に霊夢が立ち上がった。

「あれ？ 何処に行くんですか？」

「だから、永遠亭に竹を取りに行くって言ったでしょ」

「あ、そうだった。了解です」

「……あ。そうそう」

鳥居をくぐった辺りで、何故か霊夢がヒカリを振り返り言った。

「さっきの、竹の中のお姫様ってヤツ」

「それがどうかしたんですか？」

「お祭りの竹とは関係ないけど、あながち間違っではないわよ」

「え？　どういう意味ですか？」

霊夢は少しだけ、悪戯っぽく笑ってみせた。

……何故だか意地悪そうに見えたが黙っておく。

「今から会いに行くもの。“かぐや姫”に、ね」

そう言っただけで霊夢は呆けるヒカリを余所にトン、と空へと飛びあがった。

第三十六話 不穩で多忙な朝（後書き）

昨日はすみませんでした；

原因は、端的に言えば体調不良。

夕飯食べてる時に、急に視界がぼやけてよく見えなくなっただんですよ。

パソコンもほとんど見えなくてろくに使うこともできず、結局昨日はおやすみ；

今はとりあえず何ともないで大丈夫です。

明日からまた一日一話でいきますよん。

では。

第三十七話 悪戯ウサギの案内人

里から少し離れた場所にある竹林。

その奥にヒカリと霊夢が目指す永遠亭と呼ばれる建物はあるらしい。霊夢の後ろを飛びながら、ヒカリはどんな場所なのだろうかと考えながら、同時に霊夢の言っていた言葉を思い出していた。

『今から会いに行くもの。“かぐや姫”に、ね』

かぐや姫とは、竹から生まれたあのかぐや姫なのだろうか。

だとしたら、月に帰らずこんなところで何をやっているのだろう。幻想郷が気に入って住みついたのか。

ふと、霊夢が高度を下げたので同じく下げる。

ちょうど二人は竹林の入口に着地した。

目の前には空へ向かって雄々しく伸びる竹が、まるで壁のように二人の前に立ちちはだかっていた。

しかしその奥の様子を覗いてみると、同じような竹が延々と続いていて詳細をうかがい知ることが出来なかった。

「……この奥に、ホントに病院なんてあるの？」

「あるわよ。ただちよつとした結界が張ってあるから、普通に入ったら確実に迷うわ」

「え、じゃあどうやって……」

「今日は先に言伝してあるから大丈夫よ。案内人がすぐ近くまで来ているわ」

「案内人……？」

その時、ガサガサと草の揺れる音がしてヒカリが振り向くと、白いたれ耳のようなものが草葉の陰に見え隠れしていた。

「何だアレ……へぶツ!? ぎにゃ!？」

ヒカリが恐る恐る草陰に近づいてみると、突然陰から何かが飛びだしヒカリの顔面に激しく激突。

飛び出した何かは華麗に宙を舞うと、悶絶するヒカリの背中に着地して追撃。

「よう。霊夢」

「兎? てつきり私は妹紅が差し向けられるのかと思ってたわよ」

「何を言ってるか。元々この竹林は私のものだぞ。私が案内しないでどうする」

「……そんな性格してたかしら?」

「あの……そろそろ退いてくだしあ」

「おおっと。すまんすまん。全然気づかなかったよ。はっはっは」

「むぎゅ! うお!? あうツ!」

てゐは二度三度足踏みしてから、にかにかと笑いながらヒカリの背中から降りた。

「いったた……。あの、霊夢さん、この人誰?」

「竹林の案内人よ。本当は別の奴が来るのだと思ってたんだけどね」

「因幡てゐさ。よろしくな」

「……あんまりよろしくしたくないです」

薄いピンク色のワンピースに黒のショートカット。

そして頭には小さな白いたれ耳がひよこひよこ揺れている。

てゐと名乗った少女から微妙に距離を取りながら、ヒカリは怪訝そうな顔で答えた。

「お師匠様のところに行くんだろ。ついておいでよ」

てゐの案内で二人は竹林の中へと足を踏み入れる。

「うわ……すごいな……」

竹林に入った途端むっと立ち込める緑の匂い。

そして目の前に果てしなく広がる青々と伸びる竹、竹、竹……
視界に映る色のそのほとんどが緑に染まっていて、ヒカリは少し気が滅入りそうになった。

「こんなとこ通れるんですか？ 道だって全然見えないし……」

「だから案内人が必要なのよ。てゐはこの竹林を昔から管理している妖怪だから心配はないわ」

「そういうこと。ほらほら、ヒカリだっけか？ ちゃっちゃんと進もうじゃないか」

「うわわ、何も背中を押さないでも……」

てゐはヒカリの背中をどんどん押しながら竹林の道なき道を進んでいく。

ふと足にふわ、と何か柔らかいものでも踏んだような感触が伝わった。

かと思うと、突然ヒカリの目の前世界ががくんと落ちた。

「へ……、つてにゃあああああ!？」

ものの見事にヒカリは竹林の影に作られた落とし穴に落ちた。

ぶつけた頭をさすりながら顔を上げると、霊夢とてゐが呆れたような顔をしてこちらを見ている。

「ちょっとアンタ、気をつけなさいよ」

「あたた……。ご、ごめんなさい。落とし穴があるだなんて知らなくて……。？」

視界の端に映るてゐが、何故か小さく笑みを浮かべていた。まるで落ちたヒカリをあざ笑うかのような狡猾な笑み。

「ここは侵入者対策のトラップがわんさかあるのさ。注意しなよ？」
「そ、そういうのは早く言って欲しい……」

どうにか穴から這い出ることが出来、歩みを再開する。
相変わらずヒカリはてゐに背を押されっぱなしで竹林を奥へ奥へと突き進んでいく。

そして再び足に伝わる柔らかい感触。

「……？ どうしたのさヒカリ。急に足を止めちゃって」

「あの、てゐさん先に行ってくれませんか？」

「私が？ 別にいいけど？」

するとてゐは何事もなく地面を歩き先へと進む。

「なんだ……私の勘違いか」

てつきりまた落とし穴があるんじゃないかと警戒しててゐを先行させてしまった。

ちよつと恥ずかしい。

気持ちを切り替えて一歩踏み出して、また世界が落ちた。

「……ヒカリ、アンタね」

「つくく。間抜けな奴だなあヒカリって」

キツとてゐを睨みつけると、我関せずといった感じで口笛なんぞ吹いていた。

……何だか妙に腹が立ってきた。

落とし穴から這い出て歩みを再開する。

奥へ進むたび差し込む光の量が少なくなっていく。

足元も覚束なくなってきた、てゐの背中を追いかけるのも苦勞してきた。

「ほらほら、足元氣をつけなさいよ？」

「もう二度と落ちるもんか……ッ？」

踏みしめた地面が緩くへこむ。

二度あることは三度あるわけで、これもやはり落とし穴だろう。

微かに視線をてゐに移すと、こっそりとうすら笑いを浮かべているが、ヒカリと目が合うとサッと目を反らした。

「……」

「ちよつと。早く進みなさいよ。そんなに暇じゃないんだから」
「わ、わかってますよ」

この地面は確実に落とし穴だ。

絶対、絶対落とし穴だ。

目の前のてゐの反応を見る限り、落とし穴の犯人は絶対に彼女だ。さつきからヒカリを陥れて楽しんでいるのは一目瞭然。

今度は、引っ掛かるもんか。

「……とおッ！」

恐らく落とし穴であろう地面を飛び越え、その先を踏みしめる。
グツと、反発する柔らかな土の感触に安堵した瞬間、目の前の世界
が落ちた。

堪え切れなくなったてゐがお腹を抱えてげらげら笑い出した。

「あーっははははは！ ヒカリってホント面白いなあ。悪戯し甲斐
があるってもんだ」

「う、うううう……もう！ てゐ！ 待ちなさいよ！！」

ヒカリの堪忍袋の緒が切れる瞬間である。

落とし穴を飛び出し逃げるてゐを追いかけるヒカリ。

「……どっかの誰かさんと似てるわねえ」

そんなヒカリの後ろ姿を見ながら霊夢がしみじみ呟いた。

気がつけば、霊夢たちは目的地の永遠亭のすぐ正面まで来ていた。

第三十七話 悪戯ウサギの案内人（後書き）

そろそろ『コープスパーティーbookOfShadow』の発売日！

そしてその次の週にはダークソウル！ さらにその次の週には武装神姫に第二次スパロボOG！

新作ゲームラッシュ！

プレステ3もすぐに買う予定……あ。

そういえばCOD・MW3を買うかBFBC3のどっちを買うのかまだ決めてなかったな……

おっと、いきなり脱線した。

読者の皆様方、ありがとうございますです。

次回作は、もっとゆる〜いお話にしよう、うん。

第三十八話 不機嫌なお姫様

永遠亭。

迷いの竹林の奥にひっそりとたたずむ日本家屋。

白玉楼とまではいかないがそれなりに大きく、玄関の先に見える趣のある広々とした庭園が目を引く。

鹿威しの音がコン、と静寂に響く。

「これ、病院なんだ……？」

「正しくは診療所さ。お師匠様は……と」

廊下を歩き奥へと進んでいくと、つんと薬品の香りがしてきた。

部屋を覗いてみると、銀髪の女性が何やら試験管を片手に難しそうな顔をしていた。

「あ、いたいた。お師匠様、霊夢たちが来たよ」

てゐの声に反応して女性が顔を上げる。

その面は白磁の如く透き通っていて、女のヒカリが見てもハッとするほど美しかった。

ほんのり紅をのせた唇がそつと開く。

「あら、もう来たんですか。意外と早かったですね」

「そんな挨拶はいいわ。紫に頼まれて特別な竹とやらを受け取りに来ただけど、何処にあるのかしら？」

「外にありますので案内しますよ。てゐ、ご苦労様」

「ん。じゃ私はまたちょっと出かけてくるよ」

言うなりてゐは部屋を素早く出て行ってしまった。

「あの、特別な竹って何なんですか？」

「そつえば、貴女はどちらさまかしら。見かけない顔ね」

銀の瞳に据えられ、ヒカリは背筋をピンと張りながら片言な言葉で返事した。

「あ、え、えと、ヒカリって言います。緋やじろえいりん替ヒカリ……」

「ここで診療所を営んでいます、八意永琳やじろえいりんという者です。お見知りおきを」

「こ、こちらっこそ！」

「なあに緊張してんだか」

永琳は立ち上がると、部屋を出て二人を庭の方へと案内してくれた。竹林に囲まれているせいか、ひんやりとした風がこの永遠亭を吹き抜けてとても気持ちがいい。

廊下を抜けて庭先へ出ると、玄関で見た広々とした庭園が見えてきた。

「そつえば、特殊な竹って何なの？」

「え？ 紫さんからうかがってないんですか？」

「アイツがそういうこと言うわけじゃないの。大事なところだけ笑って誤魔化して楽しんでるんだから」

「だからたったの二人でここまでいらしたんですね……。大丈夫でしょうか」

「はあ？ 大丈夫ってなに……が……」

「あれ、どうかしたの霊……夢って!？」

霊夢がぼくと立ち尽くす視線の先を見てヒカリは思わずぱかんと口を開けて啞然としてしまった。

そこには竹があつた。

いや、竹林のど真ん中なので竹があつても何らおかしくはないのだが、それは明らかに通常のものサイズを楽々通り越したような巨大な竹だった。

地面から天へとまっすぐ伸びる竹の、先が雲に隠れて見えないほど。幹だけ見ても、ヒカリが両手を伸ばしても一周できそうない。

普通の竹を数十本も束ねれば同じ大きさになるだろうか。

というか、コレは竹なのだろうか？ と疑問に思えるような、もはや別の植物としか思えないほどに巨大だった。

外から見えたはずなのに見えなかったのは、霊夢が言っていた結界のせいだろうか。

「……頼まれていた特別な竹というのはこれですよ。たった二人で運べますか？」

「ば、ばばば馬鹿じゃないの！？　これが竹ですって！？　でか過ぎよ！」

「世界樹って、こんな感じだよね多分」

「タケノコ生えるような世界樹なんて私は嫌よ」

「紫さんに頼まれて、竹林の竹を品種改良する薬を使って作ったんですけど……」

「でか過ぎだつっつの。いったい誰があそこまで短冊を吊るしにくつてのよ」

指差した先に、微かに見える緑色の笹の葉。

雲に霞んでいるせいでよく見えないし、あの高さじゃ子供がジャンプしたって絶対届かない。

「……流石に大き過ぎですか」

「当たり前でしょ。さっさと小さくする薬でも作ってちょうだいよ。これじゃ神社にだって置けやしないわ」

「はあ……。わかりました。では、少々お待ちください」

永琳はそう言っただけから直接上がって部屋へと戻っていく。
霊夢はため息つきながら縁側に座り、ヒカリは……。特にすることが無かったので巨大過ぎる竹をぼんやり見上げていた。

「……………」

ふと、背後に視線と気配を感じヒカリは振り向く。

廊下はさらに続いていて、その奥にはまた別の部屋が。

ちょうど離れになるのだろうか。

そして部屋の襖の端に何か着物の裾のようなものがチラッと見え隠れしていた。

「…………だ、誰がいるの？」

庭の砂利道を進んでいくと、やがて十二単に身を包んだ少女が見えた。

色取り取りの単を纏い座している少女は、何処か神秘的な雰囲気にも包まれている。

「も、もしかして……………」

かぐや姫？

霊夢が言っていた、かぐや姫に会うというのはこのことだろうか。
優雅な出で立ち、艶やかな長い黒髪。

物語ではありとあらゆる男性が心惹かれ焦がれたという絶世の美女。
そんな少女が、ヒカリを見据えた瞬間口を開いた。

「誰かしら」

「し、喋った!？」

「……いきなりずいぶんな挨拶ね。失礼にもほどがあるんじゃない」
「ご、ごめんなさい……」

黒い瞳が、舐めるようにしてヒカリを見つめる。

そして頬杖つきながらハアとヒカリに聞こえるような声でため息をついた。

「で、あんた誰よ。今日来客の予定は霊夢だけのはずでしょ」

「緋慧、ヒカリって言います。えと、その霊夢さんと一緒にここまで来たんですけど……」

「そうなの」

「……………」

ぶつきらぼうというか、酷くつまらなそうに少女が答える。

それから二人の間に沈黙が流れた。

妙に気まずい空気に、ヒカリの背中に嫌な汗が背筋を這うのが分かる。

少女は欠伸しながら瞳を細め、手にしていた扇子で口元を覆った。

仕草は、姫君らしいといえばらしい。

だが……

「そんなところで突っ立ってて楽しいのかしら？　というか、何か用なの？」

「い、いえ……その……」

口を開くと酷く冷めた言葉が飛んでくる。

ヒカリの抱いていたかくや姫のイメージにピシッ、と小さなヒビが入った。

「あの、えと……。霊夢の言っていたかぐや姫って言うのは……」
「私のことね。それがどうかした？」
「うう……」

返ってくる言葉一つ一つに鋭いトゲが見えるようだった。

ぐさぐさと、それは遠慮無しに庭に踏み込むことを戒める薔薇のトゲのような。

プライベートを害された気分なのだろうか。

すっかり萎縮してしまったヒカリは、突き刺さるような視線に気圧されすくすくした後退りしてしまう。

……ちよつと怖い。

「……………」
「……………」

どうしようもない辛い沈黙。

もう謝って霊夢のところに戻った方がいいんじゃないのだろうか。

「…………あの、すみません！」
「…………？」

突然頭を下げたヒカリに面食らう少女。

「その、かぐや姫って聞いたから、どんなに綺麗な人なんだろうなって、興味が湧いたからその……」

「……………」
「プライベートな時間、邪魔しちゃってすみません！ し、失礼しま」

「待ちなさい」
「…………え？」

脱兎の如く駆け出そうとしていたヒカリが振り向くと、少女はちょいちょいと手招きしていた。

それはこっちに來い、という合図。

ヒカリが縁側まで近づくと、少女のか細い声が何かを呟く。

「……………悪かったわね」

「へ？」

上手く聞きとれずに聞き返すと、扇子を退けて少女が顔を出した。近くで見るともっと綺麗な顔をしていた。

世の男性が恋をするというのも頷ける気がした。

そんな美しく端正な表情を微かに歪めながら、少女が言った。

「少し、虫の居所が悪くてね。そんな最中に貴女が来たものだから、少し当たってしまったのよ」

「いえその……………私の方こそ、すみません」

「…………蓬萊山、輝夜よ」

「名前まで、お姫様なんですネ」

「どう答えていいのよ、ソレ」

沈黙の流れていた二人の間に微笑が漏れる。

「あの、虫の居所が悪いつて、何かあったんですか？」

「さっきケンカで珍しく引き分けちゃってね。いつもならコテンパンのフルボッコにしてやるのに出来なくて。それで不機嫌だったのよ」

「け、ケンカ？ お姫様がケンカするんですか！？」

「その姫って言うの止めてちょうだいよ。別に姫でも何でもないんだから、輝夜でいいわ」

「じ、じゃあ輝夜……さん」

「何かしら？」

「ケンカって、誰とですか？」

すると、輝夜の眉が一瞬への字に曲がって、それからうーんと唸りながら空を見上げて言った。

「腐れ縁というか何というか……ま、向こうにとっては父親の仇なんじゃないかしら？」

「親の仇って……、輝夜さんはその人の父親を殺したんですか？」

「殺しちゃいけないわよ。ううん、初対面の人には説明し辛いわね。簡単に言えば逆恨みかしら？ 因縁つけられてるのよ」

「因縁……逆恨み……」

物騒な言葉の羅列にヒカリの顔が引きつる。

「ま、大したことじゃないわよ。いつもふらりとここに来ては、戦えだの何だの挑発して、結局私が勝つ。今日はたまたま、引き分けちゃっただけ」

「ふうん……？」

幻想郷のかぐや姫とはよくわからない。

因縁の相手と戦っているというのに、その話をしている輝夜の顔は、

「輝夜さん、何だか楽しそうにお話してますね」

笑っていたのだ。

ヒカリがそれを指摘すると、輝夜は一瞬言葉に詰まって、それからそっば向きながら小さな声で言った。

「……まあ、そうね。永遠亭を動けない私にとっては、唯一の暇潰しなんだし……」

「お姫様は大変なんですネ」

「だから、姫とかそういうのは……はあ。もういいわよ」

「えへへ」

二人が他愛のない話に花を咲かせていると、庭の方から霊夢の声が聞こえてきた。

恐らく竹を小さくする薬が出来上がったのだろう。

「じゃあ、そろそろ行きますね」

「ええ。ちょうどいい退屈しのぎになったわ。ありがと」

「あの、やっぱり七夕のお祭りは来れないんですか？」

輝夜が首を振る。

「無理よ。私はここから動けないもの」

「じゃ、コレ渡しておきます」

ヒカリはポシエットをこそごと漁り取り出したのはまだ何も書かれていない一枚の短冊だった。

「これにお願い事書いて、永琳さんに預けてください。永琳さんはお祭りの方に顔を出すって言ってましたから、私が受け取ります。

そうしたら、私がお願い事を届けてあげますから」

「貴女が届ける……？ 可笑しいこというわね」

「それが私のお仕事ですから。じゃッ！」

「あ、ちよつと……！？」

短冊を輝夜に手渡したかと思うと、ヒカリはパパッと走り去って行

ってしまった。

「遅いわよ。これ運ぶの手伝いなさい」

「ぜ、全然小さくなってるわい!？」

「なってるわよ。ほら、端っこ持ちなさい」

「やっぱし重ッ!？」

「……変な子ねえ」

短冊をヒラヒラ揺らしながら輝夜が呟く。

部屋に戻って文机に短冊を置くと、筆を取りぼんやりとそれを見つめた。

……願い事、何を書こうか。

第三十八話 不機嫌なお姫様（後書き）

妹「こ、こんなの輝夜じゃねえッ！」

夜「久々にこのコーナー出たと思ったたらいきなりもこたんか」

妹「おい、アイツは誰だ！？ あれが輝夜だとも言うのか!？」

夜「た、たまにはお淑やかなキャラ書きたいんだよ！ というか、
一体何をして引き分けしたんだ」

妹「スマ ラDXだ」

夜「……引き分けするようなゲームかそれ。っていうかGC版!？」

そんな俺はピチュー（青カラー）大好きっ子。

DXで一番得意なのはロイだけど。

ちなみにXならアイクとゼルダ姫がメイン。

しかし永遠亭のキャラはいまいち安定しない……

一番触ってる風神録はともかく、永夜抄ってほとんどやったことないしな……

基本、縦シューティングは苦手です；

第三十九話 姉妹喧嘩

「あー、終わった終わった……」

紅魔郷へと帰る道の途中、ヒカリは肩を何度も叩きながらのろのろと重い足取りで歩いていった。

ついさっきまで、ヒカリは永遠亭で受け取った特別製の竹を霊夢と二人だけで運び、どうにか神社の境内に置くことが出来た。

仕事を終えて紅魔郷に戻ると、いつもなら門の前にはいるはずの美鈴の姿が見当たらない。

何処かに隠れて昼寝でもしているのだろうか。

しかしヒカリの予想とは裏腹に、玄關の方から慌てた様子で美鈴が駆け出してきた。

「あ！ ひ、ヒカリさんダメです！ 今お屋敷には入れません！」

「え？ 屋敷には入れないって……？」

ヒカリが美鈴に事情を聞こうとした瞬間、ズウンと重く地面が震えるような音が響いた。

「な、何この音！？」

「中でお嬢様たちが戦ってるんです！ しかも遠慮無しの本気モードで……！」

「本気モード……！？」

本気を出してレミリアとフランが中で戦っているというのだろうか。しかし、フランが本気を出したらありとあらゆるものが破壊されるのでは……？

「咲夜さんが空間を操作して被害を食い止めてるんです。でも、いつまで保つのか……」

「空間を操作？ 咲夜さんってそんなことも出来るんだ」

「の、呑気なこと言ってる場合じゃないです！ わわわ、どうしようしょ！？」

「お、落ち着いて美鈴さん！ えっと、深呼吸です深呼吸！」

「わ、わかりました！ ひっひっふー！ ひっひっふー！」

「……それは何か違う気がする」

それでも美鈴は一応落ち着きを取り戻したらしい。

騒がしい物音が反響する玄関を見つめながら、美鈴はグッと握り拳を作って勇ましく構えを取ってみせた。

「こ、こうなったら私が行きます！ 危険ですのでヒカリさんはここでお待ちください。なに、すぐに戻ってきますから」

「ちょ、美鈴さん！？」

ダダッと一気に駆けこむと、おりゃあ！ という声の後派手な爆発音とぴちゅーん！ という不可解な音が聞こえてきた。

……音は聞こえたのに、美鈴は帰ってこなかった。

「美鈴さん……」

とりあえず黙祷。

「もう、私が行くしかない」

正直、自殺行為にしか思えないのだが戦っているのはフランとその姉なのだ。

素直になれないでいる、常に背中合わせの吸血鬼。

「ただ、止められるかどうかすごく心配なんだけど……」

意を決しヒカリは手に護身用にとブリューナクを形作ると、唾をこくりと飲んで一歩踏み出した。

・

・

玄関へ踏み込んだ瞬間、ヒカリに襲いかかる違和感。

それはいつも見ていた玄関と全く同じ景観なのに、目の前に伸びている廊下が果てしなく伸びているのが原因だった。

いつもなら廊下があつて、東西に伸びる階段があつて、東にはレミリアの自室やテラス、反対側にはフランやヒカリの部屋があるのだが。

まず、階段がなかった。

いや、あるといえばあるのだがそれが妙に遠かった。

普段なら数メートルもないはずの距離なのに、今に限っては果てしなく遠い。

距離で言えば数百メートル、いやもっとかもしれない。

この紅魔館のホールが、異様なまでに広がっている。

咲夜の能力なのだろうか。

ヒカリが思考を巡らせていると、正面奥から爆発音と何かが激しくぶつかり合う音が聞こえてきた。

「……せ、のッ！」

床を思い切り蹴り飛ばしまっすぐ突き進む。

光速で動くヒカリの目に、深紅の姉妹が映った。

「ヒカリさん！？ ストップ！」
「う、わぁ！？」

ヒカリの往く手を阻んできたのは咲夜だった。
神妙な面持ちでヒカリを見据えると、やがて静かに首を振った。

「ダメです。貴女には関わりのないこと」
「でもフランが！」

「レミリアお嬢様も、そのために戦っているのですよ」
「それはどういふ……」

咲夜の瞳が微かに伏せられ、やがて静かに口を開く。

「レミリアお嬢様がフランお嬢様を閉じ込める理由、何だと思いま
すか？」

「フランを閉じ込める理由？ それは……」

ありとあらゆるものを破壊してしまうフランを封じるためだろうか。

「それも、少なからずあります。しかし本当の理由はそうではありません」

「と言つと？」

「……レミリアお嬢様は、お屋敷に閉じ込めることでフランお嬢様
を守っているんです」

「守る……？」

今日の前で全力で殺し合っているというのに？
それは、何か矛盾していやしないだろうか。

「レミリアお嬢様にとって、フランお嬢様はたった一人の肉親。それを失いたくないんです。何人にも触れさせず、あくまで自分の手の中だけで」

「……………」

咲夜は続ける。

「外の世界を知れば、いつか自分を離れ何処かへ行ってしまうかもしれない。そんな不安からフランお嬢様を地下室へ幽閉し、常に分の見える範囲に置いておきたかったのです。ずっと、片時も離れずに」

「……………」

ヒカリは、齒噛みした。

自分の近くに置いておきながら、ずっと傍に居ながら、レミリアはフランの気持ちに気づいていないのか。

「咲夜さん、退いて」

「ヒカリさん、まさか…………？」

「ちよつとあのケンカ止めてくる」

「ま、待つてください！ 弾幕ごっこでなく、本気の殺し合…………ッ！？」

突如咲夜の視界を遮る眩い閃光。

目の前にいたヒカリの髪や全身が金色に輝くと、ヒカリはこくりと小さく頷いた。

「大丈夫。すぐ戻ります」

「で、ですが…………ッ！」

咲夜が声をかけようとした瞬間には既にヒカリの姿はなく、金色の光を纏ったヒカリは一瞬のうちにレミリアとフランの間に立った。

「……何、貴女」

「ヒカリちゃん……邪魔、しないで」

殺気立つ深紅の瞳がヒカリを睨み据える。

ヒカリは軽く二人を一瞥してから槍を構えた。

矛先は、レミリアに向けて。

「……何の真似かしら。部外者が私とやろうつての」

「素直に……」

「何？ 聞こえないわ」

「家族なら、妹なら……素直に言えばいいのに」

キツとレミリアを見据え、ヒカリはブリューナクを高く掲げながら叫んだ。

「このケンカ、私が買った！ レミリア・スカーレット！ 私と戦え！」

第三十九話 姉妹喧嘩（後書き）

突然ですが、このお話を削除しようかと考えております。

理由は色々あるんですが、東方キャラの口調がおかしかったり、お話の流れや展開等、作品としてあまりにも酷く、このまま続けても読者の方を不快にさせてしまうだろうと判断したからです。それと言つのも全てこちらの力量不足。

これまで読んでくださった方々には、本当に申し訳ないです。

このお話をきっかけにユーザー登録、あるいはお気に入り登録してくださった方々は本当にありがとうございます。

このお話は明日から更新を停止しようかと思っています。

……ですが、まだちょっと迷ってます。

このお話を諦めて次を頑張るのか。それとも駄作でも最後まで書き続けるのか……

第四十話 その身貫く意地は固く

「うああああああッ!」

裂帛の気合の元、ヒカリはブリューナクをレミリアに光速を越える速さで鋭く突き立てる。

閃光を纏う切っ先が風を引き裂きレミリアの喉元へと向かう。手加減も遠慮も無しの一撃。

しかしレミリアの姿が瞬時に霞んだかと思うとヒカリの背後に回り込み、その手に禍々しく輝くグングニルを大きく横に薙いだ。

「ッ!」

微かな痛みを感じ、ヒカリは体を反らしステップを踏んで距離を取る。

どうにか反応は出来たものの、ヒカリの脇腹の辺りには微かに血に滲んでいた。

「……遅い」

「吸血鬼の本気……か。すごいな」

「刹那をも超える速度ってわりには、欠伸が出るほど遅かったわよ。それで、本気?」

「……言ってくれる」

なら、もっと速く動けばいい。

それは至極単純なこと。

グッと姿勢を低く構え、そして一度ブリューナクを左手で握り直す。瞬間、ヒカリの立っていた床がまるで大槌で叩かれたかのように沈み、同時にヒカリはレミリアの真正面に飛んだ。

「ッ……!？」

「お返し」

レミリアでも目で追い切れない速度を殺さないまま放たれた右拳。派手に後方へと吹き飛ばし、咲夜能力限界まで広げた世界の端の壁に巨大なクレーターを生み出した。

破壊力は当然速度に比例する。

これを普通の人間が喰らえば、恐らくヒトの原型など留めることは不可能だろう。

だが、今の相手は吸血鬼^{レミリア}だ。

「自分の血なんて、久々に見たわ」

壁に叩きつけられ骨の一本でも折れていてもおかしくないはずなのに、平然と立ち上がり口の中の血をプツと吐き出す。

瞳は深紅。

それは鮮血の色。

猟奇的な瞳をした吸血鬼はニッと小さく微笑うと、グングニルを構え直し宙に浮かび上がった。

背に、黒い蝙蝠の翼のようなものが羽ばたいている。

「いいわ。殺してあげる」

そして加速。

ヒカリのそれと酷似した、いや、それすらも易々と凌駕しているんじゃないかと思えるほどの速度のグングニルがヒカリのブリュナクと打ち合い火花を散らす。

ブリュナクの光の軌跡と、グングニルの紅い軌跡が幾度と交差し、離れ、またぶつかり合い交錯していく。

咲夜には、目の前で何が起っているのかさっぱりわからなかった。

「見えない……ッ!? 二人の動きが、速過ぎて……」

フランにもわからなかった。

いや、咲夜と違って彼女は二人の動きを余裕で捉えることは出来ている。

わからないのは、ヒカリが戦う理由。

何故、ヒカリは戦うのか。

喧嘩を止めるために、私たちではなくレミリアだけに矛先を向けたのは何故か。

思考を巡らせていると、ヒカリの体が反対方向の壁に激しく叩きつけられた。

「く……はッ」

息が、肺から直接漏れる。

脳が強い衝撃で揺さぶられ視界がぼやける。

ただ、視界の先のレミリアが蔑んだような目でこちらを見ているのだけは、何となくわかった。

「部外者のくせに姉妹の喧嘩に割り込むのがいけないの。それに、私と貴女じゃ次元が違うわ」

体の感覚が霞んでいく。

腕に、脚に力が入らない。

私はここで、こんなにも呆気なく死んでしまうのか。

まだ誰の願いも運び終えていないのに。

まだ誰の願いも叶えていないのに。

「嫌……だ」

絞り出すようなヒカリの声。

槍を支えに、ふらつく体に鞭を打ちながら気力だけで立ち上がる。

「……呆れた根性ね。死ねば楽になれたでしょうに」

「私にはまだ、死ねない理由があるんだ。こんなくだらない喧嘩のために、死んで、たまるか……ッ」

「くだらないですって……？」

レミリアの瞳に灯る紅い殺気が全身を包み、魔槍の輝きを一層禍々しく照らす。

「貴女には関係のないことなのに、それなのにくだらないですって？ 何も知らない部外者が何を」

「私が部外者でも、他所者でも、私は、知ってるんだ！」

ヒカリの輝きが増す。

黄金の輝きはヒカリの全てを照らし、やがて直視できないほどの眩い輝きに包まれていく。

レミリアが細めた瞳に、まるで後光に照らし出されたようにヒカリが雄々しく槍を構えて威風堂々と立つ。

「私は、フランの気持ちを知ってる！ そして本当は、レミリアだって知ってるはず！」

「何を言ってるのか、理解できないわ」

「絶対倒れるもんか……！ 私はこの願いを、必ず“叶える”んだ！ だから私は、この意地を貫く！」

「一人で熱血してなさい。どうせもうここで貴女の運命は終結^{おわり}。好

きなだけほざくがいいわ」

グングニルを両手で斜め下方に構え目標を見据える。
ヒカリの、胸元に狙いを澄ます。

「終わりよ。儚い^{ヒカリ}光。神槍『スピア・ザ・グングニル』」

深紅の気を纏った槍が一直線にヒカリへと突き進む。

ヒカリはまっすぐ見据え、同じくブリーナクを投げるべく構える。

「私の、揺るぎない勝利を願え！ 聖槍『ブリーナク・ツヴァイ』」

閃光と共に、まるで流星のように軌跡を描いてグングニルと激しく衝突。

力と力がぶつかり、周囲一帯を軋ませ、紅魔館全体がそのエネルギーに震え窓や壁に激しい亀裂が走る。

「お、お嬢様！？」

「ヒカリちゃん……！！」

やがて収まりきれない力が暴走し、槍と槍同士が爆ぜ二人を凄まじい爆風が襲いかかる。

黒煙と瓦礫に包まれ、紅魔館のロビーはもはや跡形もなく崩壊していく。

「も、もうこれ以上は限界です……ッ！」

咲夜の力が切れると同時に、突然爆音が止み世界に静寂が訪れる。
世界は戻り、目の前に広がる見慣れた紅魔館のロビー。

咲夜は戦慄に身を凍らせた。

「……………！　お、お嬢様！？」

ロビー中央、大きく挟れた床の中心で、ヒカリとレミリアは力尽き眠るようになして倒れていた。

第四十話 その身貫く意地は固く（後書き）

まず一言、申し訳ないです。

昨日は削除するつもりでいましたが、やっぱり中途半端に放り投げるのはよくないと思い、『scarlet star dust』の更新はお話が終わるその日まで続けることにします。

コメントしてくださった方、そして今読んでくれてる読者の方、ありがとうございます。

本編については、今回は俺の大好きな要素がチラホラしてます。

こんな俺にも、力を貸してくれ、クルースニイイイクツ！

……知ってる人がいないって、寂しいなあ（涙

そんなにマイナーだろうか……？

描写はいまいちです。

……しっかし、これじゃまるで俺がかまってちゃんみたいで恥ずかしいなあ；

P・S

コープスパークティ book Of Shadowが面白過ぎて
作業が進まな（ry

第四十一話 姉の真意

「……………あ、れ？」

目を覚ますとヒカリは自室のベットで仰向けに寝かされていた。腕や足に違和感を感じ体を見ると白い包帯がぐるぐると巻かれていて、動かそうとすると鈍い痛みが返ってきた。全身の痛みを感じ思い出す。

「そつか……。私、レミリアと本気で戦ってて……………それで……………」

負けた……………のだろうか。

どうも戦いの最後の部分の記憶が飛んでいて思い出せない。どうにか体を起こそうと上半身に力を入れようとすると、部屋のドアが少しだけ音を立てて開く。

「……………あら。目が覚めたのね」

「レミリア……………」

現れたのはレミリアだった。

普段着ている淡い桃色のドレスではなく、今は白いワンピース姿となっていた。

「ドレスは今咲夜が直してるの。貴女のおかげでボロボロよ」
「は、ははは……………」

ちよん、とヒカリの寝ているベッドにレミリアが腰掛ける。

そういえば、こんなに近くで彼女を見るのは初めてだ。

微かに曇る横顔は、やはり姉妹と言ったところなのかフ란の横顔

とよく似ている。

ちょうど背も同じぐらいだ。

少し、沈黙。

先に口を開いたのはレミリアだった。

「……貴女がフランと出かけているのは最初から知っていたの」
「う……」

「ここ最近のフランの様子はおかしいし、咲夜もこっそり傍観して
たみたいだね。ずいぶんとフランと一緒に夜更かししてたのね」
「……ごめんなさい。一人で行くつもりだったんだけど、最初の夜
にフランに見つかっちゃって……」

「いいわよ。それを止めなかった私にも責任はあるし。……それと」
「……？」

「一つ、訊いていいかしら」
「どうぞ？」

レミリアの深紅の瞳がヒカリを見つめる。

少し、困惑しているように見える。

「貴女の言っていた、願いつて言うのはフランのこと？」

「……うん。私がここに来て最初に訊いた願い事は、フランの願い
事だったから」

「フランの、願い事って？」

消え入りそうな小さな声。

それを聞くのを躊躇うような……いや、レミリアの瞳は震えている。
彼女はフランの願い事を聞くのを、恐れていた。

「私を消してほしい、とか」
「ま、まさか！ そんなんじゃないですよ」

「じゃあ、私以外の家族や友人が欲しい、とか」

「な……！　なんでさっきからそんな否定的なことを」

「怖いからよ」

「……」

レミリアの即答に言葉を詰まらせる。

ヒカリは驚いた。

普段の彼女はもっと自信に溢れていて、常に相手に余裕を見せつけるような性格をしている。

それなのに、目の前のレミリアはひどく小さく見えた。

震える声でレミリアが言う。

「私の身勝手な理由でフランを長い間幽閉していた。だから、もしかしたら……フランは私のこと、恨んでるんじゃないかって、怖くて不安で堪らないのよ」

「レミリア……」

「幽閉していたのは、私の我儘。別に能力なんて関係ない。誰かが壊れようが知ったこっちゃない。私が恐れたのは、外の世界を知った彼女が、いつか自分の元から離れるんじゃないかって勝手に怯えた」

「……」

いつしかレミリアの声は震え、嗚咽が聞こえていた。

「……馬鹿みたい。これじゃまるで拗ねた子供。大好きな妹を独り占めしたいだけの、ただの」

「いい姉妹だね。ちよつと羨ましいな」

レミリアの言葉を遮りヒカリが正直に言った。

きょとんと顔を上げたレミリアに向き直ると、ヒカリはポシエット

の輝望石をそつと取り出した。

「『いつかお姉様と、一緒にお出かけ出来ますように』」
「……………」

輝望石の光に照らされたレミリアの顔がハツとなる。
ヒカリは続けた。

「最初の願い事は、フランの声だった。フランはレミリアのことが大好きで、いつも閉じ込めることを不満には思ってたみたいだけど、悪口とか、そういうことは一切言わなかった。それってきつとお姉^リ様のことが大好きってことだよな」

「……………」
「フランって、すごく純粋だよな。一緒にいてそう思った。まっすぐっていうか、不器用っていうか」

「……………」
「そういうところは、姉妹だからなのかな。レミリアも似てるよね。へへ」
「……………」

ヒカリが微笑むと、レミリアは小さく瞳を閉じゆっくりと立ち上がった。

そのまま部屋を出ようとドアノブに手をかけ、一瞬だけヒカリを一瞥した。

「……………おやすみ」
「あ……………うん。おやすみ」

それだけ言い残してレミリアは部屋を出ていった。
ごろんと仰向けに倒れ、見慣れた天井を見つめフツと息をつく。

「……私のお仕事、いつの間にか変わってるけど気のせいかな。ふふッ。でもまあ、いつか」

誰かを笑顔に出来る素敵な仕事。

それはとても誇らしいことだ。

胸の奥がホッとするこの気持ちは、何だかとても嬉しくてくすぐったい。

去り際のあの笑顔を見て、ヒカリは思った。

……そして同時に、寂しくもなった。

「明日で、ここともお別れなんだよね……」

窓に首を動かして空を見つめる。

金銀に煌めく星の大河が、存外近くに思えた。

第四十一話 姉の真意（後書き）

プロット不足過ぎて、レミリアに圧倒的コレジヤナイ感ががが；
んでもって明日からは最終章かな……

どうでもいいハナシ

紅魔郷クリア出来ねえ……orz

風神録は嫁まで行ければ満足なのでどうでもいいんですが。

第四十二話 別れの時はゆっくりと、確実に

次の日の朝、七の月の七日。

つまり七夕の日。

いつものようにヒカリは日の出と共に目を覚まし、まだ痛みの残る体を半分だけ起こすと軽く背伸びした。

「……痛いけど、歩けないほどじゃないや」

鏡台の前に座って髪を梳かす。

すっかり見慣れてしまった自分の金の髪を丁寧に梳かしていると、コンコン、とノックする音が聞こえてきた。どうぞ、と促すと出てきたのは咲夜だった。

「おはようございます。お体の具合はどうですか？」

「えと……はい。大丈夫です」

「それは何よりです。朝食のご用意が出来ておりますので、準備が出来たら食堂にいらしてくださいね」

「はい」

ちようと髪を梳かしていたので、ヒカリは軽く身なりを整えてから部屋を出て食堂へ向かう。

広々とした食堂に並ぶ丸型テーブル。

レミリアやパチュリー、妖精メイドの姿もほとんど揃っていてどうやらヒカリは最後だったらしい。

少し慌てながら席につくとすぐに朝食が並べられる。

今日の朝食はパンケーキ。

皿に載せられた大きな丸いパンケーキを眺めていると、ヒカリの傍にシロップの入った瓶が一つ差し出された。

「あれ、私だけ？」

見れば他の人の中には小さな小皿が用意されているだけで、丸々瓶一個というのはヒカリだけだった。

「咲夜さんから指示されたもので」

「そ、そうなんだ。ありがとうございます」

妖精メイドはぺこつと小さく頭を下げるとそそくさとキッチンの方向へと戻っていった。

「ヒカリちゃん、おはよ！」

ヒカリがパンケーキと格闘しているとフランの声が聞こえてきて振り向く。

フランが朝食を抱えながらヒカリの隣に腰掛けてきた。

「おはよ、フラン」

「今日、神社でお祭りやるんだよね？」

「うん。……あれ？ 私フランにその話したっけ？」

「さっきお姉様から聞いたよ？」

「レミリアが？ ふうん……」

するとフランが目キラキラ輝かせながら自慢するかのようにはかりに言った。

「それでね！ 私も行けることになったの！」

「行けるようにつて、お祭りに？」

「うん！」

満面の笑みを浮かべるフラン。

ヒカリはレミリアの方を横目でチラと見てからそつと微笑む。

「私、お姉様と出かけるの初めてなんだ！ すつごく楽しみ！」

「ふふ、そっか」

「ね！ ヒカリちゃんもちろん一緒に行くんだよね？」

「もちろん。私のお仕事はまだ残ってるんだからね」

「お仕事終わったら、どうするの？」

その言葉に耳にし、ヒカリは手にしたナイフを止めた。

フランにとってはただ何気なく聞いたつもりだったのかもしれない。
ヒカリは何となく返事しづらくて、笑って誤魔化した。

「え、えつと。じゃあ私は神社の方に行ってこようかな。お祭りのこと気になるし」

「……ヒカリちゃん？」

自分の食器を片づけ部屋に戻るとベッドの上に倒れこむ。

神社に行くとは言ったが、別にそんな予定は決まっていなかった。

それは咄嗟に口から出たただの出まかせだった。

「……フランに、何て言おうかな」

すぐそこまで迫る別れの時。

あの天真爛漫な笑顔を見るとやはり言いづらい。

フランは、何と思うだろうか。

「……………」

ポシェットの輝望石を取り出し掲げてみる。

色々な願いを聞いたせいか、ミルク色の輝きは前見た時より強みを増していた。

もう少しで願いが溜まる。

そういえば、願いが溜まった輝望石はどうなるのだろう。

願いを吸収するという話はよく聞いたが、集まった願いをどのようにして叶えるのかは全く聞いたことが無かった。

「……やっぱり神社が気になるし、覗いてこようか」

このままここにいてもすることが無い気がした。

ヒカリは簡単に身支度を済ませると博麗神社に向かって飛んで行った。

・

・

境内に踏み込むと博麗神社には屈強な男の人たちが集まって作業をしていた。

石畳の道に沿って屋台を並べたり提灯を用意したり……言うまでもなくお祭りの準備だ。

「あら、来てたの」

「霊夢さん」

石畳の道の真ん中で霊夢と出くわす。

彼女は男の人たちになにやら指示を出していたらしく、傍に立っていた彼らは霊夢の指差す方向に木材を抱えながら去っていった。

「お祭りとなると色々準備が大変で困るわ。屋台とかで賑わうのは好きなんだけど」

「そつえばあの竹は……」

「ああ、それなら」

霊夢が顎で示す先に、青々と伸びる竹が見えた。

以前永遠亭で巨大過ぎたものを永琳の作った薬によって縮小された竹は、それでも社本殿より少し小さめの大きさだった。

「あれぐらいでいいでしょ」

「でも、子供じゃどうやっても届かないんじゃない」

「なら、貴女がやれば？」

「え？」

すると、霊夢は竹の葉を指差しながら言った

「貴女があそこまで短冊を運んであげればいいじゃない。願いを運ぶ仕事の貴女なら適任じゃないの」

「あ、そっか」

「……ま、これは紫の提案なんだけどね」

お祭りに来た子供たちの短冊^{願い}を直接受け取る。

まるでお誂え向きなほどにヒカリにぴったりの仕事だった。

「そつえば貴女、願いを集めるのはいいけど、集めたらどうするの？ 自分で帰るの？ それとも、誰かが迎えに来るの？」

「えつと……」

多分、自分がここに来た時の流れ星を使えば帰れるはず……だが、果たして使えるだろうか。

墜落して、妖精の秘密基地にされかけ、願いのセンサーを引っこ抜いて……

今あの流れ星は使い物になるのだろうか。

何だか急に不安になってきた。

もしもここまでやって帰れないとなったら、今までの仕事がすべて水の泡となってしまう。

「……えと、急用を思い出したので帰ります！」

「あ、ちよつと……！」

能力を使って跳び紅魔館の庭へそのまま着地。

流れ星は庭に放置したままで、よくよく考えればあの日以来一度も触っていなかった。

恐る恐る内部のコンソールに手を伸ばしパネルを調べていく。

電源は点く。電源は……

「……う、嘘でしょ」

流れ星は、動かなかった。

内部電源だけ点くが、それ以外の機能はこれっぽっちも動かない。

ヒカリの顔がみるみるうちに青ざめていく。

ここまで来てたのに、ここまで来て……？

「……………？ 何だろ、コレ」

正面モニターの左端に映る、小さな便箋のマーク。

メールが一通届いていた。

それはまさしく最後の希望。

パネルを操作し、便箋のマークにカーソルを合わせる。

白い文面に黒い字で文章が表示され、そこに書かれている文章を読

んでヒカリは一瞬ドキツとして、それからホツと胸をなで下ろした。

「……………わかった。じゃ、最後までお仕事頑張るよ」

山ほど聞きたいことはある。

でも、それは仕事を全て終えて帰ってからゆっくり聞けばいい。

ヒカリは電源を切って流れ星から出ると、昼下がりの空を見上げた。

……………雲一つない青空が、少し眩しかった。

第四十二話 別れ時はゆっくりと、確実に（後書き）

今日は特に無し……かな。

第四十三話 星降る夜に

その日の夜。

丘の上の博麗神社は幻想的な明かりに包まれ、行き交う人の喧騒で賑わっていた。

「これが、幻想郷の七夕祭り……」

境内正面の道を挟みこむように立ち並ぶ様々な屋台。

金魚すくいや射的に夢中になる子供たち。

一見すると普通のお祭りなのだが、その背景にそびえる竹を見ると少しだけ気分が違った。

よく見れば、子供たちの手には色とりどりの短冊が握りしめられている。

「なあんだ。七夕のお祭りって言うても、ほとんど普通のお祭りじゃないの」

「まあまあお嬢様。フランお嬢様も喜んでいるのですからいいじゃないですか」

ヒカリの後ろから、ぶつくさと文句を言いながらレミリアと咲夜が石段を上ってくる。

二人とも今日に合わせて浴衣姿である。

紅い金魚の泳ぐレミリアの浴衣と、紺色に鮮やかな緑色の帯が目を引き咲夜の浴衣。

ちなみにヒカリは、紅魔館でレミリアの別の浴衣を着ないかと勧められたが遠慮した。

「借りたまま返せなくなったら困るしね……」

「お姉様〜！ ヒカリちゃん〜！」

その後ろからすっかり馴染みの声が聞こえてきて振り返ると、レミリアとお揃いの浴衣のフランが飛び込んできた。

「うおっと。フラン、どうしたの？」

「えっへへ。何か楽しくってねー」

「はしゃぎ過ぎよフラン。もう少し落ち着きなさい」

「えー、せっかくのお祭りなのに？ ほらほら、お姉様もあつちでリンゴ飴食べようよ！」

「こ、こら！ 引つ張るんじゃないの……！ すぐに行くから待ちなさい。というか、貴女お金は」

レミリアの手を強引に引つ張って人だかりに突っ込むフランを見て、ヒカリと咲夜は微笑む。

「今のレミリアの顔、すっごく照れてたね」

「いい笑顔でしたよ」

「あっはは……」

それとは対照的に、ヒカリの顔にはうつすらと陰がかかっていた。

「……あっという間に、七日経ちましたね」

「ホント、あっという間だった。あっという間……。光陰矢の如しを体で表しちゃったわけだ」

「フランお嬢様には、何と？」

「……まだ、何も言っていないよ」

「よろしいのですか？ もう短冊のイベントは始まってしまいませんか？」

「いっそ、何にも言わないで出て行こうかな……」

「本気、ですか？」
「……………」

正直、それも真剣に考えていた。
だが首を乱暴に振ってその考えを振りほどく。

「ははは。困ったね。ギリギリまで考えても、結局何も浮かんでこないんだもん」

「ヒカリさん……………」

「あ、いたいた。ちょっとヒカリ、何をポケットとしてるのよ」
「霊夢さん」

人混みをかき分け姿を現した霊夢は、少し息を荒げながらヒカリの手をがっしと掴んだ。

「え？ え？」

「短冊を持った子供たちが押し寄せてるのよ。アンタじゃないと意味ないでしょ」

「わ！ ちょちょちょ、そんな引つ張らなくても行くってば！ わあーッ!？」

霊夢に引きずられながら境内の奥へと進むと、里中の子供たちがヒカリの姿を見るなり目を輝かせながら押し寄せていった。

「おねーさん！ お願いします！」

「私のが先だつてば！」

「ずるいぞ！ 僕のが先だつて！」

「はいはい。押さない、慌てない、威張らない。順番に、あのおねーさんに短冊を渡しなさい」

「「はい！」」

「……意外と面倒見いいんだな」

妙なことに感心している間にも、短冊を握りしめた子供たちは続々とヒカリに押し寄せていく。

まるでアイドルのサイン会のような気分だ。

残念ながら、既に短冊にはサイン願い事してあるけど。

「はい、おねーさん！」

「うん、確かに受け取ったよ」

「えへへ」

短冊を渡した女の子が笑顔を浮かべて小走りに戻っていく。

今度は男の子だ。次は女の子、また女の子、それから……

何十人と短冊を受け取り、そろそろ両手で抱えるには苦しくなったころ、いつか見た甘味処の男の子がやってきた。

「あれれ、君は」

「短冊、持ってきたよ」

「キミで最後かな。うん、確かに受け取りました」

「ありがとう、おねーさん！」

また丁寧に頭を下げて戻っていく男の子で最後か、そう思って振り返ろうとしたら肩を叩かれた。

振り返ると、そこには女の子、と呼ぶにはそろそろきつそうな背の高い女性が立っていた。

というか、少なくとも子供ではないわけで。

「あれ？ 永琳さん？」

「姫にこれを預けたの貴女でしょう？ ……はい」

そつと差し出された短冊には見覚えがあった。

以前、永遠亭で出会った輝夜に手渡したあの短冊だ。

「よろしく、と。あれから貴女のこと、ずいぶん気にかけていらしたようですよ」

「へえ……輝夜さんがか。ちょっと嬉しいかも。どれどれ、お願い事は……」

「ちよつとヒカリ！ 時間も押してるんだから早くしてちょうだいよ」

「も、もう少しぐらい読ませてくれても」

ずいずい背中を押され、仕方なく短冊をしまう。

そのまま霊夢に押し出されてたどり着いたのは、あの堂々とそびえる竹の真下だった。

下から覗きこむとその迫力はいつそう増す。

霊夢が、葉の先端の方を指差した。

「あそこに吊るしてちょうだい」

「うん、了解」

「あ、そうそう。私たちの短冊を渡し忘れるところだったわ。……はい」

手渡されたのは、大量の短冊。

まるで札束のようなそれを、ヒカリは半眼で眺めた。

「……一人、一枚だよ？」

「誰がそんなルール決めた」

「せつこいなあ……。どれ届けるかわからないから霊夢のはノーカ
ン」

「そっちこそケチじゃないの。気前よく全部叶えなさい」

「無茶苦茶な巫女さんだな……」

無理やり短冊を押しつけてくる霊夢にたじたじだったが、とりあえずヒカリは短冊を吊るすために竹へと飛んで枝の前で停止する。

「あ！ 流れ星だ！」

預かった子供たちの短冊を一つずつ丁寧に結んでいると、下の方から女の子の声が聞こえてきた。

とはいえ、声が上がった瞬間に空を見上げても流れ星はもうとつくに消えているだろう。

だからすぐに声も止むはず。

そう思っただけ作業を再開したが、どうも様子がおかしい。

ヒカリが見降ろしてみると、お祭りを楽しんでいる人のほとんどの視線がヒカリに、いや、その奥へと注がれていた。

「……？」

中にはポカンと口を開けて呆けている者もいれば、何故か両手を合わせて何かを拝んでいるようなヒトの姿もあった。

空で、何か起こっているのだろうか。

彼らと同じように空を見上げると、目の前の光景にヒカリは思わず手にしていた短冊を落としかけた。

「な………！」

夜空を切り裂く、白銀の流星。

一筋の光が軌跡を描きながら空を過ぎる、と、また別の流星が夜空を裂くようにして流れ落ちる。

ヒカリの今見上げている夜空に、通常では考えられないほど大量の流星が空を瞬いていた。

幾つもの何度も。

それはまるでこのお祭りを盛り上げようと、空が気を利かせてくれたようにも見える。

だが、ヒカリはわかっていた。

この行為が、誰の手によって行われているのかを。

「……………早いよ。お母さん、お父さん」

残った短冊を全て吊るし終えると、ヒカリは神社へ下りずそのまま竹のてっぺんまで一気に飛んだ。

なおも幻想郷の上空を過ぎる流星。

そのうち、一際大きな流れ星二つがこちらへと向かって飛んでくる。下でどよめきが起こっていたがヒカリは気にせず、向かってくる流星を静かに見据えていた。

流星はやがて巨大な光の玉となって落ちてくる。

ヒカリが合図をしようとした瞬間、背後、それから左右に気配を感じ振り向いた。

「え……、レミリアに、フラン。それに霊夢まで」

「何をボケツとしてるの！？ 下に大勢人がいるってのに何もしないつもり！？」

「ち、違ッ！ あれは私の」

「今度は二つよ。霊夢は両方に攻撃して、私とフランで止めを指すわ」

「浴衣、破れないかなあ？」

「破れないよう、注意なさいフラン」

「はい！」

「ま、ままま待って！？　だから、あの流れ星には私の」

グングニル、レーヴァテイン、そして霊夢の周囲には白と黒の妙な紋様の玉が浮遊する。

三人とも視線は真上から降り注がんとする流星に絞られていた。

「霊符『夢想封印』」

「れ、霊夢待って！？　私の話を」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「禁忌『レーヴァテイン』」

次々と戦闘態勢に入る三人。

もはやヒカリの言葉は届いておらず……

「あ、あわわわ……！？」

臨界点寸前の三人の術符はもう、止まらない。

「お母さん、お父さん、逃げてええええええ！！」

張り裂けんばかりの声で叫ぶヒカリ。

その声を遮るようにして迸る三人の攻撃は、あっという間に流星に直撃し、神社の上空で粉微塵に砕いてしまった。

目の前の光景に、ヒカリは言葉が出なかった。

黒煙の向こうで、流れ星はヒカリの時と同じように軌道を反らし神社の崖下へと落ちていく。

「ふう……危機一髪ってヤツね」

「最近は隕石が多くて困るわ」

「よかったねヒカリちゃん！……？ヒカリちゃん？」

震えるヒカリの姿を見て、フランが心配そうに声をかける。

「あ、あの……」

「何？御礼ならいいのよ。そのかわり短冊の願い事を」

「今の、私の……」

「ヒカリ、言いたいことがあるならハッキリと言いなさい。そんな小さな声じゃ聞こえないわ」

「あれ……ヒカリちゃん、泣いてる？」

「あれはあ！私の、お母さんと！お父さんの流れ星だよあ！！」

『……………え』

三人の表情が凍りつき、一瞬世界が音を失くしてしまったかのような静寂が訪れた。

第四十三話 星降る夜に（後書き）

美「……………」

夜「……………」

美「あの、いいんですか？」

夜「いいんだよ。グリーンだよ……………」（泣）

美「ところで、私の浴衣は？」

夜「……………」

美「……………何か言ってくださいよお！？」

次回作は頑張る。

そろそろ終わるな……………このお話も。

第四十四話 親子水入らず

七夕祭りを一段落終えた博麗神社。

社の一室で床に平伏す二人の少女と明後日の方向を向く少女とがいた。

その先には、意外と質素な格好をした二人組の男女が苦笑いを浮かべていた。

「……………申し訳ございません」

「……………せん」

「なるほど。ヒカリも同じ歓迎を受けていたのか。ずいぶん見ないうちに幻想郷は過激になっていたわけだ」

ハッハとあっけらかんと笑う男性に対し、女性の方はかなりキツイ表情を浮かべながら軽薄な笑みを浮かべる男性に唇を尖らせる。

「もう、笑い事じゃありません！ もしもヒカリに何かあったら…」

「…」

「いやいや失敬。でも、ヒカリはご覧の通り無事なんだから良しとしようじゃないか」

「お母さん、お父さん、ごめんなさい。私がもう少し早く気づけば……………」

二人が幻想郷に来ることは、流れ星で見たメールでヒカリは事前に知っていた。

『七夕の夜に迎えに来る』

ヒカリが紅魔館に墜落してから、すぐにメールは来ていたのだが仕事のせいで結局最後の夜になるまで気づかなかったのだ。

だから誰にも知らせる余裕が無かった。

……いや、お祭りで忘れていたというのものもあるのだが。

「いいんだよヒカリ。……ところで、いつまで頭を下げているんだい？ ヒカリがお世話になった人たちに、私たちからもちやんと御礼が言いたいんだがね」

「そうそう。こうま……かん、でしたっけ？ ここは神社のようだけど、ここがそうなの？」

「あ、いえ……。ここは博麗神社で紅魔館じゃ……」

「あら、そうなの。じゃあ、御礼にうかがわないと」

「そ、その必要はないわ」

そっぽ向いていたレミリアが、やや上ずったような声でヒカリの母に答えた。

珍しく緊張しているのだろうか。

おずおずといった様子でヒカリの母の前にきちんと手をついて座した。

もの凄い違和感。

「わ、私が紅魔館の主のレミリア・スカーレットよ……です。えと、このた、このたびは」

「お姉様、カクカクしてる」

「ふ、フランも頭を下げなさい。私たちは二度もこの親子を墜落させているのよ」

「う……、ご、ごめんなさい」

二人でしおらしく頭を下げると、ヒカリの両親は少し困惑したような顔になった。

「ううん……、そんなに頭を下げられてしまうとこちらも困ってし

まうね」

「ヒカリに何かあれば人工衛星でも落とそうかと思っていたのだけれど……」

「そ、そういうことを冗談でも言ったらいけないよキミ」

「でも、ヒカリはこの通り元気みたいだし、その件は水に流しましよう」

「……………すみません」

カエルみたいな低姿勢でもう一度姉妹が謝る。

……………このままじゃ一向に話が續かない。

どうしようかとヒカリが考えていると、父親の方から口を開いた。

「えっと、キミたちに頼みたいことがあるんだけどいいかな」

「頼み……………ですか？」

ヒカリの父親が頷く。

「まず一つ。ヒカリが一番お世話になった紅魔館の人に、ご挨拶をしたいから、一度紅魔館にうかがってもいいかな」

「そ、それぐらいなら、喜んで」

相変わらずカクカクしながらレミリアが答える。

父親はそれともう一つ、と指を立てた。

「ヒカリと、二人っきりでお話したいから席を外してくれと助かるな」

「あ……………」

久々の親子の対面だというのに、今ここにレミリアたちがいては邪魔になるだけだ。

そんな配慮も出来ないのかと自分を戒めながら、レミリアはこほんと咳払いをして立ち上がった。

「で、では私たちは失礼します」

「ありがとう。それから、博麗の巫女さん、少し部屋を借りるよ」
「ど、どうぞ」

そそくさと部屋を出ていく三人を見送ると、部屋の空気が少しだけ和んだような気がした。

お母さんと、お父さんと三人きりだなんて、いつ以来だろうか。

「お母さん！ お父さん！」

思わず二人の胸に飛び込むと、懐かしい匂いと感触がヒカリの全身を包みこむ。

優しくて、温かい感触。

「ふふ。元気そうで何よりだ」

「ずいぶん派手に暴れたりしてたみたいだけど、無事でよかったわ」

「え……？ 派手に暴れたとかって、何で知ってるの？」

「ん。ポシエットを開いてごらん」

言われた通りポシエットを開く。

ここには自分の術符と、二人から預かった輝望石が入っている。

……まさかこの中に発信器でもあったのだろうか。

「輝望石には私たちの方に定期的にヒカリの声を届けてくれる、ちよつとしたオマケみたいな機能がついているのさ」

「えー？ そんなの知らなかったよ？」

「輝望石は、人の意思や心の声を集めやすい特性があるの。別名チ

「ヤネリングストーンとも呼ばれてたりするわ」
「知らなかった……」

と言うことは、今までの出来事のほとんどは筒抜けだったということとで、そう考えるともの凄く恥ずかしかった。

「……じゃあ、あの事も当然？」

二人は無言で頷く。

それは、目の前の両親が元幻想郷の住人で天人であつたらしいという
こと。

「別に隠すつもりはなかったんだけどね。何となく言いそびれてただけさ」

「私たちは、あなたの想像通り、元天人よ」

「元天人……じゃあ、今は？」

「それはヒカリだって知っているだろう？」

「……星の子、ってこと？」

「ああ、そうさ」

ヒカリの頭を撫ぜながら父親は微笑む。

ゆつくりと、語り聞かせるように言った。

「私たちは、元は幻想郷の天界で平凡に暮らしていたのさ。けれどね、天界は死も苦もない退屈な世界。私たちは天人でありながら、そのことに疑問を抱いたんだ。せっかく辛い苦しい修行を乗り越えたのに、その力を何者にも使わないことにね」

「だから私たちは、何か出来ることはないかと考えた。そして、地上の人が空に祈る姿を見てパツと思いついたの」

「それが……流れ星？」

「そう。地上の人の願いを聞き届け、それを叶えられたらどれだけ素晴らしいか。自分が幸せの運び手になれるんだよ？　とてもロマンチックじゃないか」

そう語る父の横顔はひどく無邪気で、まるで夢を語る子供のように純粹で眩しかった。

「そこで私たちは、天界より上の世界、ソラを目指したわ。その当時の天界では大騒ぎになってしまったのだけれどね」

「天人なのに、変なことを始めたから？」

「おかげで私たちは追放されてしまったんだけど、行き先は皮肉なことに目指していたソラの世界だった。闇と虚空の世界を彷徨うち、私たちはふとあるものを発見した。それが」

「輝望石……？」

満足げに頷く父親の顔を見ると、こっちまで何だか照れ臭い。

「調べた結果、人の祈りや想いに呼応して光るという変わった性質を持っていることが分かった。どうにか研究を続けて願いを叶えることは出来ないだろうかと色々とした。そして、特性を利用して願いをひたすら集めている時に変化が起こった」

「突然、輝望石が金色に光ったかと思えば、輝く粒子を巻き散らしながら一気にソラを駆け抜けてどこかへと飛んで行ってしまった。そして次の瞬間、下界でとある少女の願い事が叶ったのよ」

「え、えっと……お母さんとお父さんの、願いが集まって、金色で……？」

「ははは。いっぺんに覚える必要はないさ。これからゆっくり慣れればいい」

「じゃあ、私の髪が金色になったのはどうして？　天界の桃を食べたらこうなったんだよ？」

「ううん……」

すると、意外なことに父親の顔が曇った。
ヒカリの髪を触れながら真剣に観察している。

「……キミは、どう思う？」

「……わからない。けど、ずいぶん綺麗に染まっちゃったわね」

「まるで輝望石の輝きと同じ色だな。何か関係があるのかも」

「ええ〜？ 二人にもわからないの？」

「ごめんね。研究はまだ未知の部分が多くて……」

母親の残念そうな顔を見てヒカリもそれ以上追及できず、数歩後ずさってはあと重いため息をつく。

「滅茶苦茶だよ。ねえ、これからどうするの？ 流れ星墜落しちゃったんだよ？」

「うむ。それなら心配いらないよ」

父親のポケットから小さな機械が顔を覗かせる。
何だろう、リモコンのような……

「こんなこともあるのかと、大気圏に予備の流れ星を待機させているのさ」

「ヒカリの経験が生きたわね」

「それじゃ、私実験体なの！？」

「はっはは。失敗からはちゃんと学ばないとな」

「むう……」

「あそつだ。ヒカリの持つてる輝望石、見せてくれる？」

ポシェットの中の、ミルク色の輝望石を取り出すと二人の眉根が微

かに揺れた。

「あら……？　これが輝望石？」

「そうだよ。……え、もしかして、私失敗しちゃったの……？」

恐る恐る訊ねると二人は縦にも横にも首を振らずただ呆然と輝望石を眺めていた。

二人とも、ミルク色の輝望石に目を奪われている。

「……？」

「不思議だね。私たちの見ていた輝望石の反応と違っている」

「さっきも言ったけど、輝望石に願いが集まると金色の光が現れるのだけれど……」

「金色なのは私だけど？」

「ははは。これじゃまるで、ヒカリが願いを吸収しちゃったみたいだな」

「わ、笑い事じゃないって！」

一大事だ。

このままでは、せっかく集めた願いを叶えることが出来ないかもしれないではないか。

ここまで頑張ったのに、そんなのは困る。

「じゃあ、私が調べてみるよ。それが終わるまで少し時間がかかるかもしれないから……うん。じゃあ、お母さんと紅魔館に行っておいで。その間に終わらせておくから」

「う……うん。わかったよ。じゃあ、ちゃんと調べてよ？　いい？」

「もちろん。心配しなくても大丈夫だよ」

ヒカリから輝望石を受け取ると、父親は室内灯の明かりにかざして

みたり、ちょっと叩いてみたりと実験を始めた。
ここにいてもしょうがないし、お母さんと一緒に紅魔館に挨拶しに行こう。

……あ、そういえば。

「お母さんとお父さんの名前、教えてよ」

「ん？ 言ってなかったか？」

「ずっとお母さんとか、キミとか、名前で呼び合うなんて忘れていたから仕方ないわよ」

ヒカリの目の前で、二人は何だか新婚さんみたいに初々しく見つめ合いながら小さく呼び合った。

「ねえ、彦星さん？」

「改まって呼ばれると照れるね。織姫さん」

第四十四話 親子水入らず（後書き）

ベタベタ……；

このお話も、あと2、3話で終わりかな。

PS

ツイッターを見た人はお気づきかとは思いますが、現在うたプリに
めちゃくちゃハマっておりますww

翔君&音也が非常にカッコイイですッ！

大好きです！ マジLOVE1000%でっすッ！

言っまでもありませんが、俺は男ですからね（迫真

第四十五話　ほんの小さな歓迎会

輝望石を調べるという彦星を博麗神社に残し、ヒカリと織姫は紅魔館へと続く道をゆつくりと、仲良く手を繋ぎながら歩いていた。

能力を使ってしまうえばあつという間なのだが何となくこうして静かに歩いていたかった。

ホームシックのせいも、あるのかもしれない。

夜風の吹き抜ける森を抜けると、やがて紅いレンガ造りの大きな館が見えてきた。

「あれが紅魔館なのね？　へえ、見た目も紅いんだ」

「私が墜落したとき、助けてくれたのがあそこの人たちなの。みんなとってもいい人だよ」

「ええ。ヒカリのその顔を見ればわかるわよ」

門を越えて玄関を開けると、早速紅魔館の妖精メイドとメイド長である咲夜が丁重に出迎えてくれた。

「ようこそ、紅魔館へ。ヒカリさんの母君さま」

「咲夜さん……！」

「あら、素敵な歓迎ね」

メイドに囲まれながらロビーを往くと、その奥でレミリアやパチュリー、小悪魔とフランが綺麗に整列していた。

皆、手には小さな花束何か握りしめている。

「有り合わせで申し訳ないですが、小さな歓迎会を催してみました」
「まあ……それはそれは。どうせならあの人も連れてくればよかったわね」

「……ヒカリさんの父君は？」

「神社でちよつと、ね。研究の邪魔しちゃ悪いし、私たちだけで楽しみましょうか」

「でも、お父さんに悪いよ」

「いいのよ。こんな女の子だらけの中にむさい男が一人いても無粋でしょ？」

「……普通自分の旦那をそこまで酷く言わないと思うんだけど」

花束を受け取り、一人一人に謝辞の言葉を述べる織姫。

自分のことということもあつて凄く照れ臭い。

あまりに恥ずかし過ぎて、思わずこっちも笑ってしまう。

「ありがとう。ヒカリを助けてくれた人たちが、こんなにも素敵な人で嬉しいわ」

「ヒカリさんも、毎晩両親のためにと張り切ってお仕事を全うしてましたよ」

「ふふふ。親孝行な娘をもつと鼻が高いわ」

「も、もう！ 恥ずかしいなあ……」

ふと、織姫が花束を抱えたままレミリアとフ란の元へと歩みよる。フ란はニパツと笑って花束を手渡し、レミリアも少しぎこちない動作で手渡す。

「はい、おかーさま！」

「ありがとう、フ란ちゃん。それにレミリアちゃんも」

「えっへへ」

「急ごしらえの歓迎会だけど、楽しんでくれたかしら」

「ええ、もちろん。ヒカリのこと、二人とも本当にありがとう」

ボン！ という効果音が鳴ったかどうかはわからないが、織姫の言

葉にレミリアの顔が一瞬で真っ赤になった。

「い、いちいち改めて言わなくても結構。ヒカ리를助けたのも、ただの気まぐれだし……」

「お姉様、恥ずかしがってる？」

「ば、バカ！ んなわけないでしょ！」

「本当、素敵な姉妹ね。そっくりだし、とても仲が良くて」

「うわわッ！？」

「きゃッ！」

織姫の両腕が二人を包む。

それは二人にとって初めての温もり。

……いや、もしかしたら遠い昔に包まれていたであろう懐かしく、照れ臭くもある不思議な温もり。

「ヒカ리와友達になってくれて、ありがとう。あなたたちが助けてくれなかったら、ヒカリはどうなっていたか……」

「……………」

「……………へへ」

レミリアは目を点にして、フランは照れ臭そうに笑った。

呆けるレミリアを見て、織姫は心底不思議そうな表情になった。

「……………あら？ どうかした？」

「な、何でもないわ。その、くつつかれると暑いんだけど……………」

「ええ〜？ もうちょっとギュッてしてもらおうよ〜？」

「もしかして、恥ずかしいのかしら？ ふふッ、レミリアちゃんは可愛いわね」

「だ、誰が……………む」

よりいっそう強く抱きよせられ、言葉が詰まる。
結局、レミリアは終始しかめっ面だったけれど、織姫は満足したのかそっと手を離れた。

「……こ、コホン。じゃあ、乾杯でもしましょうか。せっかく出会えた記念ですもの。貴女、お酒は平気？」

「ううん、ごめんなさいね。流れ星に乗る時は飲酒厳禁なのよ。もの凄く揺れるから戻しちゃうかもしれないし、それに法律で厳しく取り締まってるのよ」

「そう……。じゃあ、ジュースならいいわよね」

「ええ。もちろん」

用意していたワインとは別に、オレンジジュースを織姫のグラスに注ぐ。

全員分のグラスに注ぎ、レミリアの合図で宙に掲げる。

「乾杯」

オレンジジュースを一気に飲み干すと、ヒカリと織姫はううんと唸りながらグラスを上げ上げと見つめていた。

「あら、どうかしたの？」

レミリアが訊ねると、二人は同じタイミングで振り向いて、これまた同じ言葉を言った。

「これ、ちょっと砂糖が足りない」

「これ、お砂糖が少ないわね」

「……それは母親譲りだったのね」

せっかく乾杯して締めたと思ったのに、二人の言葉でどつと笑いが起きて乾杯が仕切り直しとなった。

笑いあう親子。

笑いあう姉妹。

しかし、一時訪れた楽しい時間はそう長く続くわけもなく……

「じゃあ、ヒカリ。そろそろ帰りましょうか」

「あ……」

帰る。

その言葉を聞いてヒカリと、それからもう一人が表情を凍りつかせた。

「……え？ ヒカリちゃん、帰っちゃうの……？」

「ふ、フラン……」

メイドを押し退けフランがヒカリに詰め寄る。

今の今まで言い出せなかった別れ。

フランの手が、きゅっとヒカリのローブを強く握りしめた。

「ヒカリちゃんはまだ帰らないもん！ 私と遊ぶんだよ！ もっと、

もっといっぱい遊ぶんだよ？」

「ふ、フラン私……」

ローブを握る手が、痛い。

フランの力が強く、強くヒカリを掴んで離さない。

ヒカリが、フランの手を握ろうとした瞬間、別の手がフランの手をヒカリから引き剥がした。

「あ……ッ」

「フラン、止めなさい」

レミリアが強く、窘めるような口調で言った。

首だけ動かしヒカリと織姫を一瞥すると、軽く頭を下げた。

「……ごめんなさい。妹が迷惑を」

「レミリア……いや、でも」

「離してお姉さまッ！」

「ッ……フラン！」

レミリアの手を振りほどき、フランはメイドやヒカリの間を風のよ
うに突きぬけて紅魔館の外へと飛びだして行ってしまった。

「ま、待ちなさ」

レミリアの言葉を、織姫の手が遮る。

そして優しい瞳でヒカリを見据えると、フランが飛び出して行った
夜の闇の向こうを指差す。

「ヒカリ、行ってきたさい」

「お母さん……」

「あなたの友達でしょう？ 自分でちゃんとお別れの挨拶しなきゃ」

「………うん」

でも、何を言っているのかわからない。

何てフランに声をかけたらいいのかわからない。

フランに、何て言われるのか怖い。

もしかしたら、もう二度とフランに口を聞いてもらえな

ドンッ！

「うつわ！？」

思い切り背中を叩かれ、前のめりにつんのめるヒカリ。
振り返ると、背中を叩いたのは織姫だった。

「フランの願い事、聞けるようにならなきゃ立派な星の子にはなれないわよ？」

「でもさ……」

「ほら、行くの！」

「は、はい！」

これ以上ここで二の足踏んでいたら母に怒られてしまう。
脱兎の如く駆け出したヒカリの姿は、やがて夜の闇の中へと溶け込んで消えていった。

「ふむ。あの子の優柔不断な性格は誰に似たのかしら」

「すみません。私の方からフランお嬢様に何か一言言っておけば……」

「そんなことしたらあなたの頭に隕石を落としますよ」

「は……？」

「ふふ。『可愛い子には旅をさせよ』って言うでしょ？ 自分の苦難ぐらい、自分の力で乗り越えなきゃ、誰かの願いを叶えることなんて出来ないわ」

「し、しかし……」

心配する咲夜を見て、織姫はクスツと小さく笑みを漏らした。

「過保護過ぎるのもよくないわよ？ たまにはメイドの言うこと無視して思いつき遊びたいっていう子もいるのよ？」

「え？ それはどういう……」

「じゃあ、そろそろお暇いぐさしましょうか。素敵な歓迎会、ありがとうでは」

織姫は小さく会釈すると、そそくさと玄関を抜けて歩き出した。

「あ、お待ちください！ 神社までお送りしますから」

「いいえ、結構よ。自分が歩いた道ぐらい覚えていきますもの。ふふ」

そう言つてヒラヒラと手を振りながら、織姫は元来た道をゆっくりとした足取りで戻つていった。

「はあ……。すごく、マイペースな方なのでしょうか。ペースが全く掴めませんでした」

「……母親、か」

とどこそこ歩く織姫の姿を見つめながら、そんな言葉がレミリアの口から零れる。

私の両親は、どんなだったのだろうか。

「……………」

考えて、止める。

居もしなければ、覚えてもない両親のことを考えて何になるのだろうか。

……けれど、一つだけわかることがある。

「……あの温もりは、嫌いじゃない」

第四十五話　ほんの小さな歓迎会（後書き）

やっぱりクライマックスを書くのは少し辛いな……；

お気に入り登録、ありがとうございます。

もっしだけ、お付き合いいただけると嬉しいです。

第四十六話 私はいつでも、ソラにいるから

紅魔館を飛び出したフランを追って、ヒカリは自分の流れ星が墜落したあの湖に辿り着いた。

虫の音と風の音以外全く聞こえない湖は空に浮かぶ月を照らしている。

ヒカリは走って、何度もフランの名前を呼んだ。

「フラン！ どこなのお！」

声が虚しく湖面に響く。

辺りを見回して、もう一度走り出す。

獣道走る中、ヒカリは後悔していた。

どうしてもっと早くに言わなかったのだろう。

どうして言えなかったのだろう。

もっと早くに別れのことを言っておけば、フランも理解してくれたかもしれないのに。

私は何を恐れていたのだろうか。

「……フラン」

幻想郷に来て出来た最初の友達。

無邪気で底抜けに明るくて、ちょっと危ない能力を持っているけど、素敵な友達。

そんな友達に、何も言わず、何も言えずに別れるのは……嫌だ。

森の中へと入り走り続けていると、やがて開けた場所に出た。

「あ」

ぽつかりと空いたその場所の真ん中に、フ란の姿はあった。

何故かフ란は呆然と立ち尽くしながら、時々体を揺らしながら夜空を見上げていた。

まるで空に何か探しているように。

「フ란、何をしてるの？」

「……流れ星、探してるの」

「え……？」

予想もしなかった言葉にヒカリが聞き返す。

フ란は空を見上げたまま答えた。

「咲夜が言ってた。流れ星が消える前に願い事を言えば、その願い事が叶うって」

「それは……」

「ヒカリちゃんと離れ離れになりませんようにって、願うの」
「……………」

何か、答えなくては。

ヒカリが頭の中で言葉を考えていると、それより先にフ란が振り向いた。

懇願するような上目づかいに、涙をいっぱいに溜めて。

「ヒカリちゃん、私とずっと一緒にいようよ。お姉様も咲夜も説得して一緒に紅魔館で遊ぼうよ。きっと、きっと楽しいよ？」

「……うん。そうだねフ란。ずっと一緒にいらればたぶん、楽しいと思う。……けど、ダメだよ」

「どうして……！？」

張り裂けんばかりの声が胸に突き刺さる。

でも、こればかりはどうしようもない。

私は……星の子なんだ。

人から願いを集めて、その願いを叶えなきゃいけない。

「星の子は集めた願いを叶えるんだよ。私は今日、幻想郷の人の願いをいっぱい受け取った。だから、この願いを叶えなくちゃ」

「そんなの、ヒカリちゃんじゃなくてもいいじゃん！ お母さんとか、お父さんでも……！」

「これは私のお仕事だもの。私がやらなきゃ、ダメなんだよ」
「そんなの……！ そんなの……ッ」

フランの声が震え、やがて消え入るように少しずつ小さくなっていく。

その小さな体が、いつにも増して小さく見えた。

ヒカリが一步踏み込んで、フランの傍に立つ。

「あ……」

無意識に、ヒカリがフランを抱き寄せる。

紅魔館で織姫が見せたそれと同じように、両手でフランの体を抱きしめた。

「……ごめんね。もう少し早く言えばよかったんだけど」

「ヒカリちゃん……？」

腕の中、フランはヒカリが微かに震えていることに気がつく。
顔を上げると、両目に零れんばかりの涙が揺れていた。

「私もね、フランと離れるのは嫌だよ？ だけど、私が帰らなきゃ、せつかく集めた願い事が叶わなくなっちゃうよ。そうだったら、願

い事をした人が悲しんじゃうよ」

「だ、だけど……私、寂しいよ！　せつかく出来た、友達なのに…

…」

「大丈夫だよ、フラン」

「……え」

涙をいっぱいに溜めた顔のまま、ヒカリは無理に微笑んだ。

涙がこぼれたかもしれない。

けれど、笑った。

「私はいつでも、フランを見守ってる。ずっとずっと空の上だけど、ずっと見守ってあげるよ」

「ヒカリちゃん……」

「それにほら、会いたくなったら流れ星にお願い事すればいいんだよ。そうすれば、もしかしたら叶うかもよ？」

ヒカリがそつと手を離し二歩三步と後ずさると、その背後に二つの人影がこっそりと姿を見せる。

「ヒカリ、迎えに来たわ」

「そろそろ戻らないといけない時間だからね」

彦星と織姫だった。

二人の姿を一瞥すると、ヒカリはそのままゆっくりと歩き出した。

「ひ、ヒカリちゃん！」

背中に手を伸ばしかけて、そして止める。

ヒカリが振り返って笑ったから。

「フラン、本当に今までありがとうね！ フランのおかげで幻想郷で楽しく過ごせたよ」

「私たちからお礼を言うわ。ヒカリと仲良くしてくれて本当に、ありがとう」

「何、そんなに寂しがることはないさ。私たちは」

彦星がそつと夜空を指を指す。

宝石を散りばめたように満天の星が広がる、ソラを。

「私はいつでも、ソラにいるから！」

「ヒカリちゃん……ヒカリちゃん！」

フランがもう一度名前を叫ぼうとした瞬間、突如ヒカリたちの姿が七色に輝き包まれフランは思わず目を瞑ってしまった。

「……………」

フランが目を開けたその時、既にヒカリの姿はなかった。何も残らない、呆気ないお別れだった。

……お別れ、だったのだろうか。

「……私まだ、さよならって、言ってないよ……？」

ヒカリも、フランも、さよならとは言わなかった。

ヒカリが忘れていた？

それとも、フランが忘れていた？

あまりに唐突過ぎて、そんな言葉をかける余裕すらなかったのだろうか。

「……また、会えるんだよね？ ヒカリちゃん」

空を見上げる。

一筋の光が、幻想郷の空を綺麗な曲線を描きながら彼方へと消えていく。

フランはそんな星をしばらく見つめて、やがて紅魔館の方へゆっくりと歩き出した。

・

・

「これで、よかったのかい？」

「うん。これでいい」

ヒカリはだんだんと小さくなっていく紅い屋根を見送りながら言った。

「さ、これから忙しいんだから早く帰らないとね！　お願い事、全部叶えなくっちゃ！」

ヒカリは努めて明るく言った。

震える体を、こぼれ落ちそうになる涙を、二人に見せまいと、必死で。

「……………ありがとう、フラン」

やがて雲や大気層を抜け、見慣れたあの漆黒の世界が目の前に広がっていく。

これからまた忙しくなる。

頬をバシバシ叩いて気合いを入れ直すと、くしゃくしゃになってい

た顔に少し喝が入ったような気がした。

「お母さん！ お父さん！ 早く願い事、叶えよう！」

早くみんなの願いを、叶えなきや。

ヒカリたちを乗せた流れ星は、遙か銀河の彼方へ吸い込まれるようにして消えていった。

第四十六話 私はいつでも、ソラにいるから（後書き）

明日最終回&あとがきです。

……そういえば、今日の早朝の5時だけ妙にアクセス数が伸びたのは何だったんだろうか？；

最終話 s c a r l e t s t a r d u s t

あれから二カ月が過ぎ、幻想郷に秋が訪れた。吹き抜ける風は意外と肌寒く、それはそう遠くない冬の始まりを告げるようだった。

そんな中、フランにはある習慣が出来ていた。それは皆が寝静まった真夜中に、こっそりと屋根に飛び乗って星空を見上げることだ。

「……………」

ただぼんやりと星の散らばる空を見上げるだけだが、フランはあの日からほぼ毎日続けていた。

毎晩眺め続けた結果、星座の名前やその星の位置まで分かるほどに。フランは、流れ星を探していた。それも、普通の流れ星ではない。

大切な友達が、この幻想郷に訪れるために用いる特別な流れ星。

「早く、来ないかな。来たら、真っ先に私が撃ち落としてあげるのに」

聞き様によつては相当物騒な言葉だが、フランの顔はとても嬉しそうだった。

そう。

フランは待っていた。

いつか、また会えると信じてずっと夜空を眺めていた。

あの日のように、空から友達が落ちてくるような素敵な夜を願いながら。

「……………」

流れ星に願いを祈れば、その願いが叶う。

あの時メイド長に言われた言葉は本当だった。

深紅の流星に願った、フ란の願い事は見事に叶った。

それは彼女のおかげというのもあるのだけれど、願いが叶ったことに変わりはない。

流れ星は、願いを叶えてくれる。

フ란はそう信じて、今も流れ星を探している。

……ただ、フ란が探している流れ星は少し違うのだけれど。

「紅い流れ星は見つかったかしら？」

不意に声と、それから甘い香りが漂ってきて振り返ると、そこには姉であるレミリアが小さなカップを持って立っていた。

「お姉様」

「はい、ココア。まだ秋とはいえ、こんなところにおいては体が冷めてしまうわよ？」

「へへ。ありがとう」

両手でココアを受け取り、そつと口をつける。

ほどよい甘さだけど、もし彼女が飲んだら、やっぱり砂糖が足りないとか不満を言うのだろうか。

……きつと言っただろうな。

「お姉様、お砂糖足りないよ？」

「もう。貴方まで甘党になってどうするのよ」

「……元気に、してるのかな」

「……どうかしらね」

レミリアがフランの真横に腰掛ける。

「そういえば、姉妹二人つきりで話をするだなんていつ以来だろうか。もしかして、初めてではないだろうか。」

「結局、みんなの願い事って叶ったのかな？」

「うん、どうなのかしら。少なくともフランの願い事は叶ったんでしょ？」

「うん！……あれ？ お姉様、私の願い事知ってたの？」

「え？ そ、それは……その、咲夜が言ってたわよ？」

「……？ 咲夜に、話したっけかなあ？」

首を傾げるフランを見て、レミリアがホッと胸をなで下ろす。

本人の知らぬところで得た情報だし、たぶん機嫌を悪くするだろう。せつかく前よりは仲良くなれたのだから、この距離を壊してしまうのはもったいない。

「あ！ 流れ星だ！」

フランが指差す先で、小さな光が煌めいて夜空を滑る。

流れ星は一瞬で消えてしまったのだが、フランは両手を組んで一生懸命何かお祈りをしていた。

内容は、わかっているのだけれど。

「けど、流れ星に流れ星を願っていいのかしら？」

「大丈夫だよ。きっと願った瞬間ここに来てくれるもん。そうしたら、また落とせばいいの！」

「……怒られても知らないわよ」

そうして二人並んで、星空を見上げる。

寒さも増して空気が住んでいるせいか、いつもより星がハッキリと見える。

これならあの流れ星もすぐに見つかりそうだ。

「……あ！　また流れ星！」

フランが再び指を指す。

今度はすぐには消えず、柔らかな曲線を描いてゆっくりと滑っていた。

両手を組んでお祈りをしようとしたフランの横で、レミリアはそつと微笑み魔槍を握りしめた。

「あれ？　お姉様？」

「落とすんでしょう？　付き合うわよ」

「だって、あの流れ星は……あ！」

フランが顔を上げ満面の笑みを浮かべた。

紅く軌跡を描く流星が、夜空に軌跡を描いていた。

立ち上がる姉妹。

その手に、剣と槍とを携えて。

「えっへへ。やっと来たよ！　待ちくたびれちゃった！」

「こっという再会ってどうなのかしらね。……ふふ」

不敵に微笑み、二人は同時に屋根を蹴っ飛ばして飛んだ。

深紅に輝く流星を見据え、手にした得物を振りかざす。

息の合った姉妹の力が激しくぶつかり合い、流星は呆気なく地面へと叩き落とされる。

墜ちた流星はそのまま紅魔館横の森に墜落し、地面を大きく抉って黒煙を纏いながらやがて動きが止まる。

「ほら、フラン」

「うん！」

体を一気に加速させ、流星の墜落した場所に飛び込む。

見覚えのある巨大な黒い隕石。

ぶずぶずと黒煙を吐きだしながら、やがて内側からごんごんとくぐもった音が響くと、ドン！ と隕石にぽっかりと穴が開いた。

そして中から、夜闇の中でもハッキリと見える金の髪が姿を見せた。

「ぶつはあ！ ま、また落とされた……って、うおわッ！？」

「ヒカリちゃん……！」

フランに首に抱きつかれ、そのまま勢いで地面に落ちる金の髪の少女。

月明かりに照らされ少女の姿がうつすらと明らかになっていく。

白いローブ、小さなポシェット。

金の髪と同じ金色の瞳には、小さく涙が溜まっていた。

「声が聞こえたから来たのに……。あ、荒っぽい再会だね……。はは」

「ヒカリちゃん！ やっぱ、私の声聞こえてたの！？」

「もちろん。私は願い事を聞くため、叶えるためにここに来たんだから」

ニツと、フランの笑みに負けないよう微笑みながらヒカリは言った。

「『私とまた遊べますように』。いいよフラン。今日はとことん一緒に遊ぼうか！」

「うん！」

二人は立ち上がると、並んで紅魔館目指して走り出す。
今まで会えなかった分、何を話そうか。何をしようか。
フランの頭の中は、そのことでいっぱいだった。

「ヒカリちゃん！」

「何？ フラン」

「ありがとう！ 私の願い事、聞いてくれて！」

ヒカリが見たフランの笑顔は、流星に負けないくらいとても素敵で
綺麗な笑顔だった。

〈 F i n 〉

最終話 s c a r l e t s t a r d u s t (後書き)

あとがき、30分後です。

・あとがき・ s c a r l e t s t a r d u s t

このたびは、『s c a r l e t s t a r d u s t』を読んでいた
だき、ありがとうございます。

今作は約14万文字という、今まで書いたお話の中でも一番の長さ
のお話でしたけど、いかがでしたか？

ここまで書き続けられたのも、読者の皆様方のおかげです。
ありがとうございました。

二次創作長編もこれで第5作目。

……とはいえ、前作よりも酷いお話となってしまいました；
いろいろと申し訳ないです。

プロットが足りずお話の展開やキャラの心情等があやふやであつた
り、原作キャラとの相違だったり、正直言えば今作は駄作です；

書きたい！　って思うと書いてしまう性格ゆえ、ある程度プロット
が出来上がると書きたくなっちゃうんですね；

もっと細かくプロット作って、お話の道筋とか、キャラの細かな設
定など、次回作への課題です。

それでも最後まで読んでくれた読者の皆様には感謝してます。

……だいたい、日に120人前後だけど；

個人的には、今まで書いたお話の中で一番酷いんじゃないかな；

次回作は一応数種類ほどお話のアイデアがあります。

けど、もう少し時間をかけて準備するので、公開は早くて来月の頭
くらい……かな？

もしかしたらそれまでの間に短編を書くかもしれません。

それと、次回作今度からちよつと更新頻度を下げようかと思つてます。

1話1話の出来をもう少しあげたいので、そこんとこ了承ください。

……まあ、気まぐれですのでまた毎日更新できるかも……しれませんが。

ええ、では今作のあとがきを終了します。

……の、前にヒカリたちの設定だけメモして終わりました。

『緋彗ヒカリ』

数秒の思い付きで出来たキャラです。

緋彗、というのは緋色の彗星から。

わかりやすく中途半端な能力になってしまい、もの凄く残念な性能に……

術符は主に光、速さに関する用語で出来てます。

・瞬符『光陰矢の如し』

ことわざ、月日が経つのは早い、という意味です。

・刹符『プラチナラピッドファイア』

白金はヒカリの元の髪の色。

ラピッドファイアというのはエアガンの機構の一つで、引き金を引きっぱなしにして撃ち続けることが出来る機構のことです。

・迅符『マツハ・ストレイト』

マツハは音速、ストレイトは単純にグーパンです。

・瞬光『せつなさみだれうち』

元ネタは、女神異聞録ペルソナの弓を用いる特殊攻撃。

本来は漢字で『刹那五月雨撃ち』ですが、ゲーム内ではひらがな表記なので『せつなさみだれうち』となっています。

『ランス・オブ・ブリューナク』

聖槍『ブリューナク・ツヴァイ』

ブリューナクってのは、ケルト神話に登場する武器です。

貫くもの、という意味の太陽神ルーの所有物。

穂先が5つに分かれていて、それぞれの切っ先から放たれた光は5人まとめて貫けるんだとか……

俺は、ブリューナクと聞くと特務局が出てくるんですけどねw

ツヴァイをつけたのも、そのシリーズのモノと関係してます。

それと、ヒカリの両親は七夕と言えはあの二人でした。

このお話を思いついたのはちょうど七夕でしたから必ず出そうと思っていました。

二人のお話は有名ですので割愛。

天界に帝というのは何となくつけたオリジナルです。

ううん、そんなところかな？

中途半端になっちゃいましたが、あとがきを終わります。

次回作をお楽しみに。

それでは。

・あとがき・ s c a r l e t s t a r d u s t (後書き)

こんな駄作でしたが、最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

次回まで、しばしの別れ。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1759v/>

Scarlet Stardust

2011年9月11日16時26分発行